

蜚東洋医学研究所版

現代仮名表記

鍼灸重寶記綱目

本郷 正豊



はじめに

本書は、大塚鍼灸院門下が鍼灸重宝記を学ぶために、蛭東洋医学研究所にて作成しました。鍼灸重宝記は、本郷正豊により著されました。今から三百年以上前の享保三年（一七一八）に出版されましたが、現代の鍼灸師に必要な考え方が豊富に記載されています。

江戸時代初期に出版された、鍼灸要法指南（岩田利斎 貞享三年 一六八六）、鍼灸抜粹大成（岡本一抱 元禄十二年 一六九九）、および鍼灸重宝記は江戸時代における鍼灸三大臨床書と呼ばれています。素問靈樞のように漢文で書かれた医学書に対して、鍼灸重宝記は和文で平易に書かれているので、漢文の素養のない鍼医も学ぶことができました。

當流傳受の奥儀において、本朝針家の祖が無分で、自身は末流にあると記載されるように、本郷正豊は夢分流の御菌意斎の曾孫と言われています。しかしながら、本書は打鍼法に偏ることなく、撚針法や菅鍼法を含め、鍼灸術を幅広く取り上げています。

素問靈樞などに記載されている重要な内容が、仮名文字で解りやすく記載されています。漢字に併記された振り仮名は、単語の読みだけでなく、単語が意味する内容も記載されています。意味の解らない単語があった場合、他の頁に記載されている単語を検索することで単語の意味を知ることができる場合があります。

鍼道秘訣集では、鍼医に必要な考え方を中心に記載されましたが、鍼灸重宝記には経穴や手技の詳細が豊富かつ具体的に記載されています。岡部素道を治療した八木下勝之助は、経絡に基づいた治療を行うとともに、本書を愛読したと言われています。従って、本書に記載された内容は、現代人にも十分に適用できると思われます。

治療をする際は、自身の志を正しくし、患者に心を付けて思いを針に映し、わき目をふらず話を慎む、という記載を心に刻み、優れた針医になれるように精進したいと思います。

令和四年二月二十四日

圖解 正訣 鍼灸重寶記綱目 全

鍼灸ノ之法 診脉ノ之要 經絡ノ之辨

群書摘英 疾在二腠理二一熨炳ノ之所レ及フ

鍼灸重寶記

病在二血脉二一鍼右ノ之所レ及フ 長生要訣

衆病ノ之論 畢^{「トク」}以^{「ク」}和字^{「ヲ」}記^{「シ」} 便^{「リス」}庸工^{「ニ」}

鍼灸重寶記序

夫^{「それ」} 以^{「おちんみ」}れば 人^{「ひと」} 此腔子あるときは 則^{「すなわち」} 此病あり。

百年の光陰 誰か恙なきの人あらん乎。恙あらば 須^{「すべから」}く 早^{「はや」}計るべし。

其^{「その」}計^{「はかりごと」}の頼む所也、針灸^{「しんきゅうやく」}茶^{「薬」}にして、而^{「し」} 茶餌^{「やくじ」}の及^{「およ」}ざる者、鍼灸^{「しんきゅう」}に因^{「よら」}ずんば 争^{「いかに」}か其危急^{「そのききゅう」}を救^{「すく」}はん也。

今^{「いま」}之工^{「このこう」}たる者、多^{「おおく」}は其針灸^{「そのはりきゅう」}之通達^{「のつうたつ」}する所^{「ところ」}を知^{「し」}ずして、而^{「し」}て疾^{「やまひ」}に逢^{「あつ」}ときは 則^{「すなわち」} 妄^{「みだり」}にこれ^{「これ」}を治^{「ちし」}て、而^{「し」}て之^{「これ」}が功^{「こう」}を求^{「もと」}め也。

譬^{「たとへ」}ば猶^{「なほ」}規矩^{「きく」}を習^{「なら」}はずして材椽^{「さいせん」}を試^{「こころ」}み、寸鐵^{「すんてつ」}を持^{「もた」}ずして闘場^{「とうじょう」}に赴^{「おもむ」}きて其利^{「そのり」}を得^{「え」}んと 欲^{「ほつす」}るがごとし。遂^{「つい」}に得^{「う」}べからず焉。

隱士^{「いんし」}本郷^{「ほんこう」}正豊^{「せいふ」}、嘗^{「かつて」}惻隱^{「そくいん」}惠民^{「けいみん」}之心^{「のこころ」}を以^{「もつ」}て醫道^{「いどう」}重宝^{「じゅうほう」}記^{「き」}を編輯^{「へんしゅう」}し、已^{「すで」}に大^{「おお」}に世^{「よ」}に行^{「おこな」}る。 今復^{「いままた」} 針灸^{「しんきゅう」}重宝^{「じゅうほう」}記^{「き」}を著^{「あらわ」}す。

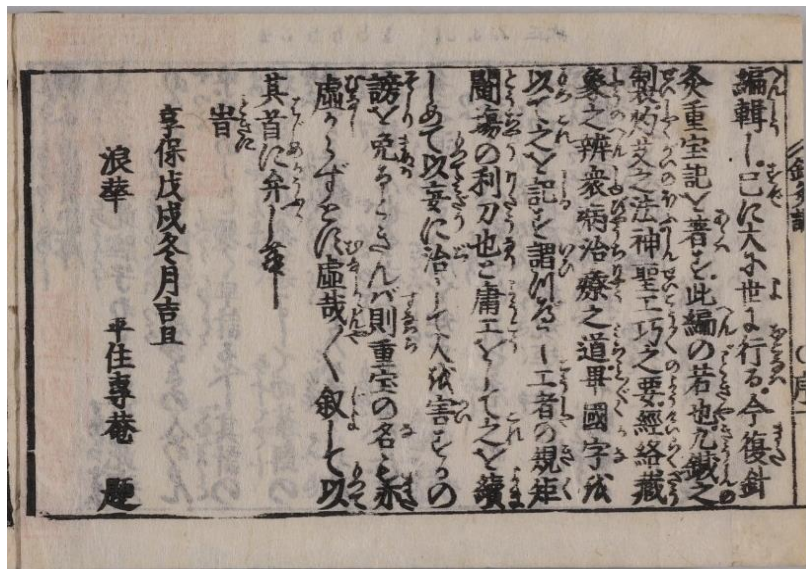
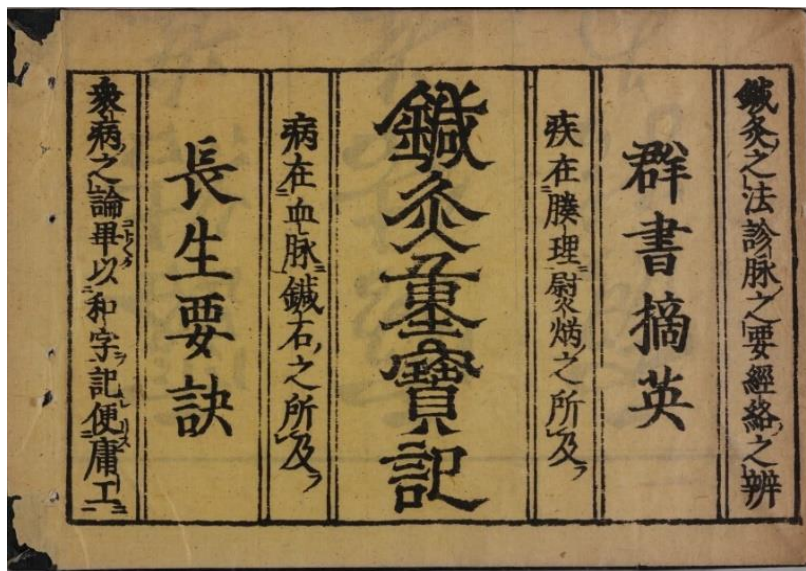
此編^{「このへん」}の若^{「ごと」}也、九鍼^{「きゅうしん」}之製^{「のせい」}、灼艾^{「しゃくがい」}之法^{「のほう」}、神聖^{「しんせい」}工巧^{「こうこう」}之要^{「のよう」}、經絡^{「けいらく」}藏象^{「そうさう」}之辨^{「のへん」}、衆病^{「しゅびょう」}治療^{「ちりょう」}之道^{「のち」}、畢^{「いよいよ」}く國字^{「こくご」}を以^{「もつ」}て之^{「これ」}を記^{「し」}す。謂^{「い」}つべし工者^{「こうしや」}の規矩^{「きく」}、闘場^{「とうじょう」}の利刀^{「りとう」}也と。

庸工^{「ようこう」}をして之^{「これ」}を讀^{「よま」}しめて、以^{「もつて」}妄^{「ちやう」}に治^{「ち」}して人^{「ひと」}を害^{「がい」}するの誇^{「そり」}を免^{「まぬが」}るときんば、則^{「すなわち」} 重宝^{「じゅうほう」}の名^{「な」}も亦^{「また」}、虚^{「むな」}からずとす。虚^{「むな」}哉^{「や」}く、叙^{「じよ」}して以^{「もつて」}其首^{「そのはみめ」}に弁^{「こころ」}しむ。

告^{「こ」}

享保^{「きやうほう」} 戊戌^{「つちのえいぬ」} 冬月^{「とうげつ」} 吉旦^{「きつたん」}

浪華^{「なにわ」} 平住^{「ひらすみ」}專菴^{「せんあん」} 題^{「だい」}



鍼灸重寶記綱目目録	二丁
九鍼之圖説	二丁
撓針の手法并圖	二丁
打針の手法并圖	四丁
管針の手法并圖	五丁
五藏六府の圖説	六丁
臟腑内景の圖	十三丁
五藏色脉証候虚實の同	同丁
五藏の色體	十六丁
四知の論	同丁
診脈三部九候六脉相脉	十八丁
七表八裏九道七死之脉	同丁
死証の見脉	廿二丁
腰の見様	廿三丁

天地人男女の法	廿四丁
太極の論	廿五丁
十四の鍼法	廿六丁
補瀉迎隨の論	廿七丁
營流傳令の奥義	廿二丁
針淺深の論	廿四丁
阿是の穴	廿五丁
針刺く技の法	同丁
撓針の技の法	廿六丁
針灸慎の事	同丁
灸穴の點る法	同丁
十二經旺分の時	廿七丁
四季毎日十二時の入神	同丁
血忌血支長病日	廿八丁

針灸の製法	同丁
灸火の法	同丁
尺すゝ定の法	同丁
髮際ゝ定の法	同丁
大椎ゝ定の法	同丁
灸補瀉の法	同丁
灸量ゝ冷する法	同丁
灸瘡ゝ發する法	同丁
灸瘡ゝ洗ふ方	同丁
同痛ゝ止む方	同丁
同愈藥	同丁
肩身尺寸の定法并小圖	同丁
十四經仰伏總圖	四十三丁
十四經脉并是動靜生の病	四十三丁

附奇經八脉	五十一丁
經絡之要穴并圖説	五十二丁
○經絡要穴之目錄	五十七丁
神庭手今上星	同丁
前頂	同丁
後頂	同丁
強間	同丁
風府	同丁
曲差	同丁
五處	同丁
承光	同丁
通天	同丁
絡却	同丁
上枕	同丁
正營	同丁
承靈	同丁
腦空	同丁
風池	同丁
天牖	同丁
本神	同丁
頭維	同丁
額厭	同丁
懸顙	同丁

懸顙	同丁
曲顙	同丁
率谷	同丁
天衝	同丁
浮白	同丁
竅陰	同丁
完骨	同丁
素髎	同丁
水溝	同丁
兌端	同丁
顴交	同丁
承漿	同丁
廉泉	同丁
攢竹	同丁
睛明	同丁
陽白	同丁
聽官	同丁
頰車	同丁
耳門	同丁
翳風	同丁
地倉	同丁
聽會	同丁
大迎	同丁
心腹の部	同丁
天突	同丁
璇玑	同丁
膻中	同丁
巨闕	同丁
上脘	同丁
中脘	同丁
建里	同丁
下脘	同丁
水分	同丁
神闕	同丁
陰交	同丁
氣海	同丁
石門	同丁
關元	同丁
中極	同丁

曲骨	同丁
雲門	同丁
中府	同丁
氣舍	同丁
缺盆	同丁
幽門	同丁
通谷	同丁
陰都	同丁
石闕	同丁
不容	同丁
臑滿	同丁
梁門	同丁
關門	同丁
太乙	同丁
滑肉門	同丁
天樞	同丁
氣衝	同丁
期門	同丁
腹哀	同丁
腹結	同丁
章門	同丁
京門	同丁
肩背の部	同丁
肩井	同丁
肩髃	同丁
大推	同丁
身柱	同丁
命門	同丁
陽關	同丁
腰俞	同丁
長強	同丁
風門	同丁
肺俞	同丁
厥陰	同丁
心俞	同丁
膈俞	同丁
肝俞	同丁
膽俞	同丁

[illegible]

解絡	條口	犢鼻	脾關	束骨	中脘	附陽	承筋	委陽	臑扶	大都	商丘	地機	笑門	大敦	水泉	築賓	行間	蠡溝	曲泉	陰廉	天井	中渚	大陵	後谿	少府	臂臑
百七	百丁	百丁	百丁	百五	百丁	百五	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百九	百九	百九	百八	百八	百八	百七	百丁	百六	百丁	百五	百四
衝陽	巨虛	三里	陰市	通谷	金門	崑崙	承山	委中	臑門	隱白	公孫	漏谷	血海	三陰交	大白	復溜	大鍾	湧泉	然谷	照海	交信	大敦	中封	膝關	足五里	陰包
百丁	百丁	百丁	百丁	百五	百丁	百丁	百丁	百丁	百三	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百九	百九	百九	百八	百八	百八	百七	百丁	百六	百五	百四
脂谷	豐隆	巨虛	梁丘	至陰	京骨	僕參	雅揚	合陽	浮郄	會陽	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交	三陰交
百七	百七	百七	百丁	百五	百丁	百丁	百五	百丁	百三	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百丁	百九	百九	百九	百八	百八	百八	百七	百六	百五	百四	百四

陽交	百九	陽輔	百六	臨泣	百十	竅陰	百十	腰眼	百十	鬼哭	百十三	斜交諸病	百十三	中風	百十三	傷寒	百十五	痰癰	百十七	霍乱	百十	膈噎	百十
陽關	百八	外丘	百十	絕骨	百十	地五會	百十	患門	百十	風市	百十	斜差	百十三	痺痛	百十四	熱病	百十	痢病	百十八	傷食	百十九	咳逆	百十
環跳	百十	陽陵泉	百九	光明	百十	丘墟	百十	交谿	百十	四花	百十	翳外馬	百十	瘰癧	百十五	中寒	百十七	泄瀉	百十八	嘔吐	百十九	瑞促	百廿

眼目	百一丁	痛風	百四十七	腹痛	百五十五	痲痺	百四十四	痔漏	百一丁	遺溺	百一丁	消渴	百一丁	黃疸	百卅九	在亂	百一丁	眩暈	百一丁	諸熱	百一丁	下血	百一丁	欬証	百卅二	痰飲	百卅
耳病	百四十九	脚氣	百一丁	腸痛	百六十六	手指痛	百一丁	脫肛	百四十三	遺精	百四十二	淋病	百一丁	水腫	百一丁	諸虫	百一丁	中惡	百一丁	健忘并怔忡	百廿五	虛損	百一丁	咳嗽	百三十二	哮喘	百三十一
鼻病	百一丁	疝氣	百卅十	腰痛	百一丁	心痛	百一丁	遺精	百一丁	濕瀉	百卅	脹滿	百卅八	積聚	百卅八	癰疽	百卅六	汗	百卅四	吐血	百卅三	諸氣	百一丁				

牙齦	百四九	唇病	百五十	口病	百五十
舌病	百丁	咽喉	百五十三	癰疽	百五十五
疥	百丁	瘰癧	百五十五	諸瘡	百丁
便毒	百丁	癰風	百丁	損傷	百五十五
中毒	百丁	虫獸	百丁	煩死	百丁
氣付	百五十七	癰死	百丁	脉絕	百五十五
婦人	百五十八	調經	百丁	崩漏	百丁
帶下	百丁	諸痛	百五十九	血道	百丁
求嗣	百丁	妊娠	百丁	產前	百五十五
產後	百丁	乳病	百六十一	絕子	百丁
小兒脉法	百丁	驚風	百六十四	癰瘤	百丁
痺	百六十六	癰積	百丁	瘰癧	百六十五
黃疸	百丁	吐瀉	百丁	初生雜病	百六十五
補灸押鉞	百六十九				

鍼灸重寶記綱目録

はじめに	1
鍼灸重寶記序	2
九鍼之圖説	12
撚針の手法	14
打針の手法	16
管針の手法	18
五臟六腑の圖説	19
五藏六府内系の圖	31
五藏の色脉 証候虚實の例	32
五藏の色體	36
診脉	40
死証の見脉	46
腹の見様 井 生死を知る法	48
天地人男女の法	50
太極の論	51
十四の鍼法	52
補瀉迎隨の論	54
當流傳受の奥儀	61
針淺深の論	62
阿是の穴	64
針刺て抜ざるを抜の法	64
折針を抜の法	64
針灸 慎の事	65
灸穴を點する法	65
十二經旺分の時	67
四季の人神	67

毎日の人神	67
十二時人神	67
血忌日	67
血支日	68
長病日	68
艾葉の製法	68
灸火の法	68
尺寸を定る法	68
髮際をさだむる法	70
大椎をさだむる法	70
灸補瀉の法	70
灸するとき眩暈を治する法	70
灸瘡を發する法	70
灸瘡を洗ふ方	70
火痂落て後あらふ方	71
周身骨度尺寸の定	73
十四經仰伏總圖	75
十四經脉是動所生病	76
奇經八脉	88
禁針禁灸の圖	89
禁灸の穴	90
禁鍼の穴	94
經絡要穴仰伏之圖	97
經絡要穴	98
頭面の部	98
心腹の部	110
肩背の部	120

肘手の部	127
腿脚の部	137
秘傳の穴	154
鍼灸諸病の治例	157
中風	157
痺痛	158
痿	158
傷寒	160
中寒	161
痲瘡	163
痢病	163
泄瀉	163
霍乱	165
傷食	165
嘔吐	165
膈噎	166
咳逆	166
喘促	166
痰飲	166
咳嗽	168
諸氣	168
鬱證	169
癆瘵	169
吐血	171
衄血	171
嗽血	171
咯血	171
下血	171
虚損	171
汗	172

諸熱		172
健忘		174
眩暈	かしらくるめき めぐるめく	174
中惡	あしきものにあらはるる..... ^れ	174
癩癧	くつち.....	175
諸虫	もろくろのむじ.....	177
積聚	はらのかたまり.....	178
黃疸		178
水腫	はれやまび.....	180
脹滿	かめばう	180
消渴	かはきのやまび.....	181
淋病		181
溺濁	いばりこじる.....	183
遺溺	いばりたれ	183
遺精	もうぎょうをみる	183
秘結	だいべんつうせき.....	183
痔漏	いぼぢ あなぢ	184
脱肛		184
頭痛	かしらいたむ	186
疝癖		186
手指		187
心痛	むねいたみ	187
腹痛	はらのいたみ	189
脇痛	わきいたみ.....	189
腰痛	こしのいたみ	190
痛風		192
脚氣	あしのいたみ	192

疝氣	193
眼目	194
耳病	194
鼻病	196
牙齒	197
唇病	199
口病	199
咽喉	200
外科門	202
瘡瘍	202
癰風	205
癰風 大麻風 皆かつたい也	205
損傷	205
中毒	206
虫獸	206
頓死	206
諸の氣付	208
溺死	208
脉絶	208
婦人の科	209
妊娠	212
産後	213
小兒の科	215
小兒の脉法	215
驚風	218
驚癇	220
五疳	221
癖積	222

瘡疾 せうじつ	おじり	黄疸 おうだん	222
吐瀉 としゃ	あげくだし		222
初生雜病 しよせいざひつ	はじめてうまる れ		224
神灸神鍼 しんきゅうしんしん の方法 ほうほう			227
後付			229
おわりに			231

九鍼之圖説

鑱鍼 長さ一寸六分 熱の頭身にあるを刺し陽氣を瀉す。

圓鍼 長さ一寸六分 分間の氣を摺摩し肌肉を傷らず。

提鍼 長さ三寸五分 脉を按し氣を取て邪氣を出すに。

鋒鍼 長さ一寸六分 癰疽の熱に刺して血を出すに用ゆ。

鈹鍼 長さ四寸、はば二分半 癰腫に刺し大膿をとるに。

員利鍼 長さ一寸六分 癰痺をとるに用ゆ 又暴氣をとるに。

毫鍼 長さ一寸六分 寒熱の痛 痺 經絡にあるにもちゆ。

長鍼 長さ七寸 ふかき病とをき痺痛をとるに用ゆ。

大鍼 長さ四寸 水氣關節を出ざるを瀉するに。

鍼經に云く、九鍼の宜く各もちゆべき所あり、長短大小おのく施す所

あり、其用を得ざれば病去ず。

病ひ淺くして針深ければ良肉を傷て皮膚癰をなす。

病深して針淺ければ邪氣かへつて後に大病を生ず。

病小にして針大なれば氣瀉することはなはだしく元氣を傷る。

病大にして針小なれば病氣泄ずして針その宜きを失ひ亦敗をなす。

砭 鍼 今日本にもちゆるは、ぢく八分、穂八分 ふとさ麥の莖ほどにし、先を

三角にして管に入てはぢく。腫物の血膿をとり、又日腫に痙癖に刺して血をとる。

又邪氣あつまり痛をなすとき刺して血をとれば、邪氣去てすなはちよし。俗に三稜

針といふ。

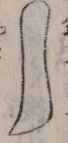
撚針 大形、軸六分、穂一寸五分より二寸 長短さまぐあり。

針者の氣に應じて用ゆ。

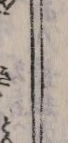
打針 ぢく一寸、穂二寸二分。

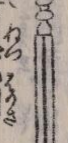
管針 ぢく一寸、ほ一寸八分。

鍼灸重寶記綱目 本郷正豊編集
九鍼之圖説

鑱鍼  長二寸六分
熱の頭身に刺し陽氣を瀉す

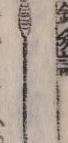
圓鍼  長二寸六分
分間の氣を按摩し肌肉を傷らば

提鍼  長二寸五分
脈を按し氣を取て邪氣を出さる

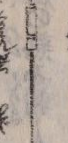
鋒鍼  長二寸六分
癰疽の熱を刺し血を出さる用也

鍅鍼  長二寸四分
二分半癰腫を刺し大膿を出す

員利鍼  長二寸六分
癰疽をさる小用也又暴氣を出す

毫鍼  長二寸六分
寒熱の痛痺經絡にさる小用也

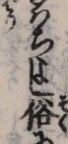
長鍼  長二寸七寸
癰疽をさる小用也

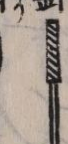
大鍼  長二寸四寸
水氣關節に出さる依瀉さる

鍼經云く九鍼の宜く各りらる
へる所の長短大小のく施す
所の其用を得されば病去る病の
浅くは針深きは良肉を傷て皮
膚癰をさる病深くは針浅きは
邪氣がつか後か大病を生ず病
小ひて針大きれば氣瀉さる
もかゝるく元氣を傷る病大

とく針小ければ病氣泄さる針その
宜く失ひ亦敗る

砭鍼  今日本にあら
はく八分穂八分ふる麥の莖を
みし先を三角く管に入てさる
腫物の血膿をさる又日腫は疔癰は
刺し血をさる又邪氣のさる痛を
さる刺し血をさる邪氣をさる
とあらは俗に三稜針といふ

撚針  大形軸六分
穂一寸五分ろ二寸長短さる
のり針者の氣に應て用也

打針  三寸二分
管針  三寸八分

撚針の手法

先わが志を正して病者に心を付て思を針にうつし、目を外へふることなく、人と物語せず慎むべし。

さて左の足をしき右の膝を立て、針先を口にふくみ、左の手にて腹をうかがひ、針すべき穴をまづ左の大指の爪の角にて五六呼ほどの間その穴を按。さて中指と大指を合せて穴の上にをき、右のひぢを膝にのせて針を穴にあて、左の中指にて針口をおさへ、食指と大指を上て針の中をもち、右の食指大指にてかろく針をひねり下す。急にひねり急に下せば痛て堪がたし。

息の出入にしたがひて左右の食指と大指にて和かに押くだす。

此に補泄迎隨溫涼寒熱の刺やうあり。

經に云く、刺てとどむること春夏は二十四息、あきふゆは三十六息にして針を出すとあり。しかれども老人、小兒、よはき人、おとろへたる人には、五六呼にして針をぬくべし。

針のぬきやうは、先すこし拔出し、さて持なをしてぬきはなす。中ゆびにて針の口をおしもむなり。是を針口をとづるといふ。針をぬくこと急に手あらければ針口より血出る。これを榮衛をやぶるといふ。若血出ば何度も穴をもみとぢよ。

凡そ、こゑたる人にはふかくさし、瘦たる人にはあさくさし、大人にはふとき針、小兒にはほそきをもちゆべし。

始て針をまなぶ人は先わが外腿に刺て、針のとをりやうをよく試て他人にもちゆべし。

金針はもつともよし、銀針は鈍し、鉄針はわるし。殊に久しく用ゆれば肉の内にて折るものなり。

「撚針之圖」

圖之針ヲ燃



燃針の手法

先^{さき}より志^し派^は平^{へい}く病^{びやう}者^{しや}に心^{こころ}を付^つく
思^{おも}ひ針^{はり}みち目^めと外^{がは}へさうとあへ全^{ぜん}
物^{もの}語^ごを慎^{しん}び下^{くだ}さく左^{ひだり}の足^{あし}を
右^{みぎ}の膝^{ひざ}より立^たて針^{はり}先^{さき}を右^{みぎ}にやぐ左^{ひだり}の
手^てを腹^{はら}よりさへ針^{はり}とさく穴^{あな}と
右^{みぎ}左^{ひだり}の大^{おほ}指^{ゆび}の爪^{つめ}の角^{かく}より五六呼^ご
やくの間^{あひだ}その穴^{あな}を擦^すさて中^{なかつ}指^{ゆび}と大^{おほ}指^{ゆび}
と合^あはせ穴^{あな}の上^{うへ}より右^{みぎ}ののちら

膝にのぞき針を穴にあて左の中指
 あて針口をさへ食指と大指ととく
 針の中より右の食指大指をくみ
 く針の移り下を急ふの移り急ふ
 下で痛て堪へ息の出入ふらさぬ
 と左右の食指と大指を和うふ押
 へこれ此は補泄迎隨溫涼寒熱の刺
 やうなり經はよく刺てとびるる香
 要は二十四息わきあひ三十六息は
 と針を出るとありそれと老人小
 兒とち人をもとへる人あは五六呼
 あり針とあは針のゆきうへ先
 とく抜出さて持の強くてなき
 なる中かびあて針の口をくみ

圖之の鐵を打



あり是は針口と云ふ所の針をやく
と急ぐ手ゆゑに針口より血出る
これ采衛と云ふ所の若血出何
度も穴より出るんを云ふは
人ゆゑよくに瘦る人ゆゑさ
さ大人ゆゑに針小兒ゆゑに
それ成りたる下始めて針をさぶ
人先より外腿は刺く針のさう
やふまゝ試て他人よりさぶ
金針のつととは銀針は鈍鉄
針より殊に久き用かれ肉
の内を折るあり

打針の手法

打針うちはりのさすく刺ととれれ一身いん采衛さいゑ

といひて主とせんとす。なり。鐵經云々。
 浮氣の經は隨ひ還る者。衛氣と
 あり。其精氣の經ふところにてあは
 者。榮といふ氣は血道の外より入
 かり。あはる。血は筋の底に流るる
 者なり。氣は陽衛なり。血は陰榮なり。
 氣の外とあはりて
 肌肉とあはる。

打針の手法

打針はふかく刺ことなけれ、一身は榮衛をもつて主とすることなり。

鍼經に云く、浮氣の經に随ひ運る者を衛氣といふ。其精氣の經にしたがひてめぐる者を榮といふ。

氣は、血道の外をうかみて、かろくめぐるぞ。血は、筋の底を流めぐる者なり。

氣は、陽衛なり。血は陰榮なり。氣は外をめぐりて肌肉をあたため、血は筋の内をながれて肌膚を潤ほす。これに依て、打針はふとくして槌にてうつゆへ、榮衛をうごかし骨髓へ徹ゆる理なり。

手法は病人にたちより左の足をしき右の膝をたて槌を右の方に置べし。まづ槌の置所を定めざれば忘るもの也。さて針を口に含み、左の手にて病人の腹ををうかがひ、左の中指を食指のうしろに重て穴にをき、針を左の中指と食指の間にさしはさみ、針先の肌にはさならぬほどにして槌をとり針を打なり。皮を切に痛まざるやうに打なり。針入こと二分ほどにして槌に手應あり。二三分より深く入べからず。打て氣血をうごかし、推して肉に徹し、ひねりて補瀉迎隨をおこなふ。針を抜て後、針口を閉べし。

推手つよく槌をかるく打べし。推手よはく槌になまりあれば痛むなり。槌の打やうは、乱になく一二とかぞゆる如く手づまよく打べし。

打針の本意は、腹ばかりに用ひて外の經に用ひず。諸病はみな五藏より生ずるにより其本をもとめて治す。或目筋爪を病ときは肝の腑に針を刺。鼻皮氣を煩ふときは肺の腑に刺す。餘はみなこれにてしるべし。

〔打鍼之圖〕

血筋の内より出て肌膚を潤わす
 これより依て打針をすべくて槌を
 うつて(采衛)とて骨髄(徹)ゆ
 理より手法の病人より左の足
 とて右の膝よりて槌を右の方置
 るに(何)槌の置所を定むれば忘る
 りの也とて針を口に含み左の手を
 病人の腹より左の中指と食指
 の間に重て穴より針を左の中
 指と食指の間にさし入る針先を
 肌よりさしぬが如くして槌より針を
 打ち皮を切らば痛まざるや(何)打
 る針入ると一分をさしめて槌は手
 應り二三分より深く入るまで

打て氣血より推し内より徹し
 の多りて補瀉逆隨とて針を
 打ち後針を閉へて推手より槌を
 うつて打べし推手より槌にさし
 めれば痛むより槌の打ちを(何)打ち
 一二の如くゆり如く手づまりて打べし
 打針の本意は腹より外
 の經を用ひず諸病より五臓より
 生じりより其本よりて治す或
 目筋より病より肝の腑は針を刺
 鼻皮氣を煩ふとて肺の腑は刺を
 餘りかこれとてあるべし
 管針の手法
 管針の學びやとて痛まざる手法

左の手を管と穴の上にて針を
 かん右の食指と中指の後に重て
 食指のよりて針の軸をゆらし下
 るに(何)ゆらしゆらし痛むとて(何)痛
 むと下より管の太指と食指を中
 指と中指を肉よりさし針をさし
 下して管と後より右の食指太指を
 捻下と下より捻下と捻下と捻下と
 方の病より鍼經云く針大なるく
 刺はるに邪氣より病より益を
 り管の寸法は長二寸五分針軸二寸
 總一寸八分總長二寸八分太指よりと
 と太さるはむを針の中より
 と針口のより小兒の針は細くして針

管針の鍼之圖



五分總二寸二分管二寸五分
 手法は(何)手同
 五臓六腑の圖説
 肺の藏は重く三介脊の第三の椎は
 附とて(何)八葉の蓮花の數より
 三葉の前は三葉の後より小葉二
 葉左右より無一人の兩耳の間に二葉小
 三つ穴ありて二十四穴あり人の呼

管針の手法くだはり しゅほう

管針は學まなびやすくして痛いたまず。

手法しゅほうは、左ひだりの手てにて管くだを穴けつの上うへにあて針はりを管くだに入いれて右みぎの食ひとさしゆび指ゆびを中指なかゆびの後うしろに重かさねて食ひとさしゆび指ゆびのはらにて針はりの軸じくをはぢき下くだすべし。うかがふて弾はちけば痛いたむぞ、一ひときあい競かいに弾はちき下くだすべし。

管くだは大おお指ゆびと食ひとさし指ゆびにて中なかをもち中指なかゆびにて肉にくをおさへ、針はりをはぢき下くだして管くだを抜ぬき右みぎの食ひとさし指ゆびにて燃ひね下くだす。下くださずして燃ひねるばかりにて大方おおたの病やまいはよし。

鍼しん經きやうに云いく、針はり大おおにふかく刺させ、かへつて邪じゃ氣きしづみ病やまいいよく益いよますとあり。

管くだの寸法すんぽうは長ながさ二寸すん五分ぶ、針軸はりじく一寸すん、穗ほ一寸すん八分ぶ、總長そうたけ二寸すん八分ぶ。

太たい抵いていよりすこし太ふときいがよし、ほそきは針はりの中なかにいりて針口はりぐちいたむぞ。

〔管針之圖〕

小兒しょうにの針はりは細ほそくして、軸じく五分ぶ、穗ほ一寸すん二分ぶ、管くだ一寸すん五分ぶ 手法しゅほうはまへに同おなじ。

五臟六腑の圖説

肺の藏は、重さ三斤、脊の第三の推に附。そのかたち八葉の蓮花の敷たるごとし。

三葉は前に垂、二葉は後にたれ、小葉二つ左右に垂て人の兩耳のごとし。

一葉に三づつ穴ありて二十四竅あり。

人の呼するとき、氣孔より出て肺葉虚す。吸するとき、氣孔より入て肺實す。

諸臓の清濁陰陽の氣、此に従て周身に分布く、五臓の華蓋と為す。
相傳の官にして治節を出し諸臓の氣をめぐらす。

「肺臓之圖」 喉嚨 肺管 氣の出入するところ 左 前大葉

まへ まへ大葉 うしろ 右 うしろ大よう うしろ大葉

大腸の府は、重さ三斤十二兩、長二丈一尺、ひろさ四寸、徑一寸。

臍の下一寸、水分の邊に當て右へ回り、疊で積こと十六曲。

五穀を盛こと一斗、水七升半。

大腸の上の口は、小腸の下の方に近し。水穀の糟粕これより大腸へ入なり。

傳導の官にして食物を變化し、廣腸直腸を経て肛門より大便を出す。

「大腸之圖」 大腸の上の口は、小腸の下の方にちかし、

食物の糟粕これより大腸に入。

大腸の下口、肛門とも穀道とも後陰とも名づく。

大腸の府の重さ二斤十二兩長二丈二尺
 のろこ四寸徑一寸腑の下一寸水分の
 達は常く右へ回り疊々積ると十
 六曲五穀と盛と二斗水七分半大腸

肺之圖



呼吸の孔より入る氣は肺實
 と吸するは清濁陰陽の氣此に從く
 諸臓の清濁陰陽の氣此に從く
 周身に分布し五臓の華蓋と為相傳
 の官なり治節と出諸臓の氣成

大腸の府の重さ二斤十二兩長二丈二尺
 のろこ四寸徑一寸腑の下一寸水分の
 達は常く右へ回り疊々積ると十
 六曲五穀と盛と二斗水七分半大腸

大腸之圖



大腸の府の重さ二斤十二兩長二丈二尺
 のろこ四寸徑一寸腑の下一寸水分の
 達は常く右へ回り疊々積ると十
 六曲五穀と盛と二斗水七分半大腸

胃の府は、重さ二斤十四兩、紆曲屈伸ながさ二尺六寸、大一尺五寸、徑五寸。穀をもること二斗、水一斗五升。

そのかたち大囊のごとし。上口を賁門と云。

上脘に當り咽に通じて飲食これより入て胃中に納り、脾と合して五藏を養ひ、飲食を尅化して、下口より傳へて小腸に至り、小腸の下口にて津は膀胱に注ぎ、粕は大腸に入、大小便にわかづ。

倉廩の官にして、五味を出し、水穀氣血の海とす。

「胃府之圖」咽門といふのどより飲食の入口なり

賁門と云、上脘にあたる中脘にあたる脂膜

胃の下口、幽門といふ下脘にあたる消化の飲食此より出る

脾の臟は、重さ二斤三兩、廣さ三寸、長さ五寸、散膏半斤あり。

血を裹ことを主り、五臟を温む。脊の第十一椎に附く。

その形馬蹄の如く、又壺盧のごとし。胃の上に重り蔽ふ。

常によく運動して、胃中の水穀を消化することをなす。

化する所の水穀胃より出て脾に走き、脾より又五藏六府に配りて一身を養

ひ、皮毛、肌肉、筋骨を充しむ。倉廩の官にして五味を出す。

壺盧のごとく、又刀鎌のごとし、又馬の蹄のごとし。

「脾藏之圖」内散膏半斤あり

圖之府ふ胃



脾藏之圖



馬蹄の如く又垂盧のど胃の上1
 重り蔽ふ常に運動して胃中の
 水穀消化を促しなれば化を所
 の水穀胃より出く脾胃走ら
 り又五藏六府配りて一身を養ふ
 皮毛肌肉筋骨を充じ倉庫の官に
 して五味を出し垂盧のど又刀鋒
 内散膏平介わり
 又散膏平介わり
 心之藏へ重さ十二兩春の第五推へ胎
 其のく尖圓ありてのく散膏平介わり
 華のど半へ肺の八葉の間へ肺葉
 の下膈膜の上へ居く藏中の常に也

心の藏は、重さ十二兩、脊の第五椎に附。

其かたち尖圓にして、いまだ敷かざる蓮華のごとし。

半は肺の八葉の間へいり、肺管の下、膈膜の上に居て、藏中に常に血を生じ、
精汁を盛ごと三合。

神をやどし、中に七の孔竅あつて、天真の氣をみちびき、上み舌に通じ、四の系
ありて四臓に通ず。

君主の官にして神明を出し、衆理をそなへ、万事に應ず。

諸藏みな心神の命旨を受くる。

「心臓之圖」 心の藏 肺系すなはち肺管 心系

腎の系 かのつりを 脾のつりを

小腸の府は、おもさ二斤十四兩、長さ三丈二尺、廣り二寸半、わたり八分余、
左にめぐり疊積こと十六曲、穀をもること二斗四升、水六升三合余。

小腸の上口は臍の上二寸にあり 幽門と云。則胃の下口也。水穀是より入る。

小腸の下口は臍の上一寸、水分の穴すなはち大腸の上口なり。これを闌門とも

云。後は背に附、前は臍の上に附。是に至て清濁をわかちて、水液は膀胱に

入、滓穢は大腸に入。

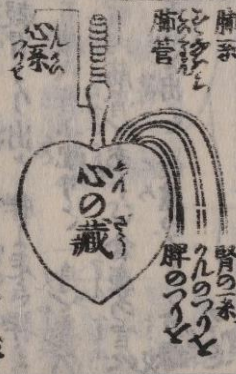
受盛の官にして化物を出し、大小便をわかつことをつかさどる。

「小腸之圖」 幽門といふ 臍の上二寸にあたる

下口 水分 又 闌門ともいふ 臍の上一寸にあたる

生に精汁と盛ると三合神と云い
 中七の孔竅の何れも天直の氣
 さらのこ上へ古く通し四の系
 四臓を通し君主の官と云い
 神明と出で衆理と云い万事の
 諸藏と云い心神の命言と受くる

心臓之の圖



小腸の府へなりと三寸四分長と云い
 二尺廣り一寸半より八分余左
 りて疊積と十六曲と云い

十四分六分三合余小腸の上口へ
 の上二寸にあり幽門と云い胃の下口也
 水穀はより入る小腸の下口へ
 一寸水分の元を分ち大腸の上口なり
 又幽門と云い後へ背へ附る
 の上へ附是より清濁と云い
 水液は膀胱に入滓穢は大腸へ入受
 盛の官なり化物より大小便と云い

小腸之の圖



膀胱の重さ九兩二銖縦廣二寸五分

膀胱ぼうこうの重おもさ九兩りゅう二銖しゆ、縦廣たてひろさ九寸すん、溺いぼうを盛もこと九升しゅう九合ごう、下口したぐちの廣ひろさ二寸半すんはん、かたち袋ふくろのごとし。下口したぐちありて上うへ口ぐちなし。

脊せなの十九推すいに當あたて腎下じんかの前まえ大腸だいちょうの側かたわらに居あり、小腸しょうちようの下口したぐちは、すなはち膀胱ぼうこうの上際うへきわなり。水液みずしるこれより滲入もれい。州都しゅうとの官かんにして津液しんえきを藏おさむ。氣化きかするときんは能「は」よく出いづる。

夫それ上うへ口ぐちなくして自おのら滲入もれいは、皮膚ひふに汗穴あせのあなあるのごとし。人ひとの氣化きかするときは通利つうりすること、たとへば布ぬのを以もつて漉こすに、塵芥ちりあくた上うへに止とどま清水せいすいは下したへ滲もるのごとし。下前陰したぜんいんにつらなる、いばりのいづるところなり。

「膀胱之圖」下したの口ぐちありて上うへにくちなし

腎じんの藏そうは、重おもさ一斤きん一兩りゅう、脊せなの第十四推だいしすいに附つく、前後臍まえうしろほそと平直ひとしまなり。

形かたち石卵いしのたまごの如ごと。色いろ黒紫くへい、兩枚ふたつありて胃下いのしたの兩旁りようはたに當あたる。

腎じんは本もと、水藏みずのそうなり。分わけて言いうときは左ひだりは陰水いんみずとす、右みぎは陽火ようひとす。

王叔和おうしよくわが脉經みやくきやうには、右腎うじんを命門めいもんとして火ひに屬ぞくすといへり。是これを水中すいちゆうの龍火りゅうつかに象かたどる。人ひとの生しょうを受うくるとき、先まず二腎にじんを生しょうず。是こゝに於おいて左腎さじんの水みずが肝木かんぼくを生しょうじ、

肝木かんぼくが心火しんかを生しょうじ、右腎うじんの火ひが脾土ひどを生しょうじ、脾土ひのつちが肺金はいきんを生しょうず。故かゝるかゆえに五藏ごそうの

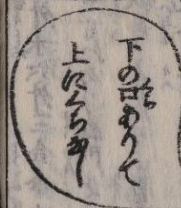
根元こんげんなり。

作強さきようの官かんにして技巧ぎこうを出いだす。

「父母ふぼの腎精じんせいより子こを生しょうずるゆへ骨髓えこつずいを主つかさどる。故かゝるかゆえに一身いつしんの力ちからを出いだす」

「腎之圖」右腎うじん 左腎さじん かめのをなり 尾骶びていとち共とも二十四節せつ

腎の藏の重さ二斤一兩脊の第十四推
 1 附く前後臍を平直より形石の如
 色黒紫兩枝ありて胃下の兩旁に當
 腎の水藏より分て言ふに左ハ陰
 水右ハ陽火の王叔和の脈經云
 右腎の命門と云ふ火を屬としたり
 是と水中の龍火を象する人の生と受
 先天之生は是に於て左腎の水が肝
 木を生し肝木が心火を生し右腎の火
 が脾土を生し脾土が肺金を生と故に
 五藏の根元より作強の官ゆく技巧
 と出と父母の腎精より子を生するを
 主と故に一身のカを由と



下の口より
 上の口より
 下前陰

腎之圖

腎の藏の重さ二斤一兩脊の第十四推
 1 附く前後臍を平直より形石の如
 色黒紫兩枝ありて胃下の兩旁に當
 腎の水藏より分て言ふに左ハ陰
 水右ハ陽火の王叔和の脈經云
 右腎の命門と云ふ火を屬としたり
 是と水中の龍火を象する人の生と受
 先天之生は是に於て左腎の水が肝
 木を生し肝木が心火を生し右腎の火
 が脾土を生し脾土が肺金を生と故に
 五藏の根元より作強の官ゆく技巧
 と出と父母の腎精より子を生するを
 主と故に一身のカを由と

左腎
 右腎

共二十四章

心包絡は、心を包の膜なり。心下横膜の上、豎膜の下にあり。

其形細き筋膜ありて絲のごとし。心肺と相連る。

位相火にして其所膻中に當る。臣使の官にして喜樂を出す。

夫心は神を藏して臟腑の主君なり。此を以て其藏を裸に見はさず。

別に細き筋膜ありて真心の藏の外を包み絡ひ、心の衛となり、君火を相るゆへに相火といふ。又手厥陰君火に代て事を行ふ。故に手心主ともいふ。

「心包絡圖」 肺管 心系 心包絡 心

三焦は、水穀の道路、氣の終始する所也。

上焦は、心下膈に在り、胃の上口に出、呼吸を行らし、榮を導き水穀の精氣一身に充ち、膚を薰し毛を潤す。納て出さず、其治膻中にあり。

中焦は、胃の中脘に在り、臍の上四寸に當る。水穀を腐熟し、津液を承、化して精微と為し、上肺脉に注ぎ化して血と為す。上さず下さず。其治、臍の旁にあり。

下焦は、膀胱の上に當る。其治臍下一寸に有。別に腸を廻て膀胱に注で滲入す。出して納ず。故に水穀常に胃に并居、糟粕を成して俱に大腸に下るなり。

謂る此三氣水穀を焦乾し清濁を分別す。故に三焦と名く。

決瀆の官にして水道の出るところなり。

脉訣に云く、三焦は狀なく空く名ありと。

正傳に曰く、其体脂膜あり。腔子の内にありて五藏六府の外を包む羅なり。

「三焦之圖」 すい 藏府經絡

心包絡心と包の膜より心下横膜の上
 腹膜の下にあり其形細き筋膜のりて
 肺の心と肺と相連る位相大なり
 其所積中に當る臣使の官あり
 其出を夫の心と神と藏と臟腑の主君
 あり此を以て其藏と保と見ざる別ふ
 細き筋膜のりて真心の藏の外と包と
 絡の心の衛とあり君大と相ある相
 火といふ又手厥陰君火と代て事を行ふ
 故に手心主と云ふ

心包絡圖



三焦ハ水穀の道路氣の終始なる所也

上焦ハ心下膈に在り胃の上口に止
 呼吸を行ひ采と導き水穀の精氣を
 ふちり膚と薰も潤と納く出さ
 と其治膈中にあり中焦ハ胃の中脘
 に在り膈の上四寸に當る水穀は腐
 熟し津液と承化しと精微と爲し
 上肺脈は注ぎ化して血と爲し上さ
 ど下る其治膈の旁にあり下焦ハ
 膀胱の上に當る其治膈下一寸に有
 別は腸と迴、膀胱は注ぎ滲入を
 出しと納と故に水穀常に胃を并走
 糟粕と成しと俱は大腸は下るあり
 謂る此三氣水穀と焦乾し清濁と
 分別と故に三焦と名く決瀆の官

膽の府は、重さ二兩三銖、その象ち瓠のごとし。

肝の藏葉の間に藏れ居る。背の第十推に附く。

精汁を包むこと三合、その精汁味ひ苦し、苦きは火に屬す。

膽は肝の府にして木に屬す。木の味は酸して、反て膽汁の苦きは何となれば、

火は木より生ず。かるがゆへに膽中に火を孕で其汁苦し。

精汁とは水穀の精液也。又水穀の穢濁たるものは受ず。故に中正の官に

して、物をさだめ決断することを主る。

又出入の口なし。故に吐下を忌む。

〔膽府之圖〕 肝葉 膽

肝の臟は、おもさ四斤四兩、脊の第九推に附。その藏、右の脇右腎の前にあり。

其治、左にあり。

其色青くして形木の葉のごとし。凡て七葉、左の脇に垂ること三葉、右の脇にた
るること四葉なり。七つは少陽の數なり。

少陽膽經は肝の腑、五行にては木に屬するゆへなり。其系、上、肺を絡ふ。出入
の口なし。

將軍の官にして謀慮を出す藏なり。

〔肝臟之圖〕 左三葉 右四葉

小指 無名指 中指 食指 次指とも 大指 母指とも 掌 腕甲 腕肱

卷之四

卷之四

肝臓の圖

左三葉

右四葉



Diagram of a hand with labels:

- 中指 (Chūshū)
- 無名指 (Mumeishū)
- 小指 (Kōshū)
- 大指 (Daishū)
- 母指 (Moshū)
- 掌 (Tate)
- 腕甲 (Ude-kō)
- 腕 (Ude)

五藏六府内系の圖

至陰の頭にある 尾骶に通ず

大椎 三推肺 五推心 九推肝 十一推脾 十四推腎

并二十四節 尾骶

肺管 肺の藏 脂膜 膈 丹田

小便の出る所 精の出る所 大便の出る穴



五藏の色脉証候虚實の例

肝は、血を藏して魂を含す、筋と爪と風とを主どる。東方の木に屬し、春に旺して、其脉は弦なり。外候は目にあり、その聲は呼、その臭は臊し、その味は酸し、其液は泣、その色は青し、其志は怒る。其經は足厥陰、その府は膽、その變動は握、その積は肥氣杯のごとく左の脇の邊を覆ふ。

肝氣盛なるときは目赤、兩の脇の下痛み、小腹に引。よく怒り、氣逆するときんば頭眩き、耳聾へず、額腫る。宜くこれを瀉すべし。

不足するときんば目明ならず、兩の脇拘急筋攣り、太息することを得ず。

爪甲枯て青く、よく怒り恐て人の捕とするがごとし。宜くこれを補ふべし。

心は、脉を藏して神を含す。血脉と暑とを主る。南の方君火に屬し、夏に旺して、其脉 鉤のごとくにして洪なり。外候は舌にあり、其聲は笑、その臭きは焦、その味は苦し、その液は汗、その色は赤し、其志は喜ぶ。其經は手少陰、その府は小腸、その變動は憂、その積は伏梁臂の如にして臍につらなる。

心氣盛なるときんば胸内痛み脇支満、脇下痛、膺背 膊 脾の問いたみ、兩臂の内痛み、喜で笑て休ず。宜くこれを瀉すべし。

不足するときんば胸腹大に、脇下と腰背と相引て痛む。怔忡、驚悸、恍惚、顔色少く、舌本強り、善で憂 悲す。宜くこれを補ふべし。

五藏の色証候虚實の例
 肝血藏と魂と舎と筋と爪と風
 と爪と東方の木に屬し香の
 肝と其脈は弦なり外候は目により
 その聲は呼その臭は臊その味は酸
 其液は泣その色は青其志は怒る
 其經は足厥陰その府は膽その變動
 は握その積は肥氣杯のひと左の脇
 の邊に覆ふ肝氣盛るとは月赤
 兩の脇の下痛し小腹を引く怒り
 氣逆とるとは頭眩さ耳聾と
 額腫る實とと濕と下不足と
 ととんは月明やと兩の脇拘急筋
 事り太息ととと得と爪甲枯て

青く怒り恐る人の補ととら
 じ宜くこれと補とと
 心脈と藏と神と舎と血脉と看
 と主と南方の君火に屬し憂と肝
 と其脈は鉤のどくみと洪なり外
 候は舌のわり其聲は笑その臭は焦
 もの味は苦しその液は汗その色は赤
 其志は喜ぶ其經は手少陰その府
 小腸その變動は憂その積は伏梁脊の
 如く腰ふつと心氣盛るとと
 んは胸内痛と脇支滿脇下痛膺背
 膊脾の間のと兩臂の内痛と喜で笑
 と休と宜くと濕と下不足とと
 とんは胸腹大と脇下と腰背と相引

脾は、營「一曰智」を藏して意を舍す、肌肉と勞倦と濕とを主る。中央の土に屬し、長夏に旺して、其脉緩なり。外候は唇口に在り、其聲は歌、その臭は香し、其味は甘し、其液は涎、その色は黄、その志は思。その經は足太陰、その府は胃、その變動は噦、その積は痞氣、胃管に在て覆大にして盤のよう。

脾氣盛なるときは腹痛み、腹脹、溲利せず、身重く苦だ飢、足痿て収らず、行ときは善癭、脚下痛む。宜くこれを瀉すべし。

不足するときは怠惰して卧ことを嗜む、四肢用られず、食少なく、食化せず、嘔逆、腹脹、腸鳴。よろしくこれを補ふべし。

肺は、氣を藏して魄を舍す。皮と毛と燥とを主る。西方の金に屬し、秋に旺して、其脉は毛の如にして浮なり。外候は鼻にあり、その聲は哭、その臭は腥し、其味は辛し、其液は涕、その色は白し、其志は憂ふ。其變動は咳。その經は手太陰、その府は大腸、その積は息賁、右の脇の邊にあり。

肺氣盛なるときは喘咳、上氣、肩背いたみ、汗出、尻陰股膝踠足みな痛む。

宜くこれを瀉すべし。

不足するときは少氣にして息するに足ず、耳聾、咽乾き、溺の色変、卒に遺失して度なし。宜くこれを補ふべし。

腎は、精を藏して志を舍す。骨髓と齒と寒とを主る。北方の水に屬し、冬に旺して、其脉石の如にして沈なり。外候は耳に在り、其色は黒し、其味は鹹し、其志は恐る、其聲は呻、その臭は腐し、その液は唾、その變動は慄、その經は足少陰、其府は膀胱、その積は賁豚、臍の下にあり。

腎氣盛なれば腹脹、飡泄、小便黄に澁り、牀腫、喘咳、汗出で、風を憎み、面目黒し。宜くこれを瀉すべし。

不足すれば厥す、腰背冷、胸内痛み、耳鳴、苦しきときは聾ず、齒動き、腰痛み、唾血、足の心熱して痛み、善で恐る。宜くこれを補ふべし。

痛む証神驚悸恍惚顔色少く舌
 本強り善く憂悲を宜し補
 脾の聲日藏し意を合と肌肉二方
 倦と濕を主る中央の土に屬し長
 憂ふ旺し其脈緩なり外候は唇口
 在り其聲ハ歌その臭ハ香一其味ハ甘
 一其液ハ涎その色ハ黄その志ハ思その
 經ハ足太陰その府ハ胃その變動ハ噦
 の積ハ痞氣胃管に在て覆大ありて
 盤の正脾氣盛ると其腹痛と腹
 脹渡利を身重く甚く飢足痿て收
 らる行くと其善瘦脚痛痛じ宜く
 これ瀉す木不足と其志ハ仁ハ
 總情して用くと嗜む四肢用られ

食少く食化せど嘔逆腹脹腸
 鳴らるこれ補す
 肺の氣藏して魄を合と皮毛と
 燥と主る西方の金に屬し秋
 旺し其脈毛の如く浮なり
 外候は鼻にありその聲ハ哭その臭ハ
 腥一其味ハ辛一其液ハ涕その色
 ハ白一其志ハ憂ふ其變動ハ咳その
 經ハ手太陰その府ハ肺其積息
 責右の脇の邊にあり肺氣盛ると
 さん喘欬上氣肩背いさ汗出尻陰
 股膝踰脛足と痛じ宜くこれ瀉す
 火不足と其志ハ怒其液ハ汗
 息と足と耳聾盛乾瀉の色変

卒に遺失して度宜くこれ補す
 腎の精藏し志を合と骨髓と齒と
 寒と主る北方の水に屬し冬に旺
 しく其脈石の如く沈なり外候ハ
 手に在り其色ハ黒一其味ハ酸一其
 志ハ恐其聲ハ呻その臭ハ腐一其
 液ハ唾その變動ハ慄その經ハ足少陰其
 府ハ膀胱その積ハ遺尿尿の下にあり
 腎氣盛ると其腹脹發泄小便黄
 澀り膝腫喘欬汗出風憎と面目
 黒宜くこれ瀉す木不足と其志ハ
 腰背冷胸内痛と耳鳴舌乾と
 聾と齒動と腰脊痛と唾血足の心
 熱と痛と善く怒を宜し補す

五藏の色體
 五臟 肝 心 脾 肺 腎
 五行 木 火 土 金 水
 五味 酸 苦 甘 辛 鹹
 五氣 溫 熱 濕 燥 寒
 五色 青 赤 黃 白 黒
 五季 春 夏 長 秋 冬
 五方 東 南 中 西 北
 五志 怒 喜 思 憂 恐
 五精 魂 神 意 魄 精
 五液 泣 汗 涎 涕 唾

五液 ごえき	五精 ごけい	五志 ごし	五主 ごしゅ	五方 ごほう	五季 ごき	五色 ごしき	五氣 ごき	五味 ごみ	五根 ごこん	五行 ごぎょう	五腑 ごふ	五藏 ごそう	五藏の色體 ごそうのしきたい
泣 なみだ	魂 こん	怒 いかり	筋 すじ	東 ひがし	春 はる	青 あおし	温 あたたか	酸 すし	眼 め	木 き	膽 たん	肝 かん	
汗 あせ	神 たましい	喜 よろこぶ	血脉 ちちすぢ	南 みなみ	夏 なつ	赤 あかし	熱 あつし	苦 にがし	舌耳 したみみ	火 ひ	小腸 しょうちよう	心 しん	
涎 よだれ	意 こころ	思 おもひ	肌肉 はだえにく	中央 ちゆうおう	土用 どよう	黄 きいろ	濕 しめり	甘 あまし	口唇 くちくちびる	土 つち	胃 い	脾 ひ	
涕 はなしろ	魄 はく	憂 うれい	皮毛 かわけ	西 にし	秋 あき	白 しろ	燥 かはく	辛 からし	鼻 はな	金 かね	大腸 だいちよう	肺 はい	
唾 つばき	精 せい	恐 おそる	骨 ほね	北 きた	冬 ふゆ	黒 くろし	寒 ひや	鹹 しおはゆし	耳二陰 みみにいん	水 みず	膀胱 ぼうこう	腎 じん	

四知之論 病証を見たつる法

神聖工巧、望聞問切、これを四知といふ。又四象とも占察ともいふ。

難經に曰く、問てこれを知る、これを工といふ。脉を切にしてこれを知る、これを巧といふ。望て之を知る、これを神といふ。聞てこれを知る、これを聖といふ。

それ五藏内に病ときは即五色外にあらはる。面青きは腹中のいたみなり、赤きは腹中に熱あり、黄なるは脾胃のよはき也、白きは腹中の寒なり、黒きは腎のやぶれなり。酒をのまずして酔たる如なるは神氣の不足なり。手足の指のび節あひすきたるは病を得て遅くいゆる。

此の如く外より望見て腹中の病をしるを望といひ神といふ。

それ五藏内に有て五聲を出す。歌哭呼笑呻これなり。五音は唇舌牙齒喉に出る、宮商角徵羽これなり。しかれば病人の聲を聞て腹中の病をしる。たとへば、哭は肺の病としる、清涕たり鼻ひるは肺に風寒ありとしり、歌てよだれ多きは脾の病としる、怒さけひて泪おおきは肝の病なり、唾おほく呻は腎の虚なり、喜で笑ひたわこといふは心のやまひ、聲のかろきは氣のよはき也。こゑの重く濁るは風のいたみ、声出ざるは肺の病なり、声の急なるは神の衰へなり、声ふさがるは痰のしはざなり、声ふるふは冷なり、声むせぶは氣の不順なり、あゑぐは氣のいそがしき也、あぐび多は氣のつかへたるなり。

此の如く病人の聲を聞て病をしるを聞といひ、聖といふ。

夫五味は口に入胃に納るといへども、是をとろかしこなして脾に渡せば、すなわちこれを五藏六府に散ずるなり。

口酸は肝に熱あり、口苦きは心熱なり、口甘きは脾の熱なり、口辛きは肺に熱あり、しほつゆきは腎の熱なり、口淡きは胃熱としる。

此のごとく病人のきらひこのむ味を問わきまへて、五藏の病のおこるところを知り、又病者つねに何を食し、いつれの日やみはじめ、いかやうにして病を受たるぞと委しく病因を問て病の源をしるを問といひ、工と云なり。

右望聞問の三つをつくし、其後、脈を候ひ、病の虚實をわきまへ、陰陽寒熱をつま
びらかにし、生死吉凶をさだむるを診候の術と云なり。

脈を候ふことは神氣をしづめ呼吸を定めて診べきなり。脈を切にして藏府の病
をわきまへ生死をしる、これを切といひ巧と云。

およそ針灸醫の道を勤る人は、大酒と色欲とをたしなみ、貪り妬みにくむ心を
生ずべからず。慈仁の心を存し利欲をわすれ博く施して衆人を濟ふべし。

神聖工巧望聞切これと四知と云ふ
又四象とを旨察ともの難經曰く
問これヲ知る者其工巧の脉ヲ切
ちてこれとあるこれと巧とを望之
ヲ知これヲ神と云聞これと云これ
ヲ聖と云
これ工藏内ノ病と云即五色外にわ
ける面青と云腹中のいさゝかり赤さハ
腹中ノ熱あり黄さハ脾胃のよろこ也
白さは腹中の寒あり黒さは腎のよろこ
あり酒のよろこと醉さう知あるハ神氣
の不足あり手足の指のハ節ありずと
さらハ病ヲ得く遅くゆる此の如く外

望見く 腹中の病と望とを
神と

それ五藏内は有て五聲と出を歌夫
呼笑呻とれり五音は唇舌牙齒喉
に出る官商角徵羽とれりこれぞ
病人の聲と聞て腹中の病とて治
んとて哭ハ肺の病とて清涕とて
鼻の病と風寒ありとて歌と
とて泣多とて脾の病とて怒とて
とて泪とて肝の病とて唾とて呻
ハ腎の虚とて喜と笑はたとて心
心のやまハ聲のやまハ氣のやま也
とて重く濁る風のやまハ声出さる
ハ肺の病あり声ハ急ゆるハ神の衰へ

かり声^{こゑ}をさぐりて痰^{たん}のちひなり声^{こゑ}を
 る^を咳^{せき}なり声^{こゑ}ひびきなり氣^きの不順^{ふじゆん}なり
 る^をくハ氣^きのいん^{いん}くハ也^{なり}わくハ多^{おほく}
 ハ氣^きのつへなり此^{こゝ}の如^{ごと}く病人^{びやうにん}の聲^{こゑ}
 ヲ聞^{きこ}く病^{びやう}なるを聞^{きこ}くはハ聖^{せい}といふ
 夫^そ五味^{ごみ}ハ口^{くち}に入^い胃^いに納^なるといふ是^{これ}
 とどろくこちて脾^ひに渡^{わた}るをいふ
 是^{これ}ハ五藏^{ござう}六府^{りくふ}ハ散^{さん}るなり口^{くち}に
 小^{せう}熱^{ねつ}あり口^{くち}苦^くみ心^{こゝろ}熱^{ねつ}なり口^{くち}甘^{かん}ハ脾^ひ
 の熱^{ねつ}なり口^{くち}辛^{しん}ハ肺^{はい}に熱^{ねつ}ありとわる
 是^{これ}ハ腎^{じん}の熱^{ねつ}なり口^{くち}淡^{たん}ハ胃^いに熱^{ねつ}なり
 此^{こゝ}の下^{した}病人^{びやうにん}のさうハこの味^{あじ}と聞^{きこ}
 是^{これ}ハ五藏^{ござう}の病^{びやう}のさうとて
 知^しり又^{また}病者^{びやうしや}の孫^{そん}ハ何^{なん}と食^くハ此^{こゝ}の

日やいふめづかしうして病と受
 くるぞと委しく病因と問く病の
 源と云ふ問といひ云云あり
 右望聞問の三つより其後脈と候
 の病の虚實より候る臨陽寒熱と
 つまひのうや生死吉凶と云ふむと
 診候の術と云あり脈と候ふは神
 氣と云ふ呼吸と定めて診べさあり
 脈と候はる藏府の病と云ふ人生
 死と云ふこれ切といひ巧と云ふを
 針灸醫の道と勤む人ハ大酒と色欲
 と女と云ふ貪り妬みやくひ心と
 生む人々慈悲の心存り利欲
 と云ふ博く施して衆人に濟世

診脉

男は左、女は右の手より診るなり。まづ指を浮てとるに、指のはらに浮み通るは是氣の往來なり。其を按てみるに、力ありて大なるは氣の實なり、又力なく弱きは氣の虚したるなり、これを衛を候ふといふ。さて指を少し按沈めてとるに、力ありて底にあるは血の實したる也。又力なく洩りて弱きは血の虚したるなり。是を榮を候ふといふ。

凡そ一息の間に脉四動は平脉なり。一息とは醫者の呼吸する間をいふ。呼は出るいき吸は入息也。

三部九候

醫者の食指のあたる所を寸部とし、中指のあたる處を関部とし、無名指のあたる所を尺部とす、是を三部といふ。

部ごとに浮中沈の診法あり、これを九候といふ。浮はうかめて候ひ、沈はしづめてうかがふ。中は浮ならず、沈ならず、中にしてうかがふなり。

【圖】 掌後の髁骨 掌後の髁骨

診脈

男の左手の右の手より診るなり
 指と浮しては指のこふ浮と通る
 是氣の往來あり其と按てはふか
 り大なる氣の實あり又か弱
 まる氣の虚なり
 ふといふと指と少く按てはふか
 かありて底はあつた血の實なり也
 又か弱く流れて弱さる血の虚なり
 あり是と榮と候一のふん一息の間
 は脈四動へ平脈あり一息に醫者の呼
 吸する間への呼吸は出る息と入る息と

三部九候

醫者の食指のあつた所と寸部と中



六脈

病人の左手の寸口は心と小腸とを主り、関部は肝と膽とを診み、尺部は腎と膀胱とを候ふ。右手の寸部は肺と大腸とを主り、関部は脾胃を診し、尺部は命門と三焦とをうかがふ。

六府は陽にして外にあり、故にゆびを浮めて六府を候ひ、五臓は陰にして内にあり、故に指をおし沈めて五臓を診す。

祖脈

浮は、うきたる脈なり。指をかるくして診れば脈たしかにあり、指をつよくおして診すればなし。うきて力あるは風なり、力なきは虚なり。病ひ表にあり。

沈は、しづみたる脈なり。指をつよく按て診ればたしかにあり、かるくあててみればなし、沈みて力あるは積聚、力なきは氣のとどこほり也。病裏にあり。

遅は、おそき脈なり、一息の間に二三動ほどうつなり。力あるは痛みなり、力なきは冷なり、陰脈なり、陽虚とす。

數は、かずある脈なり、一息の間に五六動もうつなり。力あるは熱なり、力なきは瘡也、陰虚とす。

七表の脉は陽に屬す

浮は、水の上に物を浮て手にて按ごとし。

芤は、中空で葱葉のごとし、失血をつかさどる。

滑は、珠の動のごとし、痰と吐逆とを主どる。

實は、かたくつよし、病内にあるをつかさどる。

弦は、弓の弦を按ごとし、拘急をつかさどる。

緊は、なわを切に似てきびし、痛みを主る。

洪は、極て大なり、熱をつかさどる。

八裏の脉は陰に屬す

微は、有がごとく無がごとし、氣痞を主どる。

沈は、肌肉の下にあり、濕冷洞泄を主る。

緩は、浮大にして軟に微おそし、風結を主る。

澹は、軽く竹を刮るがごとし、血氣不足を主る。

遲は、一息に三動、腎虚の脉なり、寒を主る。

伏は、つよく按て骨に著てあり、物聚を主る。

濡は、極て軟にして浮細なり、虚損を主る。

弱は、よはく力なし、虚して筋萎を主どる。

九道の脉 七表八裏九道を二十四脉と云

長は、竿のごとくながし、三焦の熱を主どる。

促は、數にして時に一止む、氣血痰食行ず。

短は、みぢかし、些なり、氣雍宿食消ず。

虚は、遲大にて軟に力なし、氣血虚と傷暑也。

結は、遲して時に一止、血氣痰積痛をなす。

牢は、鼓皮を按ごとし、氣雍り骨肉いたむ。

動は、微動て來ず往ず、虚勞血崩痢病。

細は、線のごとくほそし、精損氣血俱に虚す。

代は、うち切する也、惡脉、老人はくるしからず。

七死の脉 あらはるればかならず死す

彈石は、石をはぢくごとし、尋れば即ち散る。

解索は、散乱して聚らず、次第不同なり。

雀啄は、鳥の啄のごとく連來て數急なり。

屋漏は、止て時に起り相連らず、雨の漏ごとし。

蝦遊は、浮て動ず、速に去て久して又來。

魚翔は、魚の水面に尾を掉て行ざるがごとし。

釜沸は、釜にて羹を煮るに沸あがるごとし。

祖脉

七表の脉ハ陽ニ屬シ

洪^{フウ}極^{キョク}大^{ダイ}熱^{ネツ}二^ニ

八裏の脉ハ陰ノ屬と

九道の脉七表八裏九道と二十四脉

七死の脈あり

45

死証の見脉

面赤して眼白く、面赤して目青く、面青して目黄に、面青して目白く、面黄にて目青く、面白して目黒く、面黒して目白きは、みな死するとしるべし。面黒して唇青く、面青して唇黒く、面に精彩なく、土色にて食を受ず、目に精光なく、齒黒く、耳目^紅頰赤く、黒色額上より出て直に鼻脊兩顴の上に下り、黒色或は白色出、目鼻口に入、兩頰赤く一切に不言、熱なくして妄語、衣の縫を循、床を模り、空をつかみ、久病虫下り、戴眼し、目眶おちいり、眉かたふき、髪直麻の如く沢ひなく、鬚豎、唇青く人中反り、唇反人中満、唇口たちまち乾き、唇腫齒焦れ、齒たちまち黒くなり、舌卷卵縮り、汗出て流ず、齒黄み落、遺尿おぼへず、爪甲青く或は白く、爪甲の肉黒く、陰陽俱に閉て、失音、神氣不守、声嘶、食を見て後むき、項の筋舒、尸臭く、手の内の紋なく、足の甲又裏はれ。

肝絶は、盲の如く、泣出、汗出て流水のごとし。

心絶ば、肩にて息し、目不回直視す。

脾絶は、口冷、足腫、泄利して無度。

肺絶は、口張こと魚の如く、氣出て不反。

腎絶は、齒暴に枯、面黒く、目黄、腰折ごとし。

大骨枯藁し、大肉陷下し、胸中氣満、喘息、不便、動作ますくおとろへ、破膈する者はみな死す。目、人を見ざるは立に死す。

病人の色、青きこと翠羽の如く、赤きこと雞冠のごとく、黄なること蟹の腹のごとく、白きこと豕の脂の如く、黒きこと烏羽のごとく、潤しきをよしとす。青きこと藍の如く、赤きこと赭の如く、黄なること枳實のごとく、白きこと枯骨の如く、黒きこと炭の如く、澤なきはわるし。凡病色面にあらはるに、赤きは熱なり。白きは寒なり、血虚なり、積なり、肺よはきなり。黄なるは脾胃の虚なり。青きは痛みなり。黒きは腎の實なり。

死証の見取
 面赤と目白く 面赤と目青く
 面青と目黄く 面青と目白く
 面黄と目青く 面白く目黒く
 面黒と目白く 死と目赤く
 面黒と目青く 面青と目黒く
 面は精粉多く土色多く食を受ど
 目は精光多く齒黒く耳目顔赤く
 黒色顔より出く直は鼻有兩鬚
 上より下り 黒色或は白色出目鼻口入
 兩頬赤く一切不言熱多く衣の縫ひ痛 床を換り 空より
 久病虫下り 戴眼 目非多り
 眉より髪 髪直麻の如く沢の如く

腎堅 唇青く人中反り 唇反人中
 満 唇口ならん 唇き 唇腫齒焦
 齒より黒く 舌巻卵縮り
 汗出く流を齒黄く落 遺尿をむ
 爪甲青く或は白く 爪甲の肉黒く
 陰陽俱は閉く 失音 神氣不守 嘔
 食と見て後ひき 項の筋舒 尸臭
 手の内の紋多く 足の甲又裏に
 肝絶 肝の如く 汗出 汗出 流水の如く
 心絶 心は肩より息 目不回直視
 脾絶 脾は口足腫 泄利 無度
 肺絶 肺は口張 魚の如く 氣出く不反
 腎絶 腎は齒黒く 面黒く 目黄腰折に
 大骨枯焦 大肉陷下 胸中氣滿

喘息不便動作多くかたう破胸を
 する者のか死と目人を見たり立死を
 病人の色青さ 髪初のか赤さ
 難冠のか青さ 髪初のか赤さ
 白さ 家の脂の如く黒さ 鳥羽の
 如く潤いたる 青さ 二重の
 如く赤さ 痛の如く黄さ 極實
 のく白さ 枯骨の如く黒さ
 炭の如く澤の如く
 凡病色面にのく赤さ 熱多
 白さ 寒多 面虚多 積多 肺多
 さ多 黄多 脾胃の虚多 青さ
 痛多 黒さ 腎の實多
 腹の見様 生死を知る法

病人と仰るに用さる足とのさる
 手と股のさる付さる左女右の
 乳下と手の平を押し病人の心と
 つめ息五六呼吸をとり其主とわ
 上腕より押しさる左女右の
 見る男は左女は右と先にさる心と
 虚多 押し痛む 實多 押し
 のさる邪表にあり押し痛む
 邪裏にあり押し胸の間をさる
 下より下より押しさる腎痛
 の實多 胸の下より下より
 さる腎の虚多 腹の上下をさる
 何のさる押しさる無
 病の人より或は堅くわりの狭り

腹の見様 并 生死を知る法

病人を仰きに臥さして足をのべさせ、兩手を股のわきに付させ、男は左、女は右の乳下を手の平にて押へ、病人の心をしづめ、息五六呼ほどして其手をおろし、上腕より押へてしづかに左右をうかがひ見る。男は左、女は右を先にみるに、心よきは虚なり、押へて痛むは實なり、軽く押ていたむは邪表にあり、おもく押へて痛むは邪裏にあり。臍より胸の間すきて臍より下ふくれて押へごたへあるは腎精の實にてよし。胸の下ふくれ臍下すきたるは腎の虚なり。臍の上下なれあふて何のさわりもなく、押へごたへあるは無病の人なり。或は堅くあるひは猥りにやわらかにして、木の枝などを袋に入れてさぐるやうなるは、たとひくるしみなしといふとも病あり。左右の立筋はりてあるは性氣の虚なり。

生死を候ふは、臍の下三寸関元の穴を手さきにて押てみるに、力なく空虚にして指を動かし見るに、中くぼにて立に溝あり、指の陷るやうなるは死す。此穴は天の一元の氣をうけ始る所、すなはち一身の大極と云所なり。經に曰く、臍下腎間の氣は乃人の生命、十二經の根本なり。三焦は則元氣の別使とあり、此三焦の根本よりはじまり、又三焦より終る。しかれば死する者はかならず三焦の部一元の氣なきゆへなり。其一元の氣をよくうかがひ有無をするとき、生死を辨へ知るなり。さて胸の下堅く石をなづる如くなるは、かならず死す。此外腹心の傳受あれども醫の秘密なれば猥にあらはさず。又見脈にて生死をしるべし。見脈よき人は床につき不食すと云とも本復すべし。見脈も腹もあしきはかならず死す。

やうにわけて木の枝を袋に入
くさくさうきつたのうへに
しつと病めり左右の立筋より
くさくさく性氣の虚より生死を候ふ
肝の下三寸関元の穴と手三寸少澤
くさくさく力や、空虛おと指と動
うきん中やと立止満めり
指の隙やうきん死を此穴は天の
元の氣とけ始る所ばかり身
大極に云所や、經は曰く腑下腎間
の氣は乃人の生命十二經の根本より
三焦は則元氣の別使とわり此三焦の
根本よりけり又三焦より終る
あつた死を者へりあつた三焦の

元の氣は乃人の生命十二經の根本より
うきん有無とるに生死を辨へ
知るよりさへ胸の下堅く右と左と如く
あつたあつた死を此外腹心の傳受あれ
どと醫の秘傳されば般にあつた又
見脈を生死とるに見脈は人へ床に
つき不食とるに本復して見脈と
腹とわけるに生死を

天地人男女の法

人へ天地人の三寸あり針は天地人の
三寸あり人の胸よりとるに針と
軽く浅く刺へ胸より腹より人
と針と中様子用の針よりとる地と
と重深く刺へ中やと胸より上に

刺と大事あり胸は心の命神の舍る
所は近きゆへに天より刺さる針は
くさく軽くの針に針刺く過
めり病人の面と袖をおわひ口鼻の
息を温め面に風とめく男へ足の三里
鬼當は三陰交と男女より小臍下
一寸五分氣海の穴と刺さる神瀉と
をいかにさる生を又針は天地
人の三寸あり刺へ皮肉に至る天と
云肉内に至る人へ云筋骨に至る
地への針難經に云く春夏は浅く
小宜し秋冬は深くさる男へ浅く
女へ深く午前男へ浅く女へ深く
午後男へ深く女へ浅く刺さる

是陰陽の法より針多を行ふ先行
年宜忌及び人神在處と定む然ら
ざれば害あり万物五行の理に
ぞ人へ天地の正理をさるに經は曰
人へ天地の氣と受く生と天の陽氣
氣とさる地の陰氣とさる天地の
物の父母より頭面喉胸心腹臍下
背肘手足各手法ありさるに
治と施さるに

太極の論

夫針は太極と云ふに此理を言に
のへくと心にあらす心を得ると言ふ
さるに万物の上にある太極
の理ありと云ふを先天地未分

天地人男女の法

人に天地人の三才あり、針に天地人の三才あり。人の胸より上を天とす、鍼を軽く浅く刺べし。胸より臍までを人とす、針を中様に用ゆ。臍より下を地とす、重深く刺べし。中にも胸より上に刺こと大事なり。胸は是心の俞神の舍る所に近きゆへなり。天に刺さば針を伏て浅く軽くひねるべし。

若針刺て過あらば、病人の面を袖にておほひ、口鼻の息を温め、面に風をあてず、男は足の三里、崑崙、女は三陰交、さて男女ともに臍下一寸五分氣海の穴を刺て補瀉をなすべし。かならず蘇生なり。

又針に天地人の三才あり、刺て皮肉に至るを天と云、肉内に至るを人と云、筋骨に至るを地といふなり。

難經に云く、春夏は浅きに宜し、秋冬は深きによろし。男は浅く女は深く、午前は男は浅く女は深く、午後は男は深く女は浅く刺すべし。是陰陽の法なり。

針灸を行ふには、先行年宜忌及び人神在處を定むべし。然らざれば害あり。万物は五行の理にそむかず、人は天地の正理なるゆへなり。

經に曰、人は天地の氣を受けて生ず。天の陽氣は氣となり、地の陰氣は血となる、天地は万物の父母たり。頭面喉胸心腹臍下肩背肘腿手足、各手法あり。みだりに治を施すべからず。

太極の論

夫針に太極と云ことあり。此理は言にのべても心におちず、心に得ても言に述がたきことの万物の上において太極の理あらずと云ことなし。先天地未分れざるをいふ。其太極判て陰陽兩儀を生ず。是より寒暑燥濕風、木火土金水、千變万化となる。分て云ときは虚無より混沌をいだす。清は上て天となり、濁は下て地となる。是乾坤の初なり。

針の上において沙汰するときは、針は本金、虚無の躰、細少無心の物なり。何によつてか千變万化の病を治す。是針者の術を得るところ、補瀉迎隨、温冷寒熱、病に隨ひ明手を施すこと、太極の口傳あり。しかれども極めて秘密なれば分明にあらはしがたし。針の道にかなふときは、なんぞ至らざるべけんや。一氣その中に周流して、以て其神をなす。自然にそなはれる理なり、外にもとむべからず。

十四の鍼法

一に動者、氣の行ざるには針を伸提し、うごかして氣をめぐらすなり。

二に退とは、補瀉をなして針を出さんと欲する時、まづ針を三分ほど抜かけて、又却て針を留め、方に拔出すべし。

三に搓とは、凡熱病を治するには外に向ひ針を卧て、搓線の状の如す。はなはだ緊しくすることなかれ。寒病を治するには裏に向ひ卧て搓線の如くす。

四に進とは、凡そ氣を得ず、男は外、女は内、及び春夏秋冬おのく進退の理あり

五に盤とは、凡そ腹の部に針するには、穴の内に於てかくく盤揺するなり。

中腕関元の如きに先刺て入ること一寸五分、退き出すこと一寸、ただ留むること一寸五分、内に在しめて盤揺するなり。

揺とは、凡そ瀉するとき針を出さんと欲せば、動揺して後に出すべし。

彈とは、補ふとき大指の甲にて軽く針を弾き、氣をして疾に行しむ。

撚とは、手指にて針を撚り左を外とし、右を内とす。女は是に反す。

循とは、針を部分経絡の処に下し手にて循り、氣血往來せしむ。經に曰、これを推ときは行、これを引ときは止。

櫛とは、補の時に針を抜て、其針口を手にて櫛閉るなり。

撮とは、針を刺とき氣溢り滞ることを得ば、経絡に随ひ上つて、大指の甲にて上下に其氣血を切にすれば、をのづから通じ行るぞ。

按とは、手にて針を按て、進退することなく按切の状のごとし。

爪とは、針を下して左手の大指の爪にて重く穴の上に抓し、氣血を散ぜしむ準あり。

切とは、針を下さんと欲して、まづ大指の甲にて其針する所の穴を按し、左右の氣血を宣散して後に刺すべし。これ榮衛を傷らしめざるなり。

補瀉迎隨の論

手法の補瀉、虚實の補瀉あり。まづ針鉞を口にふくみ温めて、右の肘を向へはり、手先を内へかがめ、大指さを前に向ひ、呼氣にしたがひて食指をそへ大指にて和かにひねり下すとき、咒して曰く、五帝上眞六甲玄靈氣付至陰百邪閑理と三篇念ず。

入こと三分留こと五六呼、經に隨ひ病に隨てひねり下し、進退

動揺せしめて氣を至らしめ、手を振ひ針をはずく、徐々にして吸にしたがひて針を出し、孔を閉よ、是手法の補なり。

瀉は肘をさげて我が前に付、手先を向へなし、大指をさきに向て、吸にしたがひてひねり下す。大指を添へ食指にて、ひねるとき咒して曰く、帝扶天形護命成靈と誦すること三遍、入ること三分留ること五六呼にして、經に迎ひ病に迎ひて撚り下す。氣至て左手にて針の口を開き、呼にしたがひて針を出す、孔を閉ざるがよし。咒を念ずるときは一心針に念をよするぞ、是手法の瀉なり。

婦人はこれに變ず、補法を瀉とし、瀉法を補とす。

虚實の補瀉は、補は不足を補ひ、瀉は有餘を瀉す。不足は痞をなし、麻をなす。有餘は腫をなし痛をなす。

天民が正傳に曰く、其鍼を刺に補瀉の法ありといへども、予恐くは俱に瀉有て補無と。しかれども此文段には針法ばかりにて手法の論なし。予以らく、靈樞に曰く、微鍼を以て其經脉を通し、其血氣を調へ、其逆順出入之會を當せんと欲す、とあるぞ。

又世俗の醫者が云ことは、針するときは氣力おとろへ病に宜からずと。我いまだ針して人の氣力おとろふと云ことをしらざるぞ。夫人の病は邪氣勝て正氣まくるぞ、蓋し針は邪氣をしりぞくるもの也。邪氣さへしりぞくときは自ら正氣は盛になる理なり。我俗醫の言ところの意旨をうかがひ見るに、只針は痛を忍の勞あり。是を以て針するときは氣力おとろふと云ことぞ。いささか鍼經をあきらめて云にはあらず、まことに是俗説なり。針に痛みの性なきことぞ、いた

むと痛まざるとは刺者の能と不能とによるぞ、若妙手を得ば何ぞ忍痛の劳あらんや。

鍼經に云く、能刺者は肉を傷ず而能病に中とあるぞ。抑針の其來ること尚

きことぞ、寧一人の不能を以てながく萬世の針法をすつことをせんや。針に

忍痛の劳あるは刺者の不能なり。ただ針のみにあらず、藥に於ても亦然り、醫

のよしあしによつて茶の人を害すこと針よりもはなはだし。もし妙手に逢と

きは針茶ともに病を治するぞ、惡手に逢ときは針茶共に人を害すべし、なんぞひ

とり針において其害を論ずることあらんや。

又或人問て曰く、曾聞針に瀉あつて補なしと。正傳にも見へたり。故に人

みな恐ると。予が云く、針に瀉ありと云は、正に病の有餘するところを刺て實

邪を瀉するの義にて瀉茶の如きの義にあらず。又正傳に補なしと云といへども已

に鍼經に補の義を述たり。不足を刺して病を除くときは元氣みちを得てめぐる

ぞ、是元氣を生ずるにあらずや。

庸醫は補の補たることを知て、瀉の補たることを知ずと、程明祐が妙論にて悟る

べし。たとへば行人東より西へ通るに、中途に賊ありて通ることならず。時に

傍より見る者ありて、かの賊を追払ふときは行人やすくして道を通る。まさに

しるべし、途を通る者は正氣なり、これを妨る賊は邪氣なり、かの賊を追退る

者は針なり。

夫針に四法あり、其一つを迎隨と曰ひ、是針に補あり瀉あるの證なり、何ぞ偏

に補なしと云んや。

醫師として針をそしるは武士の兵刃をそしるごとし。國に奸賊あるときは

兵刃を用ひ、人に疾病あるときは針茶を用ゆ。たとへば茶は智仁のごとし、針は

兵のごとし、智仁を表にし兵を裏にするとときは剛柔そなはつて、

國豈治らざらんや。

凡そ人の經十二、各經五穴あり井榮俞經合といふ、是なり。五にして十二なる

ときは六十穴なり、是針の要穴なり。針灸の穴一身に三百六十穴、その針するところ要穴六十、又その要なるもの二十四穴なり。

腑の病には、各經に依て其經の俞を刺す、臟の病には、各經によつて其經の合を刺す、これ十二俞十二合あわせて二十四穴、これなり。

俞は、これ各經の本原なり、故に又原穴とも名るぞ、其經に病あるときは、その經の原穴を刺て治するぞ、其經實するときはこれを瀉し、虚するときはこれを補す。

經に曰く、瀉にはかならず方をもちひ、補にはかならず圓をもちゆ。或人の曰く方圓の義いかん。予が曰く、方とは氣の方に盛ならんとする方なり、是氣の將に盛ならんとするを見てこれを迎へて刺て氣の實を抜く。故に瀉には方をもちゆといふ。圓は行なり、移なり、宣ざるの氣を行し未復ざるの脉を移すなり。

宣ざるをめぐらし、いまだ復ざるを移してこれを濟ふ、これ虚氣を扶助してこれを補ふなり、迎隨の義なり。

たとへば足の三陽の經は、頭より足にいたるまで、針を刺すものの指を以て、經脉を摩り上げて針鉞を上に向て、經脉のすすむに逆て、これを刺してその實を抜く、これ迎て奪の義なり。

又刺人の指をもつて經を摩下して、針鉞を下に向て、經脉の後に隨て濟の義なり。虚して脉滯て移ず、故に後に隨ふ。刺て脉を移らしめ氣をのぶる。たとへば牛勞して車移らざるを、人後より輪を推て力を牛に合せて車を移すがごとし、これ隨の義なり。

經脉は子より午に至り、午より子に至つて、陰陽上下の分あり、今その大概を記す。ふかく思惟せば針は實を奪ひ虚をすくひ經脉をととなふものなり。經脉めぐらざるときは五藏六府邪を受ける。もし運用の道を断ば関格の憂あらん。夫関格は命を盡さずして死すと、これ古人の言なり。針はこれ急を救の方手、よく刺ときは其功、藥よりも早きぞ。

又經穴にかかわらずして病の處在を刺す、これを散針といふ。徐氏又これを天應穴と云。今の針科多くは此散針の一法のみ、たとひ經穴を考へて刺す者あれども

迎隨むいかいの理りをしらず。故ゆゑに針はり其經そのけいに中あたるといへども迎へてうばひ隨したがてすくふの義ぎなし。

又また長針ながはりを以てふかく刺さすゆへ、經脉けいみやくをつらぬきとをして、針はりむなく臟腑ぞうふに入いて損傷そんしょうをなす、古人こじんの禁いましむるところ也なり、慎つつしむべし。もろくの經脉けいみやくみな外ほかに有ありて針裏はりうらに入はいる其用そのようなし、其穴そのけつによつて針入はりいること二分ぶ、あるひは二分半ぶはん、あるひは三分ぶおのく分おのわかちあり。故ゆゑに昔むかしは周身そうみ三百六十六けつ、針はりも亦また三百六十本ほんありて其經そのけいを刺さすにその針はりをもつてす。それ針はりを刺者さすものよく知しれ、みだりに深ふかく刺さして損そんぜざるを損そんじ、傷やぶれざるに傷やぶれを成なすべからず。

當流傳受の奥儀

抑予が傳るところは本朝針家の祖、無分の末流なり。病の頭にあるも腹に刺し、病脚にあるも亦腹に刺す。

その刺に次第あり、諸病まづ臍の下二寸丹田の一穴を刺す。これ腎間の動氣にして十二經の根本なり、これを刺て元氣を却かし、其後に散針の法によつて、經穴に拘らずただ邪氣のある處を刺て元氣の巡途を開きて通ぜしむれば氣順ずる、氣順ずれば痰順ず、痰順ずれば熱散ずる、熱散ずれば風内に消す。況や又氣順ずるときは血活す、血活すれば潤ひ生ず、潤ひ生ずれば精を益す、精益ときは神内に立、それ針の功をなすこと此の如し。

古人は滿身に刺を好とせず、兪原に刺を好とす。腹に刺を好とせず、四肢に刺を好とす。是はただ臟腑にあたらんことを恐れて此のごとし。たとひ兪原を刺も、亦四肢を刺も意を得ざるときは不可なり、腹を刺とも意を得て刺は可なり。古人腹を刺すことを嫌たるは、針深く入ては藏府を損ず、藏府損ずれば忽死す。されば針の銳、皮裡膜外に止まつて藏府へ入ざるやうに刺べし。藏府へ入れば害をなすのみにあらず、其功なし。

その故は四氣外感の熱、七情内傷の火、蒸て膏膜乾き枯て、夏の温氣に汗多くして身に垢のつもるがごとし、又鼈の上の煤のごとし、冬の木葉に霜の結がごとし、況や又膜外乾くときは、鼓の皮を急に張たるがごとし。故に膜沈て裡につき藏府を押へ元氣の途をふさぐ、此時に當て氣滯りて諸病を起す。然れば針銳を膜外に止め、手法を柔かにして推下すときは、氣の途ひらく、氣の途ひらくときは血順る、血順るときは膜もうるほひを得ていよく和ぐなり。故に病の滯るところなし。

人多くは針を刺に此意を得ず、此意を會得して刺ときは、腹を刺といふとも何のおそる處かあらん。

内經に曰く、熱の熯々なる時、脉の渾々たる時、汗の漉々たるとき、大に勞たるとき、大に飢たるとき、大に渴とき、飽食したるとき、大に驚たるとき、是等はみな刺ことなかれと。

又形氣不足、病氣不足、これ陰陽みな不足也。これを刺すべからず。此を刺とき
「は」かさね、病氣不足、これ陰陽みな不足也。これを刺すべからず。此を刺とき
んば重て其氣を竭し、老者は絶滅し、壯者は復せずとあり。中にも經脈を刺の
針は脉中の氣を奪ふゆへに、みなこれを恐るべし。尤も針は經脈のところを除
きて、ともに膜を刺やはらぐべし。是すなはち扁鵲が抓膜の奇術なり。

針淺深の論

春夏は陽氣上るゆへに人の氣浮ふ、針をあさく刺べし。秋冬は陽氣下る、故に人
の氣も沈む、針を浅く刺べし。陳氏が云、春は氣毛の分にある、夏は氣皮の分
にあり、秋は氣肉の分にある、冬は氣骨髓にあり。是淺深の應なり、陽分に針す
るときは針を伏て刺す。

陰分に針を刺ときは、先左手にて針する處の榮俞を按摩て氣を散じ、すなはち針
を刺す。此を榮を刺に衛を傷ることなく、衛を刺に榮を傷ることなしと云なり。

阿是の穴

阿是の穴は秘傳なり。凡經穴三百六十所みな經の正道なり。其絡穴にかかはらず三百六十穴の外、痛む処を推て針灸を行ふ、これ阿是の穴なり。前にも記すごとく、これを天應の穴とも散針とも云なり、しかれども猥りに行ふべからず。

たとへば田を行に道を行ずして田の阿是を行ころなり。道にあらねども、田の中を行ずして阿是を行がごとし。經絡の外なれども妄にほどこすにはあらず、道理を考へ針灸をおこなふべし、乱にほどこすときは人をなやます。

然るゆへに秘中の秘としてこれを忤さず、初学の者のすることにあらず、經絡を會得したる上にて阿是の術を行ふときは奇効あり。

針刺て抜ざるを抜の法

鍼肉内に入こと四五分にして出がたきは、皮肉針先に纏付たるなり。此抜やうは、息の出るとき指に力を入れて一競にすつと抜べし。

又一二寸もひねり下して出ざるは、藏府の邪氣運動して針先に集りまとひ付たるなり。且進退動揺せしめ邪氣をちらして指に力を入れて心しづかに抜べし。出がたきとて病者も針者も驚くによつていよく抜ぬもの也。

あるひは其傍に別に針を刺て氣を省散して後にぬくもよし。

折針を抜の法

針折て肉の内にて出ずんば、牡鼠の肝と腦とを杵爛かし針口の上に塗べし。又象牙を粉にして水に調て貼べし。若針口愈合者は、平針にて割開て茶を貼べし。

針灸慎の事

凡そ針を用と欲ば前一日、後三日房事を慎むべし。灸は前三日、後七日房事を忌むべし。

又針灸を用る時、怒べからず、もし怒事あらば、暫く氣を定めて後に用べし。

又はなはだ飢、はなはだ飽き、酒に酔、労役する時に針灸すべからず。若し勞役することあらば、暫く休めて後に為べし。

灸の後三日風呂に入べからず、洗浴は翌日より用ゆべし。

又風寒を禁ず、よく窓隙を閉でおこなふべし。

灸穴を點する法

灸穴を點せば、天氣好く曇らず風なき時、窓戸をふさぎて病人の暑からず寒からざるやうにして、醫者心を収め、點すべき俞穴を思慮し、病人の四躰少しもかたぶかず真直にして、分寸を量り、俞穴を定め、手を以て穴を按に指の下陷み、病人の心に快く徹ゆるは、これ俞穴に的る證なり。

俞穴すこしも差へば徒に好肉を傷りて病に益なし。坐して點するときは坐して灸すべし、立て點するときは立て灸すべし。

左より先にして右を後に、上部より先にして下部を後に、背より先にして腹を後にすべし。但し女は右より先にして左を後にすべし。

行ぐく阿是と行ぐく経絡の外
あれども冥に於ては其のわづらひ道
理を考へ針灸をどうも下しに於て
これと其のわづらひ然るや否や
中の秘をくこれと件は初学の者
のどうもわづらひ得るや否や
上て阿是の術を行ふに奇効
針刺く拔きと抜の法
鐵肉内に入て四五分あり出さるへ
皮肉針先を懸けしき此抜やん
息の出るを指し力を入て一競に
と抜べし又二三回の繰り返す
ざる藏府の邪氣運動し針先が
集りしとの付るなり且進退動揺

しめ邪氣をりして指を力を入
心あつて小抜べし出さるると病者
と針者と驚くはこれのわづらひ
の也わづらひ其傍に別は針刺て
氣を省散し後みわづらひ

折針と抜の法

針折く肉の内小在て出でんば
鼠の肝と腦と并爛し針口の上
を塗へし又象牙と粉とを水に調
と貼る若針口愈合者へ平針小
て割開く茶と貼べし

針灸慎の事

九針を用て灸へ前二日後三日房事
使ひべし灸へ前三日後七日房事忌

なり又針灸を用る時怒るべし
恐事ある暫く氣を定めて後を用
べし又いかに針を刺し酒を
酔後役する時針灸をへし若
役するに暫く休めて後灸
べし灸の後三日風呂に入るを
浴に翌日を用ふ又風寒を
く窓隙を閉てかきふ
灸先と點する法
灸先を點て天氣好く暑く風大
時窓戸をあけて病人の暑く
寒くを察し灸先を灸て收め
灸先を灸て思慮し病人の四肢
少くとかきふ直直しく分す

量り灸先を定め手と以て灸を灸
の下暗く病人の心に快く徹する
灸先を灸て證あり灸先を灸て
灸先を灸て病に益あり灸て
灸先を灸て灸て灸て灸て灸て

十二經旺分の時

寅の時肺の氣主る卯の時大腸の氣
至る辰の時胃の氣主る巳の時脾の
氣主る午の時心の氣主る未の時小
腸主る申の時膀胱の氣主る酉の時腎の氣

十二經旺分の時

寅の時は肺の氣至る、卯の時は大腸の氣至る、辰の時は胃の氣いたり、巳の時は脾の氣いたる、午の時は心の氣いたる、未の時は小腸、さるの時は膀胱、とりの時は腎、いぬの時は心胞絡、亥の時は三焦、ねの時は膽、うしの時は肝の氣いたる。此旺分の時を考へて、それゝに灸すれば其驗あり。

四季の人神

春は左脇、夏は臍、秋は右の脇、冬は腰

毎日の人神

一日足の太指、二日外踝、三日股の内、四日腰、五日口、六日手、七日内踝、八日足腕、九日尻、十日腰背、十一日鼻柱、十二日髮際、十三日牙齒、十四日胃腕、十五日遍身、十六日胸、十七日氣衝、十八日股、十九日足、二十日内くるぶし、廿一日手小指、廿二日外くるぶし、廿三日肝俞と足と、廿四日手陽明のけいのけつ、廿五日足陽明のけいのけつ、廿六日むね、廿七日ひざ、廿八日陰、廿九日ひざ脛、卅日足の趺

十二時人神

卯おもて 辰いただき 巳手 午むね 未はら 申心
酉せなか 戌こし 亥もも 子あし 丑かしら 寅みみ

血忌日

正うし 二ひつじ 三とり 四さる 五う 六とり
七たつ 八いぬ 九み 十い 十一むま 十二ね

血支日

正うし 二とら 三う 四たつ 五み 六むま
七ひつじ 八さる 九とり 十いぬ 十一い 十二ね

長病日

この日 針灸ならびにはじめてくすりをもちゆることをいむ
六日 十五日 十八日 廿三日 廿四日 廿八日 廿九日

艾葉の製法

三月三日、五月五日に採もの神靈あり、陳久きはいよくよし、紙にて巻き、長さ二分ばかりに切べし、闊さは切口二分ばかり、人々の氣力に應じて 大小を量るべし。小さければ灸穴にはづることあり、小児には小麥ほどにすべし、虚人にはやわらかにひねるべし。

灸火の法

鉄石にて打て火を出し、麻油に燈芯を入、ともして用ゆべし。天の火はいよくよし、諸木の火魚の油はわるし、箸は桃の枝よし、竹もくるしからず、灸し終るとき口にて塩をかみて 其灸穴に付て又二三壯灸して置べし。

尺寸を定る法

男は左、女は右の手の中指の第二の節上の折目と下の折目との間を、其人々の一寸とさだむるなり。折目に内外あり、食指の方へ向たる折目を取べし。中指を屈めて取る、かがむるに環のごとくすべし。

「中指を屈る圖」 中ゆび 無名指 しべにて 人さし 大ゆび

69

髪際をさだむる法

髪際の分明なるは子細なし。若髪抜けてしれざるは、兩の眉の正中より三寸上を前の髪際とす。背の大椎より三寸上をうしろの髪際とさだむるなり。

大椎をさだむる法

大椎より上に小椎一つも二つもあり、又一つもなきもあり。

大の字に心を付て取べし。又秘傳に病人を俛かしむるに、小椎は頸に付て下る、大椎は脊骨に付て動かず。又肩と同じ通りなるが大椎とも云。

灸補瀉の法

病實する者はこれを瀉し、正氣虚する者はこれを補ふ。瀉には艾炷を吹き或は扇にてあふぎ滅す。補には艾炷を吹ずして火のおのづから滅次第にするなり。

灸するとき眩暈を治する法

灸するとき眩暈することあらば、冷き物にて灸の処を壓せばおのづから甦る。良久しくして稀粥あるひは姜湯を用ゆべし。

灸瘡を發する法

凡灸して潰ざれば其病愈ず。かるがゆへに灸瘡を發せんと欲せば、古き草履の底を焙りあたたため火痂の上を摩ること十遍ほどすれば三日にして潰ゆる。又葱の莖三五本を燂灰の中にあたたため火痂を慰せば三日めにうぐふ、妙なり。

灸瘡を洗ふ方

凡そ灸し已てまづ茶湯にて灸瘡のめぐりを温めあらへば、風氣を除て經脉を通じ、よく潰てやまひを愈す。葱の赤皮の根薄荷各等分。右判み煎じて絹に浸しあたたため潤す。

火癰落て後あらふ方

桃枝「ひがしへさしたるゑだ」、柳皮「ひがしへさしたるゑだのかは」

右 剉み煎じて 火癰落て後あらひ温むれば 風を去り 氣血を循し 病を治す。

又 灸瘡うぐひ ただれて痛み甚しくは、胡荽 黃連 おのく等分 煎じてあらふべし。

又 血出て止ざるには 百草霜を貼てよし。又 潰ただれて愈がたきには、無名異を鉄漿にとき貼べし、又 馬の脂を付てよし。

周身骨度尺寸の定

兩の肩の真中より背の大推までの長さを筵にて量て一尺八寸とし、十八に折りて一折を一寸とし此一寸を頭の豎の寸とす。

○髮際より頤まで長さ一尺。

○耳の上尖のとをりを引まして頭のまろみ二尺六寸とし、二十六に折て一折を一寸とし、これを頭の横の寸とす。

○喉の高骨結喉より缺盆まで四寸、けつばんより髑髏まで九寸、けつうより天樞まで八寸、天樞より横骨まで六寸半とす。兩乳の間ひろさ九寸半、胸の圍四尺五寸、

腰のまはり四尺二寸とす。脇下より季脇まで長さ一尺二寸。

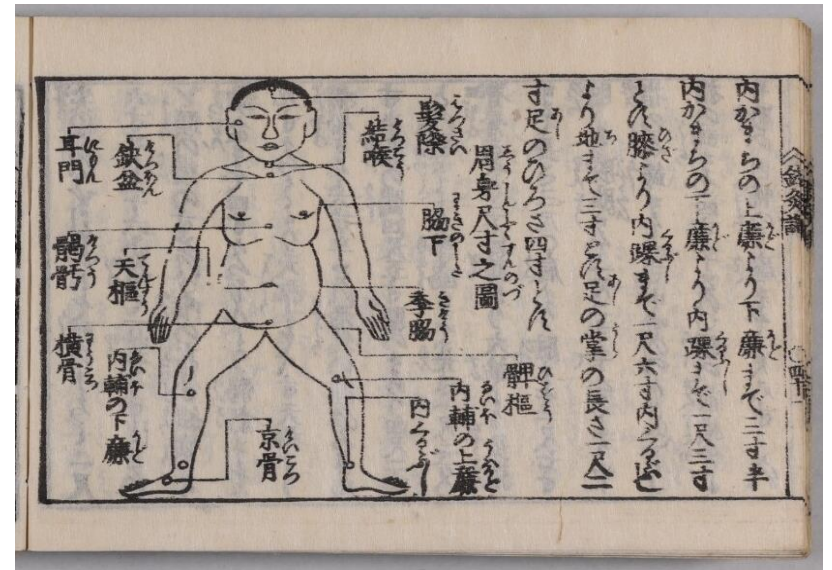
○脊骨すべて二十四節なり、大推より長強まで長さ三尺。

○肩より肘まで一尺七寸、肘より腕 眩まで一尺二寸、手くびより中指の本節まで四寸、中ゆびのもとぶしより指の頭まで四寸半とす。

○腰の前横骨より股の内輔の上廉まで一尺八寸とす、内かまちの上廉より下廉まで三寸半、内かまちの下廉より内踝まで一尺三寸とす。膝より内踝まで一尺六寸、内くるぶしより地まで三寸とす。足の掌の長さ一尺二寸、足のひろさ四寸とす。

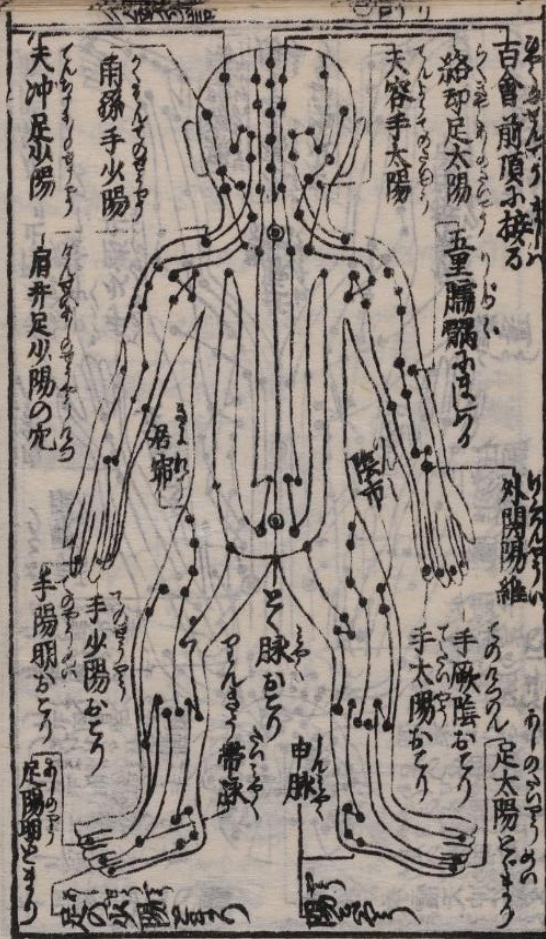
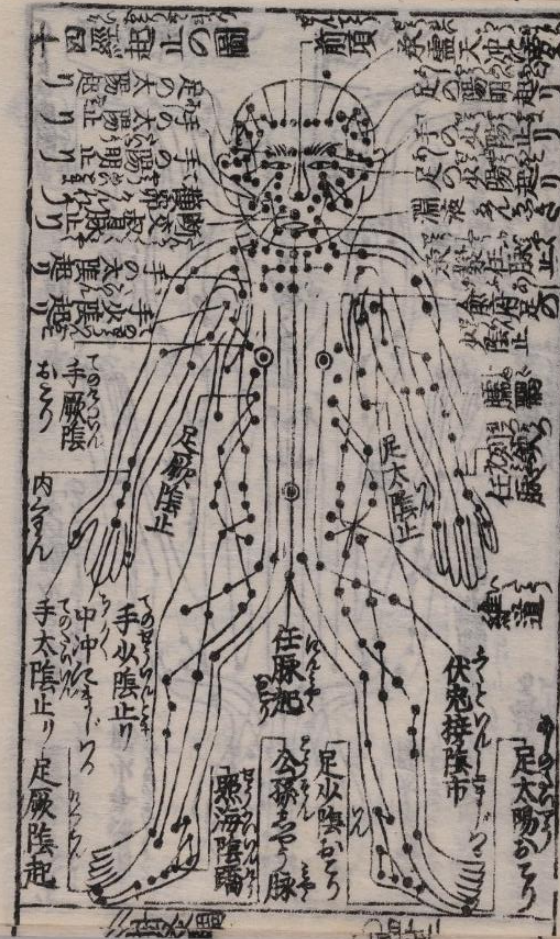
「周身尺寸之圖」

髮際	結喉	脇下	季脇	髑髏	内輔	上廉	内くるぶし
耳門	缺盆	髑髏	天樞	横骨	内輔	下廉	京骨



十四經仰伏總圖

「十四經起止の圖」



十四經脉是動所生病

手太陰の脉は中焦「臍の上四寸也」に起り、下りて大腸を絡ひ、還て胃口を循り、膈に上て肺に屬す。肺の系より横に腋下に出て、下て膈内に循り、少陰心主の前行て、臂の内上、骨の下廉を循て、寸口「手の脉処」魚際に入り、魚際より大指の端に出。その支は腕後より直に次指の内廉に達し、其端に出て、手陽明の經に交る。

此經氣多く血少し。

是動ずるときは、肺脹満し喘欬し、鉢盆いたみ、兩手を交て瞽む。

生ずる所の病は、咳嗽、上氣、喘喝、煩心、胸みち、膈、臂の内いたみ、肩背いたむ。

實は風寒、汗出、中風す。虚は少氣、溺色変じ、遺失す。

手陽明の脉は、大指の次指の端に起り、指の上廉を循りて合谷の兩骨の間にでて、上て兩筋の中に入り、臂の上廉を循て、肘の外廉に入、膈外の前廉を循て、肩に上り、髃骨の前廉に出て上、柱骨の會上に出て、下て鉢盆に入り、肺を絡て膈に下り、大腸に屬す。其支は鉢盆より頸に上り、頰を貫き、下齒縫の中に入り、還て口を挟み、左右に交ゆ、上て鼻孔を挟む。

此經氣血俱に多し。

是動ずるときは、齒いたみ、經腫る。

生ずる所の病は、目黄み、口乾きて、鼻衄、喉痺、肩前膈いたみ、次指いたむ。

實するときは熱腫し、虚するときは寒慄して復せず。

足陽明の脉は、鼻の交頰中に起る、下て鼻の外を循て、上齒の中に入り、還出て口を挟み唇を環り、下て羨漿に交る。却て頤後下廉を循り、大迎に出て頰車を循り、耳前に上り客主人をすぎ、髮際をめぐり額顙に至る。其支の別は、大迎の前より人迎に下り、喉嚨を循り、缺盆に入り膈に下り、胃に屬し脾を絡ふ。其直行は、缺盆より乳の内廉に下、下て臍を挾て氣衝の中に入る。一支は胃の下口に起て腹中を循り、下て氣衝の中に至て合ひ、髀関に下て、膝臑に入り、下て鼈の外廉を循り、足跗に下り、中指の外間に入る。一支は膝を下て三里に注ぎ、わかれて中指の外間に入る。一支は別て跗上より大指の間に入てその端に出る。

此經氣多く血も多し。

動ずるときは、惡寒し欠伸し顔黒く人と火とをにくみ木の音を聞ばおどろき高きに上りて歌ひ衣を棄て走る。

生ずる所の病は、狂瘡濕淫汗出はなぢ口ゆがみ唇裂くびはれこひ水腫むねはり股膝跗足跗中指みないたむ。實するときは、身前熱し善飢溺黄なり。虚するときは、身前寒慄し脹満す。

足太陽脾の脉は、大指の端に起り、指の内側、白肉の隙をめぐり、靨骨の後をすぎ、内踝の前廉に上る、腓内に上り、跗骨の後をめぐり、厥陰の前に交り、出て上て、ひざ股の内廉をめぐり、腹に入り、脾に屬し胃をまとひ、膈に上り、咽を挟み、舌の本を連て舌の下に散ず。其支は、胃よりわかれて、膈に上り、心中に注ぐ。

此經、氣多く血少し。

是動ずるときは、舌本こはり嘔吐し胃脘いたみ腹はり善噫し後と氣とを得るときは快し身體みなおもし。

生ずる所の病は、舌の本いたみ體動揺ことあたはず不食煩心心下いたみ寒瘧瘡瘕洩水下黄疸夜不寐強立ば股膝の内腫足の大指なゆる。

十四經脈是動所生病

手太陽の脈は中焦膈より起り下りて
大腸と絡み還り胃口より循り膈に上りて
肺に屬し肺の系より横に膈下に出で
下りて膈内より循り少陰心主の前を行く
臂の内上骨の下廉より循てす口手の魚
際より上り魚際より太指の端に出る
支は腕後より直ち次指の内廉に達し
其端に出し手陽明の經に交る此經氣
多く血火より長動するを肺脹満し
喘咳し欬金いゝ兩手と交り移り生
ずる所の病は咳吐血喘喝煩心胸
膈臂の内より肩背のむく實は風寒汗
出中風と虚は氣逆色変し遺失を

手陽明の脈は太指の次指の端より起り
指の上廉より循りて合谷の兩骨の間より
出て上より兩筋の中に入り臂の上廉より
循て肘の外廉に入り膈外の前廉より循
て肩より上り體骨の前廉に出上り柱
骨の會上に出下りて欬金に入り肺に
屬し膈より下り大腸に屬し其支は欬金より
循り頸より上り頰より貫て下齒縫の中に入り
還り口を挟み左右に交り上り鼻孔より挟
ひ此經氣血俱に多し是動するを口乾
口乾し口鼻衄喉痺肩前腫いゝ次指
のむく實をさるるを熱腫し虚をさるるを
寒腫し復をさるるを

足陽明の脈は鼻の交頰中より起り下りて
鼻の外より循て上齒の中に入り還り出
て口を挟み唇より環り下りて業業に交り却
り頤後下廉より循り大迎より出て頰車
より循り耳前に上り客主人より上り鬢
際よりめぐる額顙に至る其支は別は太
迎の前より入迎より下り喉嚨より循り
欬金に入り膈より下り胃に屬し脾と
絡み其直行は欬金より乳の内廉より下
りて膈より挟て氣衝の中に入り一の支は胃
の下口より起り腹中より循り下りて氣衝の
中に入り合ひ髀關より下り膝膕に入り
下りて腓の外廉より循り足跗より中趾
の外間に入り一の支は膝より下り三里に注ぎ

さるるを中趾の外間に入る一の支は別
り上り太指の間に入りこの端より
出る此經氣多く血を多く動するを
さるる惡寒し大伸し顔黒し人々を
かくし木の音を聞かぬをさるる高き
上りて歌ひ衣を棄て走る生ずる所の
病は狂瘡濕淫汗出るを口を唇
裂みをさるるを口水腫むをさるるを股膝
筋足跗中趾のむく實をさるるを久病
前熱し善飢溺黄多り重なるをさるるを
前寒慄し脹滿を
足太陽の脈は太指の端より起り指の内
側白肉の際よりめぐる骸骨の後より入
り内踝の前廉に上り膈内に上り體骨の

手少陰の脉は、心中に起り、心系に屬し、膈を下て小腸を絡ふ。其支は心系より上て咽を挟み、目に系る。其直なるものは心系より却て肺に上り、腋の下に出、下て膈内後廉をめぐり太陰心主の後に行き、肘の内廉に下り、臂の内後廉をめぐり、掌の後兗骨の端に抵り、掌の内廉に入り、小指の内をめぐり、其端にいつる。

此經、氣血ともに多し。

是動ずるときは口渴 噎かはき 心痛す。

生ずる所の病は、目黄み 脇いたみ 膈臂の内の後廉いたみ 厥すれば掌の中熱していたむ。

手太陽の脉は、小指の端に起り、手の外側をめぐり、腕に上り、踝の中に出て、直に上て臂骨の下廉をめぐり、肘の内側兩骨の間 膈外の後かどを循り、肩解に出て肩胛を繞り、肩の上に交り、缺盆に入り、心をまとひ咽をめぐり、膈に下り、胃に抵て小腸に屬す。其支は缺盆より別れて頸をめぐり、頬を上り目の銳眥に至り、却て耳の中に入る。その支は、頬を別て頤に上り、鼻に抵り、目の内眥に至る。

此經、血多く氣すくなし。

是動ずるときは、噎いたみ 頤はれ回顧べからず 肩拔がごとく 膈折に似たり。生ずる所の病は、耳聾 目黄み 頬腫 頸頤肩膈肘臂の外後廉いたむ。

足太陽膀胱の脉は、目の内眥に起りて、額に上り、巔上に交る。其支は巔より耳の上角に至る。その直行のものは、巔より入、腦を絡ひ、還て出てわかれて項に下る、肩膊の内を循り、脊を挟み腰中に抵り、入て脊をめぐり、腎をまとい膀胱に屬す。一の支は、腰中より下て腎を貫き、脛中に入る。一支は、膊内の左右より別れ下て胛をつらぬき、脊の内を挟み髀樞を過ぐ、髀外の後かどをめぐり下て脛中に合ひ、下て腓の内をつらぬく、外踝の後に出で、京骨をめぐり、小指の外側の端にいたる。

此經、血多く氣少し。

是動するときは、頭痛、目眈に似て、項拔がごとく、腰折るに似たり、腿こはりいたみ脊の中央にとをり、咽むすほふるが如く、腓裂がごとし。是筋をつかさどる。

生ずる所の病は、痔瘡、狂癲、かしら顙、頂痛、目黄、涙出、はなぢ、項せな腰尻、脛、腓、脚みないたむ、小指もちひられず。

足少陰腎の脉は、小指の下に起り、斜に足心に趣く、然谷の下に出で、

内踝の後へをめぐり、別れて跟中に入る。腓内に上り、脛内廉に出で、股の

内後廉に上り、脊をつらぬき、腎に屬し、膀胱を絡ふ。其直なるものは、腎より

上て、肝膈をつらぬき、肺中に入、喉嚨をめぐり、舌の本を挟む。其支は肺

より出で、心を絡ひ胸中に注ぐ。

此經、氣多く血少し。

是動するときは、飢ても食を欲せず、面黒く、喘、欬、唾血、坐して起と欲し

目眈々として所見なきがごとし、心懸が如く、飢るがごとし。氣不足し、善恐

れ、心惕々として人の捕とするがごとし。

生ずる所の病は、口熱、舌乾き、咽腫、上氣し、噎乾きいたみ、煩心、心痛、黄疸、腸癰、脊しり、股内の後廉いたみ、痿厥して卧ことを奢み、足の下熱していたむ。

後とめぐる厥陰の前に入り出て上と
ひき股の内廉とめぐる腹に入り臍を屬
一胃とすこの臍に上り咽と挾と舌の
本と連て舌の下に散る其支へ胃より
まわて臍に上り心中に注ぐ此經氣
多く血少一是動多るとん舌本より
嘔吐一胃脘の腹より善噦一後と
氣と得るとん快一身體とあはれ
生ずる所の病は舌の本の體動揺
あとの病は不食煩心下り寒瘧
瘧瘧洩水下黃疸夜不寐強立一肢膝
の内腫足の太指あや
手少陰の脈へ心中に起り心系に屬一
臍と下り小腸と絡其支へ心系より

上て咽と挾と目の系より其直るのへ
心系より却て肺に上り腋の下に出
下り臍内後廉とめぐる太陰心主の後
み行し肘の内廉に下り臂の内後廉
とめぐる掌の後兌骨の端と抵り掌の
内廉に入り小指の内とめぐる其端と
ひき此經氣血と多一入動とん
口渴盛るとん心痛を生ずる所の病目
黄と臍の臍膈の内の後廉に屬
それと掌の中熱といふ
手太陽の脈は小指の端より起り手の
外側とめぐる腕に上り踝の中に出と
直に上り臂骨の下廉とめぐる肘の内
側と兩骨の間に出て上り臍外の後と

循り肩解に出て肩臑と繞り肩の裏
交り欽金に入り心とく咽とめぐる
臍より下り胃に抵て小腸を屬と其支へ
欽金より別と頸とめぐる頰と上り
目の銳眦に至り却て耳の中に入る
支へ頰と別と頰に上り鼻に抵り目
の内眥に至る此經血多く氣多く
是動多るとん盛いと頰とれ四顧
るす肩拔がふと臍折は似る
生ずる所の病は耳聾目黄と頰腫頸
頰肩臑肘臂の外後廉に屬
足太陽膀胱の脈は目の内眥に起り
頰の上り鼻上と交る其支へ頰より
の三角に至るその直行り頰より入

臍と絡の還て出くワレと頰より下
肩膊の内循り脊と臍に抵
り入く臂とめぐる臂と肩膊に
屬と一の支へ腰中より下り背と貫
と下り臍とめぐる其支へ内と挾と臍
と通く臍外の後と下り下り
中に入る下り臍の内とめぐる
の後に出る京骨とめぐる小指の外側
の端より此經血多と氣少一是
動多るとん頭痛目赤は似て項後
とく腰折は似る臍とめぐる
脊の中央より咽とめぐる如
く臍裂とん是筋とつる生ずる

所の病ハ痔瘡狂癲ハ頭頂痛
目黄ハ涙出ハ多ハ項デカ腰尻
腫脚腫ハ小指の下に起リ斜
足少陰腎の脈ハ小指の下に起リ斜
足心ハ熱ク然谷の下に内踝の後
とめり別と踵中に入る臑内に上
リ臑内廉に於て股の内後廉に上
リ脊をつめ腎に屬ハ膀胱と絡
其直なるハ腎より上テ肝膈と
つめ肺中に入喉嚨とめり舌の
本に挟ハ其支ハ肺より出テ心と絡ハ
胸中に注ク此經氣多ク血少ナリ是
動多ク汗ハ飢ハ食ハ欲デ面
黒ク喘欬唾血坐レ起レ欲レ目

肺ハ心所見多ク心懸ハ如
飢ハ氣不足ハ善恐ハ心惕々
して人の捕とすハ生る所の癰
口熱ハ舌乾ハ咽腫ハ氣ハ盛乾ハ
煩ハ心煩黃疸腸癰脊あり腹
内の後廉に癰一と肝と心
と足の下熱ハ心
手厥陰心包絡の脈ハ胸中に起テ出テ
心包に屬ハ臑と下テ三焦と上テ
臑とめり臑に於て腋に下ると三
寸上腋の下に抵リ下臑の内を循リ
太陰少陰の間を行ハ肘の中に入臂ハ
下リ兩筋の間を行ハ掌中に入り中
指とめり其端に於て支のようれハ

手厥陰心包絡の脉は、胸中に起て、出て心包に屬し、膈を下て三焦をまとふ。支は胸をめぐりて脇に出て、腋に下ること三寸上、腋の下に抵り下、膈の内を循り、太陰少陰の間に行き、肘の中に入、臂に下り兩筋の間に行き、掌中に入り中指をめぐり其端に出る。支のわかれは、掌の中より小指の次の指をめぐりて其端に出る。

此經、氣少く血多し。

是動ずるときは、手心熱し、臂肘攣急し、腋腫る。甚則ときは、胸脇支滿、心中澹々として大きに動く、面赤く目黄に笑て休ず。

生ずる所の病は、煩心、心痛し、掌中熱す。

手少陽三焦の脉は、小指の次指の端に起て、上て次指の間に出で、手表腕をめぐり、**臑**の外、兩骨の間に出で、上て肘をつらぬき、膈の外をめぐり、肩に上て、足の少陽の後に交り出て、缺盆に入り、膈中にまじる。散じて心包をまとい膈に下て、偏に三焦に屬す。其支は膈中より上て缺盆に出て項に上りて耳の後を挟み、直に上て耳の上角に出て、屈て頰に下り頤に至る。その支は耳の後より耳の中に入り、却て出で目の銳眚に至る。

此經、氣多く血すくなし。

是動ずるときは、耳聾のどはれ喉痺、是氣を主る。

生ずる所の病は、汗出、目銳眚いたみ頰いたむ耳の後肩膈肘臂の外みな痛み、小指の次の指もちひられず。

足少陽膽の脉は、目の銳眥に起り、上て頭角に抵り、耳後に下り、頸を循り、手少陽の前をゆき、肩上に至り、却て少陽の後に交り、出て缺盆に入る。其支は耳の後より耳中に入り、耳の前に出走り、目のまじりの後に至る。一の支は目のまじりより別れて大迎に下り、手少陽に合し、頤に抵り、下て頰車に加り、頸を下り缺盆に合し、胸中に下り膈をつらぬき、肝をまとい膽に屬し、脇の裏をめぐり、氣衝に出て毛際を繞り、横に脾、厭、中に入る。其直なるものは、缺盆より腋に下り、胸をめぐり、季脇を過ぎ、下て髀陽をめぐり、膝の外廉に出て、外の輔骨の前に下り、直に下て絶骨の端に抵り、下て外踝の前にいで、足の跗上を循り、小指の次指の間に入る。一の支はわかれて、跗上より大指の間に入り、大指の岐骨の内をめぐり、その端に出。還て貫て爪甲に入り、三毛に出る。

此經、氣多く血少し。

是動ずるときは、口苦く善太息し心脇いたみ轉側しがたく、甚しきときは面塵き體澤ひなく足外熱す、これ骨をつかさどる。

生ずる所の病は、頭の角頤いたみ目の銳眥痛み缺盆の中腫痛み腋の下はれ馬刀挾癭汗出振寒瘡瘡、むねわき膝髀の外脛にいたり絶骨外踝の前及び諸節みな痛み、小指の次指もちひられず。

足厥陰肝の脉は、大指の聚毛の上におこり、足跗の上廉をめぐり、内踝を去こ
と二寸、踝に上ること八寸、太陰の後に交り出て、膈の内廉に上り、股をめ
ぐり陰中に入る、陰器を環り、小腹に抵、胃を挾て肝に屬し膽をまとふ、上
て膈をつらぬき脇肋に布き、喉嚨の後をめぐり上て、頑頰に入り、目系につ
らなり、上て額に出て、督脉と巔に會す。其支は目系より、頬の裏に下り、
唇の内を環る。一支は復肝より別れて膈上をつらぬき肺に注ぐ。

此經、血多氣少し。

是動すれば、腰痛て俛仰すべからず、丈夫は癰疽、婦人は小腹はれ、甚しきと
きは噤乾き、面塵き、色を脱す。是肝を主る。

生ずる所の病は、胃みち嘔逆洞洩狐疝遺溺癰閉。

凡此十二經の病ひ、實するときは之を瀉し、虚するときは之を補ひ、熱るとき
は之を疾し、寒するときは之を留、陷下するときはこれを灸し、實せず虚せざる
ときは經を以てこれを取る。

掌の中より小指の次の指のめづり
其端に出る此經氣少く血多し是
動せり此の手心熱し臂肘寧急
一脈腫る甚則とんハ胸膈支滿心中
澹々として太さの動く面赤く目赤ふ
笑く休む生る所の病ハ煩心心痛
一掌中熱と
手少陽三焦の脈ハ小指の次指の端か
起て上へ次指の間に出て手表腕と
めろ骨の外兩骨の間に出て上へ肘
とつゝめろ腕の外へめろ肩に上て足
の少陽の後に交り出て鉄盆に入り
臑中に入り散りて心包とよとの
脇の下へ偏り二焦に屬す其支ハ腕

中より上へ鉄盆に出て項に上りて
手の後へ挟み直り上て手の上角か
出て屈み頬の下り頰に至るその
支ハ耳の後より耳の中に入り却て
出で目の銳眚に至る此經氣多く
血多し是は動せりとんハ耳聾と
これ喉痺是氣主る生る所の病
ハ汗出目銳眚の頬の下の耳の後
肩脇肘臂の外へ支痛と小指の次
の指のちひらき
足少陽膽の脈ハ目の銳眚か起り上
へ頭角に抵り耳後より下り頰と循
り手少陽の前とゆき肩の上に至り
却て少陽の後に交り出て鉄盆に

入る其支ハ耳の後より耳中に入り
耳の前に出走り目のまろの後に
至る一の支ハ目のまろより別れて
大迎に下り手少陽の合へ頰の抵り
下て頰車にかり頰より下り鉄盆か
合へ胸中に下り脇とつゝめろ肝
とよとの膽は屬し脇の裏めろ
氣衝に出て毛際と繞り横は髀厭
の中に入る其直るるのハ鉄盆より
腋より下り胸へめろ季脇と過さ
下て髀陽とめろ膝の外廉か出て
外の輔骨の前より下り直り下て絶
骨の端に抵り下て外踝の前より
足の趾より循り小指の次指の間に

入る一の支ハより上へ趾より大指
の間に入り大指の岐骨の内へめろ
その端に出還て貫て爪甲に入り三
毛に出る此經氣多く血少し是は動
せりとんハ口苦く善太息し心脇
の轉側しとん甚しとんハ
面塵と體澤の多く足外熱とこれ
骨つとんと生る所の病ハ頭の角
領つと目の銳眚痛と鉄盆の中
腫痛と腋の下へ馬刀挟撃す出
振寒と瘰癧むのハ膝髀の外脛か
いり絶骨外踝の前及び諸節を
痛く小指の次指のちひらき
足厥陰肝の脈ハ大指の裏毛の上に

たり足踏の上廉より内踝まで
 二寸踝の上より八寸太陰の後
 に交り出て膈の内廉より股の
 陰中に入る陰器を環り小腹を抵
 胃と接ぐ肝を屬し膽より上
 膈よりめき脇肋に布き喉嚨の
 後より上より頤頤に入り目系に
 らより上より頤に出て督脉を顛に會
 と其支は目系より頤の裏より唇
 の内を環る一支は後時より別れて
 膈上よりめき肺に注ぐ此經血多
 氣少は是動どれは腰痛て倦仰と
 べしす丈夫は癰疽婦人小腹れ
 甚しとどれは盛乾と面塵と色と斑

金匱要略
 卷第十

是肝と主る生むる所の病は胃と
 嘔逆洞洩狐疝遺溺癰閉
 凡此十二經の病の實と虚とを
 と濁し虚とをくく之を補の熱と
 と之を疾し寒するは之を留
 脂下とくくはこれと灸し實を
 虚せざるは經を以てこれと取る
 督脉は下極の膈の間より起る脊裏の
 血と上より風府に至り膈に入る顛と
 上り頤よりめき鼻柱に至り陽脉は
 海に屬し此病とくく脊強り反折る
 其絡は陰器よりめき墓間より合し墓
 後と續り別し股より繞り少陰巨陽
 小至る中絡は少陰に合し腹内後廉

小より脊よりめき腎に屬し太陽
 と目の内眥より起り頤より上り顛と
 小交り入て膈より入る還出て別に
 項と下て肩膊を循り脊と接し腰中
 に抵る入と脊を循り腎と絡ふその
 少腹直に上るは膈の中央よりめき
 上より心よりめき喉に入り膈より上り唇
 と環り上て兩目の中に入る此病ハ
 少腹より上て心に衝くは心と大小便
 通せし衝病とくく癰疽遺溺癰乾
 督脉の別名は長強といふ脊を俠し項
 以上り肩膊の左右に當り別に太陽
 小走り入て脊を貫く實とる則は脊強
 虚とるは頭重これと所別と取る

金匱要略
 卷第十

任脉は中極の下に起るも際より
 腹の裏にめぐり関元より下るのり
 喉嚨に至り陰脉の海に屬し又曰
 胞中に起る脊の裏よりめき經絡の
 海より其浮て外よりめき腹よりめき
 上行し咽喉に會し口より唇
 口より血氣をめぐらるは肌肉
 熱と血獨り盛るとくく毫毛を生
 と其病とくく男子は七疝女子は帶下
 瘕瘕
 奇經八脉
 督脉 任脉 陽蹻脉 陰蹻脉
 衝脉 陽維脉 陰維脉 帶脉
 禁針禁灸の圖。ハ針・ハ灸

督脉は下極の腧「二陰の間」に起る、脊裏に並て、上て風府に至り、脳に入る、巔に上り額をめぐり、鼻柱に至り、陽脉の海に屬す。

此病ときは、脊強り、反折る。

其絡は陰器をめぐり、篡間に合し、篡後を繞り、別に腎を繞り、少陰と巨陽に至る。中絡は少陰に合し、腹内後廉に上り、脊をつらぬき腎に屬し、太陽と目の内眥に起り、額に上り巔上に交り入て腦をまとひ、還出て別に項を下て肩膊を循り、脊を挟み腰中に抵る。入て脊を循り腎を絡ふ。その少腹直に上るものは、臍の中央をつらぬき、上て心をつらぬき、喉に入、頤に上り唇を環り、上て兩目の中に系る。

この病は、少腹より上て心に衝ていたみ、大小便通ぜず、衝疝となる、瘰癧、痔遺溺、噎乾く。

督脉の別名を長強といふ。脊を挟み項に上り、肩胛の左右に當り、別に太陽に走り入て脊を貫く。

實する則是脊強、虚するときは頭重。これを所別に取る。

任脉は中極の下に起て、毛際を上り、腹の裏をめぐり、関元「ほその下三寸」にのぼり、喉嚨に至て、陰脉の海に屬す。又曰く、胞中に起て、脊の裏をめぐる、經絡の海たり。其浮て外なるものは腹をめぐり、上行て咽喉に會す、わかれて唇口をまとふ。血氣さかんなるときは肌肉熱す、血獨り盛なるときは毫毛を生ず。

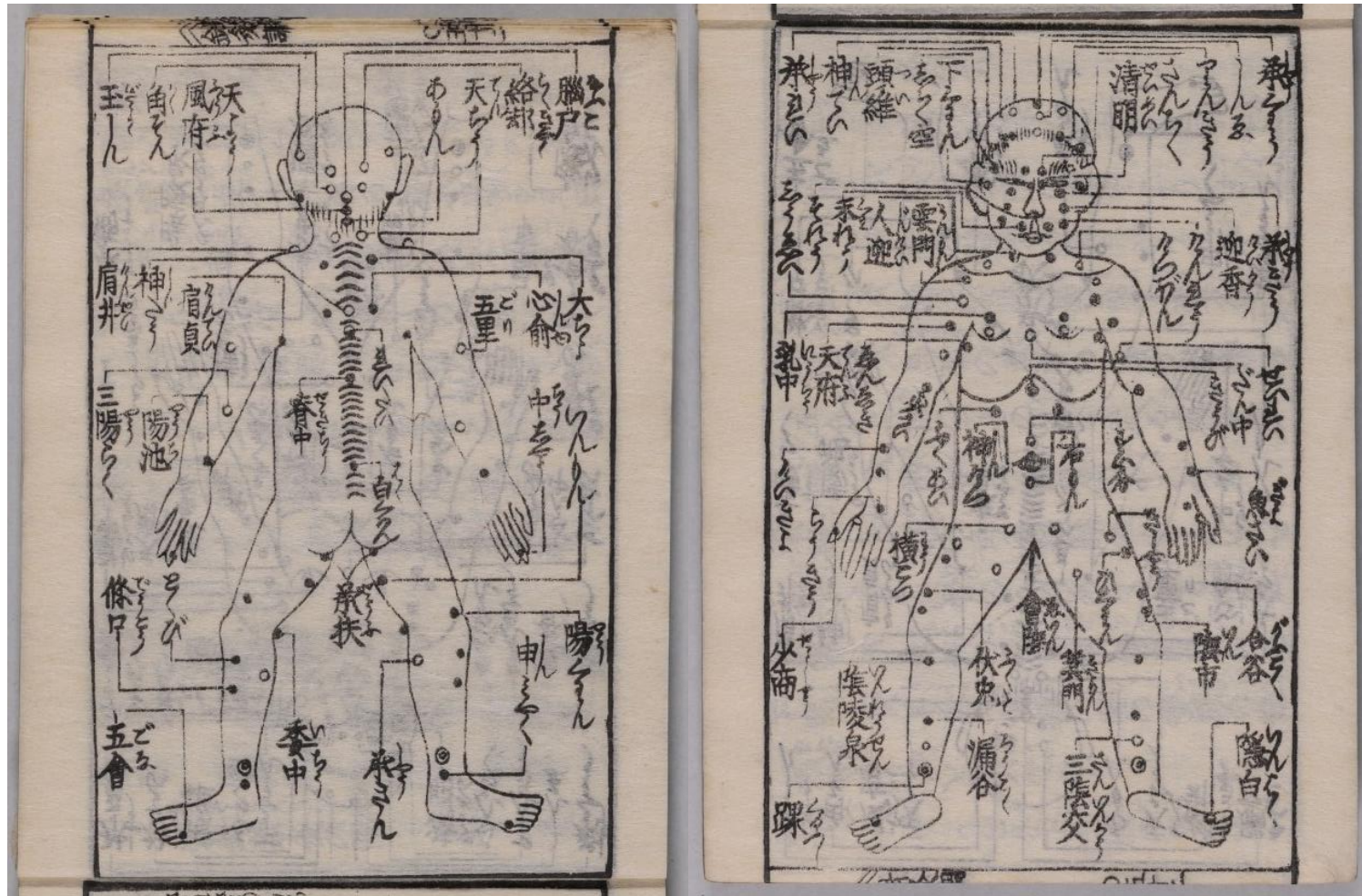
其病たること男子は七疝、女子は帶下、瘕聚す。

奇經八脉

督脉 任脉 陽蹻脉 陰蹻脉 衝脉 陽維脉 陰維脉 帶脉

禁針禁灸の圖

○は針
●は灸



禁灸の穴

承光 一穴 前の髪際の真中より二寸半上

風府 一穴 後の髪際の真中より一寸上

瘕門 一穴 後の髪際の真中より五分上

天柱 二穴 後の髪際に墨を點じ、兩方各一寸二分

臨泣 二穴 烏睛の真中のとをり、髪際より五分上、推ばことの外こたへる處なり

天牖 二穴 兩の耳の後骨の下はづれ

頭維 二穴 額の角の髪際の少しうしろを推てみるに、骨のわれめこたゆる所也

素窞 一穴 鼻柱の尖り、推ば骨肉のわれめ「素膠」

下関 二穴 耳珠の前、額の豎の髪際の通り、頰骨の下、口を閉ば穴あり

承泣 二穴 目より七分下、下胞の少し下

睛明 二穴 目と鼻との間のくぼみ

攢竹 二穴 兩の眉毛の頭すこし中へ入て

迎香 二穴 鼻の孔の外の旁へ五分ほど

顴窞 二穴 頰骨の尖の下はづれの陥み「顴膠」

絲竹空 二穴 眉毛の後の陥み少し中へ入

人迎 二穴 喉の尖骨の旁へ一寸五分づつひらきて動脈のあることなり

靈臺 一穴 脊六椎の下、七椎の上の間

脊中 一穴 十一椎の下、十二椎の上の間

大杼 二穴 脊の第一椎の下、左右へ二寸づつひらきて、又は一寸五分づつとも

心俞 二穴 五の椎の下、左右へ二寸宛開く、中風半身遂ざるには灸す、其外は忌む

白環 二穴 廿一椎の下、左右へ二寸づつ開く

鳩尾 一穴 肋骨の真中のはづれより一寸下

乳中 二穴 乳の頭のすこし内廉

腹哀 二穴 中脘の左右へ四寸半づつひらく

淵腋 二穴 直に脇つぼの下二寸

天府二穴 腋^{わき}下^{した}三寸、臑^{かいな}の内廉^{うちかた}、動脈^{どうみやく}の中^{なか}

少商二穴 大指^{おおゆび}の内側^{うちがわ}、爪^{つめ}のはへぎは一分程^{ぶほど}去^{のけ}て「小^こゆびの方^{ほう}を外^{そと}と云^{いう}、大^{おお}ゆびの方^{ほう}を内^{うち}と云^{いう}」

少海一穴 肘^{ひじ}をかがめて折^{おり}目^めの上^{うへ}の尖^{とがり}は曲池^{きよくち}なり、下^{した}のとがりは少海^{しょうかい}なり

劳宫二穴 掌^{たなひら}の真中^{まんなか}、動脈^{どうみやく}の處^{ところ}なり

髀關二穴 膝^{ひざ}の上^{うへ}一尺二寸^{しやくにすん}ほど、跪^{かじ}坐^{まり}すれば股^{もも}の少下^{すこした}に肉^{にく}のねぢける横文^{よこもん}中^{なか}

伏兔二穴 脆^{かじ}坐^{まり}れば膝^{ひざ}の上に肉^{にく}高^{たか}く成^{なり}て 兔^{うさぎ}の伏^{ふし}たるに似^にたる肉^{にく}の中^{なか}、膝^{ひざ}皿^{のさう}より六寸^{すん}上^{うえ}

陰陵泉二穴 膝^{ひざ}の下^{した}内側^{うちがわ}骨^{ほね}の下廉^{したかた}の陷^{くぼ}也^{なり}、筋^{すじ}と筋^{すじ}との間^{あいだ}、足^{あし}をのべてとる

殷門二穴 直^{すく}に立^{たて}ば臀^{しりべり}肉^{にく}と股^{また}の肉^{にく}との折^{おり}め、紋^{すじ}の真中^{まんなか}より六寸^{すん}下^{した}

申脉二穴 外踝^{そとくるぶし}の下^{した}、指^{ゆび}の頭^{かしら}の入程^{はいるほど}の穴^{けつ}あり

陽關二穴 膝^{ひざ}をかがめて外^{そと}の尖^{とがり}骨^{ほね}より三寸^{すん}上^{うえ}

地五會二穴 足^{あし}の小指^{こゆび}の次指^{つぎのゆび}の外側^{そとがわ}本節^{ほんせつ}の後^{しりえ}、此^{ここ}に灸^{きゅう}すれば三年^{さんねん}の内に死^しす

禾髎二穴 人中^{にんじゅう}の兩傍^{りょうぼう}へ五分^ぶづつひらきて、人^{にん}中^{じゅう}は鼻^{はな}の下^{した}の溝^{みぞ}なり「禾髎^{こりょう}」

肩貞二穴 背^せの肩下^{かたのした}、肘^{かひ}のつけぎはの紋^{すじ}のはし

周榮二穴 天突^{てんとつ}の下^{した}三寸六分^{すんぶ}、左^さ右^{みぎ}へ六寸^{すん}づつひらきて、天突^{てんとつ}は結喉^{けつこう}の下^{した}四寸^{すん}にあ

り

魚際二穴 手^ての大指^{おおゆび}の内^{うち}の側^{かたわら}、本節^{ほんせつ}の後^{しりえ}へ、散脈^{さんみやく}のところなり

中衝二穴 手^ての中指^{なかつゆび}のかしら、外^{そと}の側^{かたわら}ら、爪^{つめ}の甲^{こう}を去^{さる}こと一分^ぶばかり

經渠二穴 兩手^{りょうて}の寸口^{すんこう}なり、寸口^{すんこう}は脉^{みず}処^{ところ}なり

陽池二穴 手^てのくるぶしの上^{うへ}、腕^{うで}のくぼみなり、無名指^{くすりゆび}のとをりなり

隱白二穴 足^{あし}の大指^{おおゆび}の内側^{うちがわ}、爪^{つめ}の甲^{こう}のはへぎは、一分^ぶほど去^{のけ}て「小^こゆびの方^{ほう}を外^{そと}とい

ふ大^{おお}ゆびの方^{ほう}を内^{うち}といふ」

條口二穴 三里^{さんり}の下^{した}五寸^{すん}にあり

漏谷二穴 足^{あし}の内踝^{うちくるぶし}の上^{うへ}六寸^{すん}、大陰經^{たいいんけい}也^{なり}

犢鼻二穴 膝^{ひざ}眼^{がん}の下^{した}なり。三里^{さんり}より三寸^{すん}上^{うえ}

陰市二穴 膝^{ひざ}の上^{うへ}三寸^{すん}にあり、陽明經^{やうめいけい}也^{なり}

委中 いちゅう
二六 にろく 膝の内側の正中、動脈あり
ひざのうちうらのすじのまんなか
承扶 しょうふ
二六 にろく 尻の下、股の上の紋の中
しりのした、もものうへのすじのなか

禁灸の穴

承光 二穴 前髪の髮際の中より一寸半上
風府 二穴 後の髮際の中より一寸上
瘡門 二穴 後の髮際の中より五分上
天柱 二穴 後の髮際より一寸五分上
筋泣 二穴 烏睛の真中の筋より髮際より
五分上推へたの外より五分上
天牖 二穴 兩耳の後骨の下より五分上
頭維 二穴 額の角の髮際の下より五分上
推へた骨の筋より五分上
素節 二穴 鼻柱の尖より推へ骨肉の筋より五分上
下関 二穴 耳珠の前額の髪際の上より五分上
頰骨の下より五分上
承泣 二穴 目より七分下下胞の筋より五分上

睛明 二穴 目と鼻との間の筋より五分上
攢竹 二穴 兩眉の毛の頭より五分上
迎香 二穴 鼻の孔の外より五分上
顴骨 二穴 頰骨の尖の下より五分上
絲竹空 二穴 眉毛の後の筋より五分上
人迎 二穴 喉の尖骨の旁より五分上
のどより五分上
雲臺 二穴 背六推の下七推の上の間
脊中 二穴 十一推の下十二推の上の間
大抒 二穴 脊の第一推の下左右より五分上
ついで又ハ一寸五分上
心俞 二穴 五の推の下左右より一寸五分上
中風半身遂さるる灸と其外ハ忌
白環 二穴 背六推の下左右より一寸五分上

鳩尾 二穴 肋骨の真中の筋より一寸半上
乳中 二穴 乳の頭の筋より一寸内廉
腹哀 二穴 中腕の左右より四寸半上
淵腋 二穴 直肋脇の下より一寸半上
天府 二穴 腋の下三寸肱の内廉筋の中
少商 二穴 大指の内側爪の筋より一寸半上
去て爪の筋より一寸半上
少海 二穴 肘の筋より一寸半上
曲池 二穴 肘の筋より一寸半上
勞宮 二穴 掌の真中動脈の筋より一寸半上
解開 二穴 膝の上二寸五分と跪坐と
より股の筋より一寸半上
伏兔 二穴 脛の筋より一寸半上
伏兔 二穴 脛の筋より一寸半上
伏兔 二穴 脛の筋より一寸半上

膝関 二穴 膝の筋より一寸半上
申脉 二穴 外踝の下指の筋より一寸半上
陽関 二穴 膝の筋より一寸半上
地五會 二穴 足の小指の次指の筋より一寸半上
承節 二穴 人中の筋より一寸半上
人中 二穴 鼻の下より一寸半上
肩貞 二穴 背の肩下肘の筋より一寸半上
周榮 二穴 天突の下三寸六分左右より一寸半上
ついで又ハ一寸五分上
魚際 二穴 手の大指の筋より一寸半上

禁鍼の穴

脳戸 一八 百會の後四寸半、うしろの髮際より二寸まへの髮際より九寸五分、此穴に灸すれば瘰癧となる、針すれば死するなり

顙會 一穴 鼻頰のとをり、前の髮際より二寸上にあり

神道 一穴 脊の五椎の下、脊を俛てとる

靈臺 一穴 脊の六椎の下、針灸ともに忌む

角孫 二穴 耳の後ろ、耳郭の中間のうへ角にあたる、髪のはへぎは、口を開ば空

あり

臈中 一穴 兩乳の正中にあり

水分 一穴 臍の上一寸にあり

神闕 一穴 臍の真中なり

會陰 一穴 前陰と尻の穴との間

横骨 二穴 臍の下四寸半、左右へ一寸づつ、陰毛のはへきは

氣衝 二穴 臍の下八寸、左右へ四寸づつ開く

肩井 二穴 肩の上、二の骨の間、陥みの中、缺盆の大骨の後一寸半、肩の中央也、

指を三つ並て推て中指の下、陥の中にあり

五里 二穴 曲池の上三寸、大筋の真中

雲門 二穴 喉の結喉より二寸下、左右へ六寸づつ

缺盆 二穴 肩の下、横骨の陷中、喉の高骨より四寸下、左右へ各四寸づつひ

らきて

三陽絡 二穴 臂の上、腕の後四寸、兩骨の間陷

箕門 二穴 膝頭の内廉の上七寸半、内股のどうみやく

玉枕 二穴 脳戸の兩傍一寸三分づつ、はっさいより三寸入て

承筋 二穴 腓腸の中央陷中

神庭 一穴 直鼻の上、髪の際より五分上

承靈 二穴 目の上直に、髪際に入こと四寸

承泣 二穴 目の下七分、直に瞳子のとをり

青靈 二六 肘の上三寸、臂を挙てとるべし

絡却 二六 玉枕の前一寸五分

顱顙 一六 額の上、おどりといふ處なり「顱息」

石門 一六 臍下二寸、一名は丹田、女に忌

合谷 二六 手大指と食指との岐の間、推ば肘にこたゆる處、一名虎口、女に忌

陰交 一六 臍の下一寸、妊娠にいむ、此穴に針灸すれば子を孕まず

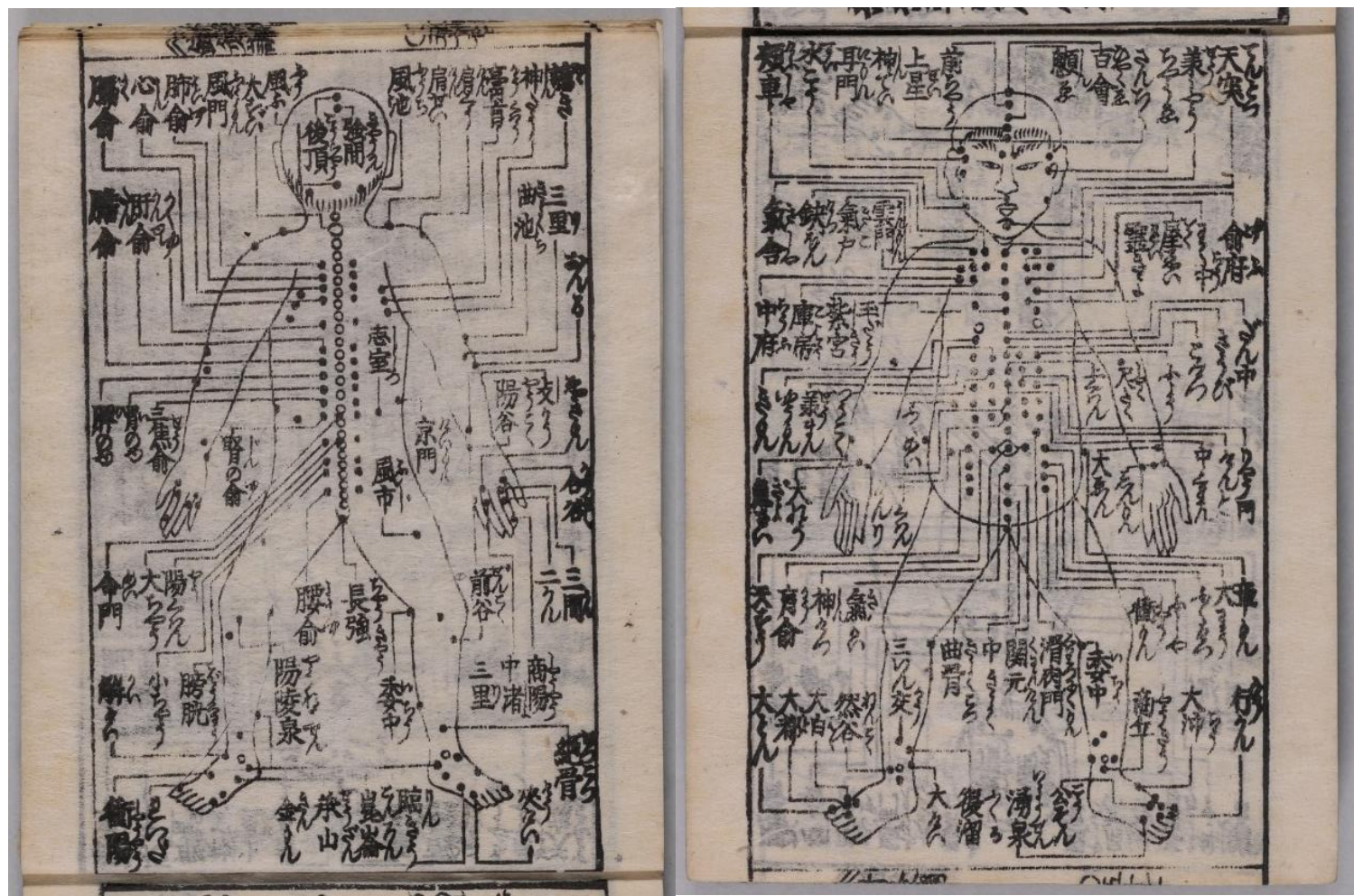
鳩尾 一六 肋骨の真中のはづれより一寸下

へ散脈のところあり
 中衝二穴手の中指のうら外側の
 爪の甲より去り一分あり
 經渠二穴手のすくありすく脈あり
 陽池二穴手のうらうの上腕のうら
 あり無名指のうらあり
 隱白二穴足の太指の内側爪の甲のうら
 五分あり去り一分あり
 條口二穴三里の下五寸あり
 漏谷二穴足の内踝の上六寸太陰經也
 衝鼻二穴膝眼の下より三里あり
 陽市二穴膝の上三寸あり陽明經也
 委中二穴膝の内側の紋の正中動脈あり
 承扶二穴尻の下股の上の紋の中

禁錮の穴
 臑戸二穴百會の後四寸半ありの髪際より二寸三寸の髪際より九寸五分此穴に灸とれん瘧とある針とれん死とるあり
 臑會二穴鼻頤のうら前髪の際より二寸五分あり
 神道二穴脊の五椎の下背のうら
 靈臺二穴脊の六椎の下針灸とるあり
 角孫二穴手の後耳郭の中間のうら
 用灸とるあり
 臑中二穴臑乳の正中にあり
 水分二穴臑の上二寸にあり
 神關二穴臑の真中あり

會陰二穴前陰と尻の穴との間
 橫骨二穴臑の下四寸半左右二寸
 氣衝二穴臑の下八寸左右四寸開く
 肩井二穴肩の上の骨の間隔の中
 盆的大骨の後二寸半肩の中央也
 三の垂く推て中指の下脇の中あり
 五重二穴曲池の上三寸大筋の真中
 雲門二穴喉の結喉より二寸下左右
 飲盆二穴肩の下横骨の陷中
 三陽絡二穴臂の上腕の後四寸
 箕門二穴膝頭の内廉の上七寸半
 五腧二穴臑の腕傍二寸三分
 承筋二穴臑脇の中央筋中

神庭二穴直鼻の上髪の際より五分上
 承泣二穴目の上直に髪際に入ると四寸
 承泣二穴目の下七分直に瞳子のうら
 青靈二穴肘の上三寸
 絡却二穴玉枕の前一寸五分
 顧顙二穴額の上より一寸五分
 石門二穴臑下二寸一名丹田女
 合谷二穴手大指と食指との岐の間
 推て肘にさるる處一名虎口女
 陽交二穴臑の下一寸妊娠のうら
 此穴は針灸とれん子とるあり
 尾尾二穴助骨の真中のうらより下
 經絡要穴仰伏之圖



經絡要穴仰伏之圖

經絡要穴

頭面の部

神庭 一穴 額の真中、前の髮際より五分上にあり。灸二三壯あるひは二七壯。

狂乱 てんかん 驚風 天吊 角弓反張 舌を吐し人事をしらず 眩暈 づつう 寒熱、

濁涕止ず 目涙出 驚悸 怔忡 不寐 嘔吐 喘渴 するを治す、禁針の穴なり。

上星 一穴「一の名は神堂」神庭の後五分、髮際に入ること一寸、陷中。

針三四分留ること六呼、灸五壯。

頭痛 面赤く腫皮はれ 鼻中に息肉いで鼻ふさがり 痰瘧 汗不出 めまひ 目じりい

たみて遠くみることあたはず 吐血 はなぢを治す。

顙會 一穴「顙會」上星の後へ一寸、髮際より二寸上。

灸二三壯あるひは二七壯、針は禁穴なり。

腦虚冷あるひは酒食をすこし脳痛て破がごとく 風頭眩 顔をく 衄血 面あか

くにはかに腫れ 頭皮はれて白屑を生じ 鼻塞 香臭を聞ず 驚悸 目戴上し

昏て人を知ざるを治す。

前頂 一穴 顙會の後へ一寸半、前の髮の際より三寸半上、骨の間陷の中。

灸三壯二七壯、針一分あるひは四分。

頭風 面赤くはれ 水腫 てんかん 眩暈 きやうふう 瘕瘕、はれいたむことをつかさ

どる。

百會 一穴「一名三陽五會 一名は顙上一名天満 百會」前頂の後へ一寸五分、前

の髪のはへぎはより五寸上、旋毛の中にあり、兩の耳の尖の直、頭の真中な

り。針二分 又は四分、灸七壯あるひは三五壯。

頭風 中風 言語謇澁 口噤み 半身かなはず 心煩れ悶へ 驚悸 健忘 痰瘧 脱肛

風癰 角弓反張 羊鳴多く哭て 語言擇はず 發るときは死入 沫を吐き 汗出 乾嘔し

酒を飲て面赤く 腦重く 鼻ふさがり 頭つう 目まひ 食に味なきを 主る。百病

を治す。

經絡要穴
 頭面部の部
 ○神庭一穴額の真中前髪の髮際より五分上にあり灸二三壯あるは二三壯
 狂乱てんん驚風天吊角弓反張舌を吐し人事をさるる眩暈つら寒熱渴滯止む目涙出驚悸怔忡不寐嘔吐瀉瀉と治す 禁針の穴あり
 ○上星一穴の骨ハ神堂神庭の後五分髮際に入し一寸隙中針三四分留ると六呼灸五壯 頭痛面赤腫皮れ鼻中の息肉の鼻をさるる痰瘡汗不出めさるる目さるるを遠くする
 上の穴は吐血をさるるを治す
 ○額會一穴上星の後へ一寸髮際より二寸

上灸三三壯あるは二三壯 針禁灸
 尤り腦過冷のり酒食をさるる腫痛く破るく風頭眩顛めく血面めくやうに腫る頭皮をさるる自屑を生じ鼻塞て香臭を聞じ驚悸目赤上へ灸く人々知るるを治す
 ○前頂一穴額會の後へ一寸半額の髮の隙より三寸半上骨の間隙の中灸三三壯針一分あるは四分頭風面赤くこれ水腫てんん眩暈さるるを治す
 灸とれりひしとつるを治す
 ○百會一穴一名三陽五會前頂の後へ二寸五分前の髮のりをさるる五寸上旋毛の中にあるは兩の耳の尖の直

額の真中より針二か又ハ四分灸七壯
 むのり三三壯 頭風中風言語蹇澁目赤半身不遂心煩悶へ驚悸健忘痰癰脱肛風癰角弓反張羊鳴多哭て語言擇るる發るる死入沫と吐さ汗出乾嘔酒と飲く面赤く腦重く鼻をさるる頭つゝ目さるる食は味をさるる百病を治す
 ○後頂一穴の骨ハ枕骨會の後へ一寸五分前の髮際より六寸半灸五壯
 針二分三分四分項強り額上痛急風寒く風眩目眩々歷節汗出狂走不寐癰發瘰癧頭痛を治す
 ○強間一穴の骨ハ後頂の後へ一寸半

後頂 一穴「二の名は交衝」百會の後へ一寸五分、前の髮際より六寸半。

灸五壯、針二分三分四分。

項強り 額上痛み 惡風寒く 風眩 目眩々 歷節して汗出 狂走 不寐 癰發 瘰癧
かしらかたかいたみ 偏頭痛を主とる。

強間 一穴「二の名は大羽」後頂の後へ一寸半。灸七壯五壯、針二分。

頭痛 めまひ 脳のめぐり痛み 心煩れ 嘔吐 項こはり卧ことを得ざるをつかさどる。

風府 一穴「二名舌本」強間の後二寸五分、後の髮際より一寸。

針三四分留ること三呼、禁灸なり。

中風 舌緩り語らず 振寒 汗出て身重くして惡寒 づつ 項強て回顧ことを
得ず 偏風半身かなはず はなぢ 咽喉はれ痛み 傷寒 狂走 目妄に視るを治す。

頭の百病 黃疸を主る。傷寒 づつ 惡風 發熱 身疼む者、或は耳聾

脇痛 嘔して口苦く 頭痛 寒熱往來する者、並に風池、風府に刺べし。

瘕門 一穴「二名は舌厭 一名は舌横 一名は瘕門」風府の後五分にあり。

針四分二分留ること三呼して瀉し、五吸にして瀉し盡す、更に針を留めてこれを取
る、灸は禁穴なり。

舌急にして語らず 重舌 もろくの陽熱氣盛にして鼻衄止ざるを治す。

「頭の中行二行三行圖」神てい 上星 しんゑ 前頂 百ゑ 後頂 強かん

なつこ 風府 瘕門 曲差 五處 義光 つつてんらくきやく 玉枕 天柱

臨泣 かくそん 義霊 天牖

曲差 二穴 神庭の傍ら左右へ一寸半づつ、前の髮際より五分上にあり。

針三分、灸三壯。

目明ならず 鼻衄 鼻瘡 心煩 頭項いたみ 頂き腫るを治す。

五處 二穴「五處」曲差より後へ五分。灸三五壯、針三分留ること七呼。

脊こはばり 反張 てんかん 頭風 めまひをつかさどる。

頭項のこゝ度々腫るゝ治せ
○五處二死曲盡より後へ五分灸三五
壯針三分留わゝ七呼 春こゝより反

張てんん頭風めきみどうきどる

○四寸五分 承兌三光曲差の倭へ二寸針灸共寸

○通天てんてん二寸ふたさう差さより後へ三寸半百會ひゃくかい

の左右へ一寸半つゝのく灸二壯針三

分ちむくし七呼應^{しちご}應^{おとこ}もち清洲

○鑄却二虎曲差の後へ五寸 針三分

留^{とど}ち^まと五^ご呼^こ灸^し三^{さん}壯^{さう}頭^{かう}ろ^うつ^ふさ^さ耳^{みみ}

あり腹より目の内障を生ずると主る

○至稅二虎曲差の後へ八寸半頭の中

行より左友へ一寸五分づ開きそ

針せんの禁きん泥どろ子こ 月つき眩くら目めのの頭あたま頭あたま

鼻塞ハナサヤニ香臭カウと聞ミくニと治ナす

○天柱てんちゆう二穴ふたあな項けいののち後うしろののち髮かみ交まじ際はの中な行ゆくる

左右へ一寸三分づ開きそ大筋の外麻

腦の中針二分五分留るゝと三呼りて瀉

五吸頭風鼻香臭之聞を頭め

旋々腦痛重く頂々々々頂々々々主と

○臨江三死目の真中の行の上警備

五分、いを^ひ針^い二^い分^い留^いる^いし^い五^い呼^い禁^い条^い

目眩目痛く白濁と生ず惡寒重き寒

驚風てんかん反視卒中風月水通じ

①目窓二先臨泣の後へ一寸針二分灸五

凡そ一切の眼病頭面浮腫一寒熱

SALE

承光 二穴 曲差の後へ二寸。針灸共に忌。

通天 二穴 曲差より後へ三寸半、百會の左右へ一寸半つつひらく。

灸三壯、針三分とどむること七呼。

癭瘤 はなぢ 清涕を出し 頭ふらつき 項いたむを主る。

絡却 二穴 曲差の後へ五寸。針三分留ること五呼、灸三壯。

頭ふらつき 耳なり 腹はり 目の内障を生ずるを主る。

玉枕 二穴 曲差の後へ八寸半、頭の中行より左右へ一寸五分つつ開きて。

灸三壯、針は禁穴なり。

目眩 目いたみ 頭項いたみ 鼻塞り 香臭を聞ざるを治す。

天柱 二穴 項の後の髮際の中行より左右へ一寸三分つつ開きて、大筋の外廉陷

の中。針二分五分留ること三呼して、瀉すこと五吸。

頭風 鼻香臭を聞ず 頭ら旋き 脳痛重く 項いたみ 項強るを主る。

臨泣 二穴「頭臨泣」目の真中の行の上、髮際より五分上、すなはち神庭の左右へ

二寸二分半つつ開く。針二分留ること五呼、禁灸。

目眩き 目痛み 白翳を生じ 惡寒 鼻塞 驚風 てんかん 反視 卒中風 月水通ぜぬ

に。

目窓 二穴 臨泣の後へ一寸。針三分、灸五壯。

一切の眼病 頭面浮腫 づつう 寒熱に。

正営 二穴 目窓の後へ一寸、針三分、灸五壯。

目眩 頭項かたく痛み 齒齲痛に。

承靈 一穴 正営の後へ一寸半、灸五壯、禁針。

頭いたみ 惡寒惡風 喘息を主る。

腦空 二穴 承靈の後へ一寸五分、灸三壯、針四五分。氣を得て瀉す。

勞瘵 羸れ瘦 身熱し 項強り 頭重く痛 目眩くを。

風池 二穴 腦空の後へ 耳の下面の通り、項の豎の髮際の陷の中、すなはち推ば耳の中へ應る處。針三四分あるひは七分留ること三呼、灸七壯。

傷寒々ねつ 温病 汗出ず 目眩きあるひは偏正の頭痛 痙瘲 頸項ぬくがごとく痛を主る。

天牖 二穴 風池の後へ 項の豎の髪のはへぎは、瘕門の兩傍。針灸ともに禁。

「頭三行頭側耳上側」 天衝 曲びん 率谷 承靈 正營 目窓 臨泣 本神

陽白 腦空 浮白 けう陰 風池 天よう 完骨 懸り けんろ 晴明 大迎 頰車

本神 二穴 神庭の左右へ 各三寸づつ、前の髮際より五分上。針三分、灸七壯。

驚風 てんかん 涎沫を吐き 頭項強りいたみ 目眩をつかさどる。

頭維 二穴 額の角の髮際より入ること四分、神庭の左右へ 各四寸五分。

針五分三分、禁灸。

頭痛 目脱がごとくいたみ 目風 物を見こと明ならざるを治す。

額厭 二穴 額の角よりすこし下、豎の髮際 頭維の穴より少し下の前め。

灸三壯、針七分留ること七呼。深く刺ときは耳聾ず。

頭かたく痛み 目まひ 驚風 てんかん 手腕いたみ 耳鳴 目不明を。

懸顙 二穴 額の大角の下、額厭の下、肉少し高く凸なる處。

灸三壯、針三分とどむること三呼 あるひは七分留ること七呼。深く刺ば

耳聾ず。

頭痛 牙齒いたみ 面赤くはれ 熱病 煩れ悶へ 濁涕出るを。

懸釐 二穴 けんろの少し下、米咬の下つらに骨のわれめある處。

灸三壯、針三分留ること七呼。

面赤く腫 側 頭痛 煩心 食を欲ず 熱病 汗出ず 目眚赤くいたむをつか

つづる。

曲髻 二穴 耳の上の少し前、曲隅の中。針三分、灸三壯あるひは七壯。

頤腫痛 口噤め 言こと能ず 頸項かへりみることを得ず 脳の兩角痛で目に引を治す。

率谷 二穴 耳の上、髮際を豎に入こと一寸五分、少し三分ほど前へよせめに点す。針三分、灸三壯。

痰氣 膈いたみ 頭腦痛 頭重く 酒風 皮膚腫 胃寒 煩悶 嘔吐を。

天衝 二穴 耳の後の通り、はつさいを豎に入こと二寸上、すこし三分ほど前へよせめに點す。灸三壯七壯、針三分。

癲疾 善驚き恐れ 頭痛 牙齦腫いたむをつかさどる。

浮白 二穴 直に天衝の下一寸、耳後の髮際を入こと一寸。

針三分、灸三壯七壯。

足行こと能ず 耳聾 耳鳴 齒痛み 胸満て息することを得ず 胸いたみ 頸項癭 癭腫 言こと能ず 肩臂拳ず 寒熱を發し 喉痺 しゃくり 痰沫を吐を治す。

竅陰 二穴 一名枕骨 頭竅陰 耳の後に完骨とて細長き骨あり 其上の陷み、耳の後 手にて推動かせば空ある中。灸五壯か三壯、針三四分。

四支轉筋 目いたみ 頭項 頤いたみ 耳鳴 舌本より血を出し 骨勞 癰疽 發厲 手足煩熱 汗出ず 舌強り 脇痛み 欬逆 ころひ 口苦きを治す。

完骨 二穴 耳の後の髮際に入こと四分、即ち完骨といふ骨の下つらの陷み。

灸七壯、小兒は三壯、針三分。

足痿 頭面腫 頭頸いたみ 齒齲 口眼喎斜を治す。

素節 一穴 素膠 鼻柱の尖なり。針一分、禁灸。

鼻内の息肉 鼻窒りはなぢ 喘息を治す。

水溝 一穴 二名人中 鼻柱の下。灸三壯、針三四分 留ること五六呼。

氣を得て瀉。消渴 水腫 癰癰 狂乱 中風 中惡 黃疸を治す。

兌端 一穴「兌端」上唇の赤き肉と白き肉との際め。針二分、灸三壯。

癩癰 小便黄に舌乾き消渴はなぢ唇強り齒齲いたみ鼻ふさがり痰涎

口噤を主る。

斷交 一穴「齲交」唇の内、上齒の斷の縫の中。針三分、灸三壯。

鼻中の息肉鼻ふさがり額頬いたみ目の内皆赤して痒いたむを主る。

承漿 一穴下唇の赤肉の少下陷中、口を開て点す。

針三分氣を得て即瀉、留ること三呼徐徐に氣を得て出す。比穴に灸すること

一日に七壯づつ、七日に四十九壯灸るなり。然れども毎日づづけて灸すること勿

れ。只一日に七壯灸しては、四五日も間を置ては又七壯灸す、日數を積で四十

九壯に至れば、血脉通じ病立どころに愈る。

偏風半身遂はず口眼喎斜面はれ消渴口齒疳蝕瘡を生じ暴に瘡し

て言こと能ず、男子の七疝、女子の癥聚を主る。

廉泉 二穴「二名舌本」結喉の上四寸、推ば舌の根へ應る処、仰て點す。

灸三壯、針三分留ること七呼、氣を得て瀉す。

咳嗽上氣喘息舌下腫口瘡を治す。

攢竹 二穴兩眉の頭すこし毛の中へ入陷の中。禁灸、針一分。

目くらく涙出眼赤いたみ瞳かゆく臉潤動し頬いたみ尸厥風眩

てんかん狂乱鬼魅をつかさどる。

睛明 二穴「睛明」目の内眥一分ほど外、目と鼻との間陷み。針一分、禁灸。

目遠く見こと能ず惡風涙出弩肉雀目を治す。

陽白 二穴瞳子の通り、眉毛の上毛際より一寸上。針三分、灸三壯。

瞳子痒く痛み上視目眇こみ眼昏きをつかさどる。

聴宮 二穴耳の前に圓くひらつく尖あり、是を珠子といふ、其前に小豆を容る程

の陷みある所。針三分、灸三壯。

癩かん心腹つかへ音不出聾耳耳鳴耳塞を治。

○陽白二穴直下天衝の下二寸は後の
髮際に入ると一寸針三分灸三壯七壯
足行と能く耳聾耳鳴齒痛胸
滿て息せんとし得ず胸の項
瘰癧腫言し能く肩臂を寒熱
發し喉頭を多う痰涎を吐く治す
○最速二穴一名松骨耳の後小完骨と
て細長骨の骨の真上の陷み手の後
手や推動をせし空ある中灸五壯
三壯針三四分四文轉筋目の頭項
痛のこも耳鳴舌より血を出し骨
勞癰疽發馬手足煩熱汗出を舌
後り脇痛と欬逆と口苦と治す
○完骨二穴耳の後の髮際に入ると四分

即ち完骨といふ骨の上の陷み
壯小兒ハ三壯針三分足癰腫
頭頸のこも齒齲口眼喎斜と治す
○素第二穴鼻柱の穴より針一分灸
鼻内の息内鼻窒りも治す
○水溝二穴一名人中鼻柱の下灸三壯
針三四分留ろし五六呼吸と得ず
消渴水腫癰疽狂乱中風中惡瘧疾
○兌端二穴上唇の赤き肉の白き肉との
際針二分灸三壯癰疽小便黄と治す
乾き消渴と多う唇強り齒齲のこも
鼻ふさかり痰涎口嚔と治す
○齲交二穴唇の内上齒の齲の牙
針三分灸三壯鼻中の息内鼻窒り

額頰の目の内眥赤く痔の瘻主
○承漿二穴下唇の赤肉の穴下陷中
口を開く点と針三分灸得て即瘻
留ろし三呼吸をせし得て出血
此穴に灸をせし一日七壯七日
灸四十九壯灸るより然るごとく毎日
灸せし灸せし勿き一日七壯
灸せし八四五日と間と置し又七壯
灸せし日數と積で四十九壯灸せし
血脈通病立と云ふ能く愈る偏風
半身遂に口眼喎斜而れ消渴口
齒齲瘡と生し暴に瘡と生し
能く男子の七疳女子の瘰癧と治す
○廉泉二穴一名舌本結喉の上四寸推

心舌の根へ應る処即ち點と灸三壯
針二分留ろし七呼吸と得て瀉
咳嗽上氣喘急舌下腫口瘡と治す
○攢竹二穴兩眉の頭と目の中へ陷
の中禁灸針二分目より流出膿赤
腫く腫く眼瞼動し頬の腫く
風眩とん狂乱鬼魅と治す
○睛明二穴目の内眥一分を外眥と
鼻との間陷と針一分禁灸目遠く
見し能く惡風淚出等肉眥目と治す
○陽白二穴瞳子の通り眉毛の上毛際
より一寸上針三分灸三壯瞳子痒く
痛く視目眩と眼昏と治す
○聽宮二穴耳の前小圓くのつて尖り

頰車 二穴「頰車」耳の下、曲頤の骨の端、すこし前に口を開ば陷みあり、
口を閉ば骨蓋ふ處。針三分、灸三壯。

中風 牙くひつめ口噤で言ず 牙痛 頤頰腫 眼口喎斜を。

耳門 二穴 耳の前、珠子の上、起る肉の缺たる處 陷の中。針三分、禁灸。

耳鳴 聾耳 耳瘡 齒齲 唇吻ゆがむを治す。

翳風 二穴 耳の尖の後へ下角、陷みの中を推ば耳の中へ應へいたむ處。

灸三壯より七壯にいたる、針三分七分。

耳聾 耳鳴 口眼ゆがみ 頰はるるを治す。

「頭面耳廻の穴圖」 瘰脈 顙息角そん 耳門 ちやうゑ 瞳子竅 絲竹空 攢竹

承泣 四白 素窳 水溝 顴竅 翳風 迎香 禾窳 兌端 承しやう 結喉 廉泉 地さう

地倉 二穴 兩の口吻の傍ら、唇の赤肉より四分ほど去て動脈のある處。

針三分半留ること五呼 氣を得て即ち瀉す、灸十四壯 病重きは四十九壯 艾を

小さくすべし、大なれば反て口ゆがむ、若喎ば承漿に灸四十九壯すればなを

るなり。

中風 半身かなはず 口歪み 目閉昏み 音出ず 飲食収らざるをつかさどる。

聴會 二穴「聴會」耳の前、珠子の下 少し前 陷の中、口を開きて陷む處。

針三分或は七分留ること三呼 氣を得て即ち瀉す、灸三壯 又毎日五壯つつ四日

の間 灸して十日ほど間を置いて 又五壯灸す。

耳鳴 耳聾 牙車脱離れ 齒いたみ 中風 口歪み 手足かなはざるをつかさどる。

大迎 二穴 耳の下、曲りたる頤の角より一寸三分前に動脈ある骨のわれめ、

口を動かせばあがくつがひめ也。灸三壯、針三分留ること七呼。

口噤め開かず 頰腫 牙疼を治す。

是と珠子との其前（前）に小豆（豆）と容（容）を
 の隔（隔）の所針三分灸三壯（灸）癰（癰）ん
 心腹（心腹）つ音不出耳鳴耳塞（耳鳴耳塞）治
 ○頰車（頰車）元耳の下曲頰の骨の端（端）に
 前（前）に口を開て隔（隔）にわり口開（口開）骨蓋（骨蓋）よ
 處針三四分灸二壯中風（中風）牙の
 口閉（口閉）言（言）さず痛頰頰腫眼口喘（喘）治
 ○耳門（耳門）元耳の前珠子の上起肉の
 針（針）入處隔の中針三分禁灸手鳴
 耳耳痛齒齲唇動（唇動）治
 ○聾風（聾風）元耳の裏の後へ下肉隔（隔）の
 中へ推（推）耳の中へ應（應）へいじ処灸三壯
 一り七壯はのる針三分七分耳鳴
 耳鳴口張（口張）治

頭面耳の通穴の圖



○地倉（地倉）元兩の口吻の傍唇の赤肉の
 四分を去て動脈のめり処針三分半留
 るし五呼吸（呼吸）得て即ち瀉（瀉）灸（灸）十四
 壯病重（病重）灸（灸）四十九壯艾（艾）と小く灸（灸）
 大穴（大穴）は灸（灸）て口吻（口吻）む若咽心未癒（未癒）灸（灸）
 四十九壯（壯）は灸（灸）て口吻（口吻）む若咽心未癒（未癒）灸（灸）
 う多の口歪（口歪）目閉（目閉）皆（皆）音出（音出）と飲食

収（収）らざるつとる
 ○聽會（聽會）元耳の前珠子の下火（火）前
 隔の中口を開て隔（隔）にわり針三分灸（灸）
 七分留（留）と三呼吸（呼吸）得て即ち瀉（瀉）灸（灸）
 灸三壯又毎日五壯（壯）四月間灸（灸）て
 十日間（十日間）開（開）て又五壯灸（灸）て耳鳴
 耳聾（耳聾）牙車脫離（牙車脫離）齒齲（齒齲）中風口歪
 と手足（手足）多の灸（灸）てつとる
 ○大迎（大迎）元耳の下曲りく頰の骨の
 寸三分前（前）動脈の骨のまわり
 動（動）るを灸（灸）てつとる也灸三壯針三
 分留（留）と七呼吸（呼吸）得て即ち瀉（瀉）灸（灸）
 心腹の部
 ○天突（天突）元頸の結喉の下四寸宛々

中灸三壯五壯針一分五分留（留）と三呼
 氣（氣）と得て瀉（瀉）と若針（針）直下（直下）手と
 低（低）るく五臟（五臟）の氣傷（氣傷）て短命（短命）
 面熱（面熱）上氣（上氣）欬逆（欬逆）氣暴（氣暴）に喘（喘）咽腫
 咽冷（咽冷）聲破（聲破）喉中（喉中）瘡（瘡）と生（生）膿血（膿血）治
 瘡（瘡）て言（言）と能（能）と寒熱頸腫（頸腫）喘喉
 中鳴胸中魚鰓（魚鰓）の立（立）と舌の下
 急（急）に心と背と相引（相引）て痛膈脹嘔吐（嘔吐）
 ○璇璣（璇璣）天突の下二寸灸五壯針三分
 胸の骨痛（骨痛）頰（頰）喉痺咽腫（咽腫）灸（灸）
 ○膻中（膻中）元兩乳の間膈の真中灸七壯
 五十壯禁針（禁針）中氣上氣短氣欬
 逆嘔膈嘔吐（嘔吐）不食喘促咳嗽胸塞（胸塞）治
 心胸（心胸）の肺癰腫膿乳（膿乳）は灸（灸）て治

心腹の部

天突 一穴 頸の結喉の下四寸、宛々たる中。

灸三壯五壯、針一分五分留ること三呼、氣を得て瀉す。若針を直に下し手を低るときは、五臓の氣傷れて短命なり。

面熱し 上氣 欬逆 氣暴に喘し 咽腫 咽冷 声破 喉中瘡を生じ 膿血を咯き瘡して言 こと能ず 寒熱 頸腫 哮喘 喉中鳴 胸中魚鯁の立たるごとく 舌の下急に心と背と相引いて痛 膈噎 嘔吐を。

璇璣 一穴 天突の下一寸。灸五壯、針三分。

胸の骨痛み 煩れ 喉痺 咽腫るを主どる。

膻中 一穴 兩乳の間、膈の真中。灸七壯五十壯、禁針。

中氣 上氣 短氣 欬逆 噎膈「膈噎」嘔吐 不食 喘促 咳嗽 胸塞がり 心胸いたみ肺癰 唾膿 乳 汁 少きを治す。

巨闕 一穴 肋骨の真中のはづれ、蔽骨より二寸下。

針六分留ること七呼、氣を得て即ち瀉す、灸七壯より七七壯まで。

上氣 咳逆 胸つかへ 短氣 背いたみ 心痛み 痰飲 霍乱 吐逆 驚悸 怔忡 腹脹 暴にいたみ 心恍 不食 傷寒 心煩 嘔逆 發狂 黄疸 狐疝 小腹脹 尸厥 妊婦子心へ衝て昏悶するを主る。

上脘 一穴 巨けつの下一寸、臍の上五寸。

針八分、先補し後に瀉す。風癰 熱病は、先瀉し後に補して即愈。灸日に十四壯より百壯にいたる、未愈ずはこれを倍すべし。

腹鳴痛み 食化せず 霍乱 吐利 腹いたみ 身熱し汗出ず 翻胃 嘔吐 不食 腹脹り 氣満 心忪れ 驚悸 嘔血 痰涎多く 虫積 黄疸 虚勞 吐血をつかさどる。

中脘 一穴 上脘の下一寸 臍の上四寸。

針一寸二分 あるひは八分留ること七呼、瀉五吸はやく針を出す。灸日に十四壯より三四百壯まで。

膈噎 飢胃 不食 喘息 腹脹 中惡 心腹いたみ 痢疾 疝氣 積聚 傷寒 疫病 温瘧、先腹いたみ 先瀉し 霍乱 洩 出を知ず、身冷 俛き仰きしがたきを。

建里 一穴 中脘の下一寸、臍の上二寸。

灸五壯、針一寸二分 あるひは五分留ること十呼。

腹脹 身腫 心痛 不食を治す。

下脘 一穴 建里の下一寸、臍の上二寸。

臍下より動氣上り 腹堅く 胃脹 腹いたみ 六府の氣寒じ 穀轉化ず 羸瘦 小便赤

く 翻胃 不食を治す。

水分 一穴 下脘の下一寸、臍の上一寸。

針五分留ること三呼。水腫に 刺ば水つきて 即死す。水病には灸四十九壯より

四百壯にいたる 大によし。

水腫 脹満 小便通せず 轉筋 不食 臍腹いたみ 心に冲き 腰背こはり 腸鳴り

鼻衄 小兒顙 陷るを。

神闕 一穴 臍の真中なり。

禁針也、もし刺ば臍の中 惡き瘍を生じて死す。灸も輕き病には猥にすべから

ず。急症重き病には塩か味噌を布てすべし。

中風 卒倒て 甦らず 久く冷て泄痢止ず 水腫 鼓脹 腸鳴り 臍腹いたみ 小兒

驚風 てんかん 反張 脱肛を治す。

卒中風 甦らざるに灸百壯すれば甦る、それにても甦ずは又百壯すへし。

陰交 一穴「陰交」臍の下一寸。

針八分、氣を得て 即瀉す 瀉して後に補ふべし。灸廿一壯より百まで。

妊婦には忌。

心腹いたみ 陰中に引て 小便通ぜず 疝氣 陰汗濕かゆく 腰膝つりいたみ 臍下熱

し 鼻血 婦人の崩漏 月水たへず 帶下 産ご惡露止ず 臍の繞り冷痛み 陰痒く 積塊

小兒の陷顙を治す。比穴に灸針すれば一生子を孕まず。

①上腕一尺巨さの下寸臍の上五寸針
 八分先補（ツボ）後瀉（ツボ）風痙熱病先瀉
 一後（ツボ）補（ツボ）即愈（ツボ）交日（ツボ）十四壯（ツボ）より
 百壯（ツボ）のころ未愈（ツボ）ごとく（ツボ）と倍（ツボ）と下
 腹鳴痛（ツボ）食化（ツボ）只霍乱吐利腹の
 身熱（ツボ）汗出（ツボ）と翻胃嘔吐不食腹脹（ツボ）り

氣満心松三癰悸嘔血痰涎多く虫
積黄疸虚勞吐血とつらさどろ

○中脘二穴 上脘の下二寸 臍の上四寸
針す二分あつゝの八分留ると七呼吸
五吸とく針と出と 灸日収十四壯
三四百壯とく 膈噎 細胃不食 喘急
腹脹中惡心腹 痛 痰病氣積 寒
傷寒 疫病 溫瘧 先腹の 先瀉 霍
亂 洩出と知と身冷 促と仲とくを
○建里二穴 中脘の下二寸 臍の上三寸 灸
五壯 針す二分あつゝの五分留ると十
呼吸 腹脹 身腫 心痛 不食と冷と
○下脘二穴 建里の下二寸 臍の上二寸
臍下より動氣上り腹堅く胃脹腹

○水が穴下腕の下寸臍の上寸
 釜五分留すに三呼水腫小刺バ水つと
 て即死を水病少灸四十九壯より四
 百壯より大ナド水腫脹満小便
 通ぜば轉筋不食臍腹の心に沖
 腰背より腸鳴り鼻衄小兒顛陷を

○神關六腑の真中より禁錮也
 刺膽の中惡さ病を生じて死さる多
 輕さ病は猥々まうす急症重さ
 病は塩々味嘈と布てまへ中風
 卒倒く甦らる久く冷く泄痢止む水
 腫鼓脹腸鳴り臍腹ゆるく小兒驚風

てんくろ張脱肝を治す卒中風難らざる
 小灸百壯をいれ難るをいふと難どら
 又百壯をいふ

○陰交二先臍の下す針八分氣を得
て卽瀉と瀉して後子補ふ灸灸
一壯より百まで娠婦は忌心腹の
陰中に引て小便通ぬは疝氣陰汗漏
るる腰膝つるる臍下熱鼻血
婦人の崩漏月水へど帶下産ご露
止ど臍の繞り今痛く陰痒く積塊小
兒の胎前と治と此穴に灸針とれと
一生子と孕ます

○氣海一炷 臍の下一寸半灸之壯針入
分氣と得て瀉と瀉一炷後又補也

氣海 一穴「氣海」臍の下二寸半。

灸七壯、針八分、氣を得て瀉し瀉して後に補ふべし。

傷寒 湯水を多飲て腹脹 氣喘き 心の下痛み 冷病 面赤く 真氣不足し 一切の

氣病久く差す 瘦羸 四支力弱く 積聚 せんき 血塊 臍の下冷氣いたみ 心痛

中惡 泄痢 大小便通せず 崩漏 帶下 月水調はず 産後惡露止す 臍腹痛み 閃著 腰

いたみ 小兒の遺尿を治す。

石門「二の名は丹田」臍の下二寸。

灸七壯より二百壯まで、針五六分留ること七呼 あるひは八分留ること三呼、氣

を得て即ち瀉す。婦人比穴に針灸すれば一生懷妊せず。

傷寒 小便赤く通ぜず 泄瀉止す 血淋 吐血 積塊 せんき 腹いたみ 不食 水腫

血塊 崩血を治す。

関元 一穴 臍の下三寸。

灸七壯より二百壯まで、針一寸二分留ること七呼 或は八分留ること三呼、瀉五

吸。妊婦は禁針。

精冷虚乏しく 臍中絞いたみ 寒氣腹に入ていたみ 疝氣 勞熱 積聚 風眩 づつ

う 洩利 小便通ぜず 淋病 失精 白濁 溺 血 下血 崩漏 月水通ぜず 帶下を

治す。

中極 一穴 臍の下四寸。

灸五壯より百壯まで、針六分留ること十呼、氣を得て即ち瀉す。

積塊 心に上り 疝氣 陰寒 陽氣虚憊 水腫 小便頻數 遺精 さんご惡露行らず 胎衣

下らず 月經調ず 子門腫いたみ 淋病 恍 惚 尸厥 飢ても食すること能は

ず。子なき婦には、四度針すれば子あり、又孕婦にはいむ。

曲骨 一穴 臍の下五寸、横骨の上、毛際 の陷中。

灸七壯より四十九壯まで、針二寸一寸あるひは六分留ること七呼。

五藏虚弱 冷極て小腹脹痛み 小便通ぜず 淋瀝 遺精 赤白帶下を治す。

雲門 二穴 結喉の下五寸、左右へ六寸づつ 陷中。針三分、灸五壯。

傷寒 手足熱し 氣のぼり心胸をつき 脇より背にとをりて痛み 肘をあぐることを能
ず 喉痺 しゃくり 短氣 瘰癧を治す。

中府 二穴 雲門の下一寸。灸五壯、針三分。

腹脹 手足はれ 食下らず 喘氣 胸痞 肩背いたみ 嘔呃 欬通 上氣 肺系ひきつ
り 肺の寒熱 胸ふるひ 膽熱し 欬 唾 濁涕 風汗出 面浮 少氣して臥ことならず
傷寒 胸中熱し 遁死をつかさどる。

氣舍 二穴「氣舍」天突「結喉の下四寸」の左右へ各一寸五分づつ。

灸五壯、針三分。

上氣 肩腫て 顧 こと能ず こうひ 咽腫 飲食下らず しゃくり 瘰癧をつかさどる。

缺盆 二穴「欠盆」天突の左右へ各四寸、肩の下 横骨の上 廉くぼみの中。

灸三壯、針二分 留 こと七呼、ふかく刺べからず。

水腫 積聚 瘰癧 喘急 こうひ 汗出 寒熱 缺盆の中腫 胸みち 傷寒 胸の中熱
するを治。

幽門 二穴 臍の上六寸、巨闕の左右へ各五分「一日一寸五分づつ」づつひろく。

針一寸、灸五壯。

小腹脹満 涎沫を嘔吐し いきれもだへ 胸みちいたみ 不食 欬逆 健忘 膿血
をくだし 目赤いたむを治す。

通谷 二穴 幽門の下一寸、上腕の左右へ五分づつ。針五分、灸三五壯。

口喎み 不言 心恍 目赤いたみ 痰飲 嘔吐 しゃくじゆを治。

陰都 二穴「陰都」通谷の下一寸。針三分、灸三壯。

心満 逆氣 腹鳴 肺脹 目赤いたむを治す。

石関 二穴 あんとの下一寸。針一寸、灸三壯。

嘔吐 しゃくり 腹いたみ 氣淋 大小便通ぜず 心下堅満 脊強り 目赤く 女の
血塊を治。

傷寒湯水と多飲し、腹脹氣喘さ心の下痛、公病面赤く、真氣不足一切の氣病久く差ど瘦麻四支力弱く積聚せんと血塊胎の下冷氣の心痛中惡泄痢大小便通ぜぬ崩漏帶下月水調り産後惡露止ど胎腹痛悶著腰のこゝ小兒の遺尿と治す
○石門 一名胃門 胎の下二寸灸七壯より二百壯まで針五六分留るこ七呼或ハ八分留るこ三呼氣を得て即ち瀉せし婦人此穴は針灸せし生懷妊せし傷寒小便赤く通ぜぬ泄瀉止ど血淋吐血積塊せんと腹のこゝ不食水腫血塊胎血と治す

○関元 二穴 胎の下三寸灸七壯より三百壯まで針一寸二分留るこ七呼或ハ八分留るこ三呼瀉五吸妊婦禁針精冷虛さく胎中絞り寒氣腹に入れり胎氣勞熱積聚風眩と治す
○中極 二穴 胎の下四寸灸五壯より三百壯まで針六分留るこ七呼氣を得て即ち瀉せし積塊心の上り胎氣陰寒陽氣虛憊水腫小便頻數遺精こんこ惡露行の胎衣下る月經調り子宮腫れし胎病洗滌尸展飯を食せし能る子と婦人

四度針せし子あり又孕婦の心曲骨二穴 胎の下五寸積骨の上手胎の胎中灸七壯より四百九壯まで針二寸一寸あり六分留るこ七呼五藏虛弱冷極て小腹脹痛小便通ぜぬ淋瀝遺精赤白帶下と治す
○雲門 二穴 結喉の下五寸左右へ六寸す胎中針三分灸五壯傷寒手足冷氣のなり心腹さし脇の背にさしと瘧疾のわくる能く瘧疾と治す
○中府 二穴 雲門の下一寸灸五壯針三分腹脹手足冷食下らぬ喘氣胸痞痞青い嘔呃欬逆上氣肺系あり

肺の寒熱胸中の膈熱一欬唾濁涕風汗出面浮少氣と治す
○氣舍 二穴 天突の左右へ各一寸五分灸五壯針三分上氣肩腫と治す
○缺盆 二穴 天突の左右へ各一寸五分灸五壯針三分上氣肩腫と治す
○中府 二穴 雲門の下一寸灸五壯針三分腹脹手足冷食下らぬ喘氣胸痞痞青い嘔呃欬逆上氣肺系あり

不容 二六 幽門の傍ら相去こと一寸五分。灸三壯五壯、針五分八分。

腹みち 疝へき 唾血 肩脇いたみ 心背いたみ 欬すれば肩に引て痛み 嗽喘 疝瘕
不食 腹鳴 嘔吐を。

承滿 二六 ふよの下一寸、上腕の兩傍へ各二寸「一に曰三寸」。

針三分、灸三壯五壯。

腸鳴 腹はり 上氣 喘逆 飲食下らず 肩息 唾血を。

梁門 二六 承滿の下一寸。針二分、灸五壯。

脇下積氣 不食 滑泄 完穀化せざるを治す。

関門 二六 梁門の下一寸。針八分、灸五壯。

喘満、積氣、腸鳴いたみ 泄利 不食 腹中氣はしり 臍を夾てひきつり痛み 身腫

痰瘧 振寒し 遺溺するを治す。

太乙 二六 関門の下一寸。灸五壯、針八分。

心煩 てんかん 狂乱 舌を出すを治す。

滑肉門 二六 太乙の下一寸。灸五壯、針八分。

癰 狂 嘔逆 吐血 重舌 舌こわきを治す。

天樞 二六 「天樞」臍の左右へ二寸づつ。灸五壯より百壯まで、千金方に曰く

針すべからず。

泄瀉 痢病 不食 水腫 腹脹 腸鳴 上氣胸に突き 久積 冷氣臍腹痛 嘔吐 霍乱

瘧り 傷寒 水を飲て腹はり 女の血塊 漏下 帶下 月水 調ざるを主る。

氣衝 二六 「氣衝」兩股の付根 動脈ある所也。

俗に云、いのもも処ぐりくする圓き小骨の一寸上にあり。禁針、灸三壯七壯。

腹みち 疝氣 陰丸はれ 小腹腰いたみ 婦人子なく 胎衣下らざるを治す。

小腹脹滿逆冷嘔吐下利者
○通谷二穴 關門の下二寸上腕の左右へ
五分針五十分灸三五壯口噤不言
心恍惚者灸之痰飲嘔止多言治
○陰都二穴 通谷の下二寸針三分灸五壯
心痛氣脹腸鳴腹脹目赤いびり治と

○石關二穴 心口の下二寸針寸灸五壯
嘔吐多し腹いり氣滯大便秘通
心下堅滿者灸之自赤く女の血塊を治
○不容二穴 關門の傍ら相去一寸五分
灸三壯五壯針五十分灸腹中結
噎血肩脇の痛背の痛灸之肩小

霍亂洩利腹中痛者
能治腸下積氣傷寒の心痛嘔酸不
食々後水と吐き腹脇支滿血塊の
わらひ消渴さんどの餘痛尸厥傷寒の
腹中痛諸語す脈微す緊するもの
又發熱惡寒一入湯之腹滿自汗
小便利する者又五十分針止之者
婦人傷人發熱惡寒經水不來
七八日熱除く脉遲身涼胸脇滿諸
證あるは執血室に入るか關門を刺て愈
○腹哀二穴 關門の下二寸腹の中行と去
四寸半針三分灸中寒食化す大
便の膿血とくす治と

○天樞二穴 臍の左右二寸灸五壯
より百壯ふ千金方に曰く針さう
と泄瀉痢病不食水腫腹脹腸鳴
上氣胸中痞久積冷氣鬱腹痛
嘔吐霍亂傷寒水飲で腹いり

女の血塊漏下帶下月水調さる
○氣衝二穴 兩股の付根動脈ある所也
俗に云いのこたふる圓き小骨の
二寸上りの禁針灸三壯七壯腹中
而氣陰をれ小腹腰の痛婦人子
胎衣下らるる治と
○期門二穴 不容の傍ら一寸五分又曰
針より直一寸半下針四分灸五壯
胸中煩熱責脈上下目青く嘔

引て痛く嗽喘疝瘕不食腹脹嘔吐
○承滿二穴 心口の下二寸上腕の兩傍へ
各二寸針三分灸三壯五壯腸鳴
よりし氣喘逆飲食下ら肩息嘔血
○梁門二穴 承滿の下二寸針二分灸五壯
腸下積氣不食滑泄完穀化さる治と
○關門二穴 梁門の下二寸針八分灸五壯
嘔滿積氣腸鳴いり泄利不食腹中
氣いり臍と來いものり痛
瘕瘕振寒一還潮より治と
○太乙二穴 關門の下二寸灸五壯針八
分心煩てん狂乱言と出さる治と
○滑肉門二穴 太乙の下二寸灸五壯針八
分瘕瘕嘔逆吐血重舌と治と

期門 二六 不容の傍ら一寸五分、又曰乳より直に一寸半下。

針四分、灸五壯。

胸中煩熱 賁豚 上下 目青くして嘔し 霍乱 洩利 腹かたく大にして喘き臥

こと能ず 脇下積氣 傷寒の心痛 嘔酸 不食 食後に水を吐き 胸脇支満 血塊

口かはき 消渴 さんごの餘病 尸厥 傷寒の腹みち 譫語、寸脉微にして緊なる

もの、又發熱惡寒し 大に渴き 腹満 自汗 小便利する者、又五六日譫語止ざる

者。婦人 傷かん 發熱 惡寒 經水たまくる 來り 七八日熱除て 脉遅 身涼く 胸脇

満 譫語するは熱血室に入る。みな期門に刺て愈。

腹哀 二六 期門の下二寸、腹の中行を去こと四寸半。針三分、禁灸。

中寒 食化せず 大便に膿血をくだすをつかさどる。

腹結 二六 腹哀の下四寸八分。針七分、灸五壯。

欬逆 腹冷 臍いたみ 泄瀉 心痛を治。

章門 二六 臍の上二寸、兩旁へ九寸づつ。側卧てうへの足をかがめ 下の足をの

べて 肘の尖のあたる処の肋の端。

針六分八分留ること六呼、灸百壯五百壯まで。

腹鳴 食化せず 胸脇いたみ 臥ことを得ず 煩熱 口乾き 不食 喘息 心痛 食傷

嘔吐 腰脊冷いたみ 白濁 寒疝 しゃくじゆ 腹腫 脊強り 肩臂拳らず 四支懈惰

身黄に瘦 善おそれ 少氣 厥逆を治す。

京門 二六 直に章門の後 十一枚めの肋骨の先すこしへこみある陷み

俗に後章門といふ処なり。灸三壯、針三分留ること七呼。

腸鳴り 小腹いたみ 肩いたむを治す。

肩背の部

776-1500

金焦詩

1161-1162

肩背の部

肩井 二穴 肩の上陷の中 鉄盆の大骨の後一寸半 肩の中央なり、指を三汰て推
てとる 中指の下陷の中。

灸五壯、針五分。もしふかく刺ば悶倒する、悶倒せば三里に針して補ベ
し。

中風 氣塞り 涎上て語らず 腎虚して腰いたみ 上氣 短氣 逆氣 風勞 撲損
臂尻いたみ 頭項痛みかへりみることを得ず 五勞七傷。婦人難産墮胎の後 手足
冷弱き者、針して則いゆ。日に灸すること七壯より二百壯まで。

肩髃 二穴 肩のはづれ 肩骨と臑骨のつがひめ 臂を伸あぐれば 肩端にくぼむ穴あ
る 処なり。

針八分留ること三呼 瀉すること五吸 或は一寸 或は六分留ること六呼、灸七
壯二七壯、もし中風には四十九壯 おほくすべからず。

風病 筋骨力なくば灸せよ、刺は肩臂の熱氣を瀉す。中風 手足かなはず 拳急 肩肘
いたみ 肩中熱し 頭圓らず 風熱 癰 癰 勞氣 遺精 しゃうかん 熱さめず 手足熱
するを治す。

大椎 一穴 脊の一の椎の上陷の中。

針五分留ること三呼 瀉五吸、灸 州 壯五十壯。

肺脹 脇みち 嘔吐 上氣 五勞七傷 力なく 温瘧 肩背ひきつり 頭項強りて
顧ることを得ず 風勞 食氣 骨熱 齒燥を治す。傷寒太陽と少陽との併病

頸項強いたみ 眩冒 心下つかへるに刺べし。

身柱 一穴 三椎の下。灸三壯より百壯まで。

癰癰 狂乱 腰背いたみ 小兒の驚癰五疳を治す。俗にちりけと云は比穴也。

命門 一穴 一四椎の下。針五分、灸二壯 或は五十壯百壯。

久瘡 腰腹引痛 久き頭痛 發熱汗出ず 寒熱 骨蒸 五藏熱 下血 小兒きやうふう

てんかん 反折を治す。

陽関 一穴「腰陽関」十六椎の下。針五分、灸三壯。

久き瘡 腰膝いたみ 小腹いたみ 中風 不仁 筋攣り 行ざるをつかさどる。

腰俞 一穴「腰俞」二十一椎の下。

灸七壯四十九壯、針二分留ること七呼、あるひは八分留こと三呼、瀉は五吸。

腰尻背いたみ 温瘡汗出ず 足膝不 仁 していたみ 傷寒 四支熱し月經通ぜず

帯下を治す。

長強 一穴「長強」脊の骶骨の端、俗に龜の尾と云處なり。

針二分留ること七呼、灸五壯あるひは三十壯二百壯まで。是痔の根本なり。

腸風 下血 久痔 腰背いたみ 狂乱 大小便がたく 頭重く 洞泄 淋病 小兒

顫陷り 驚風 癲癇 瘕瘕 嘔血 驚恐 視こと正からざるを主る。

脊強るものはこれを瀉し、頭腫る者はこれをおぎなふべし。

風門 二穴 背の二椎の下、兩旁へ一寸五分づつ。

針五分三分留こと七呼、灸五壯。

癰疽 身熱 上氣 氣短く 欬逆 胸背痛 嘔吐 傷寒 頭項強り 目瞤り 胸熱を

治。

肺俞 二穴「肺俞」三椎の下、兩旁へ一寸五分づつ。

針三分五分留ること七呼、氣を得てすなはち瀉す、刺て肺に中れば欬て三日に死

す、灸百壯五十壯。

勞瘵 口舌乾き 上氣 腰脊強いたみ 寒熱 氣短 喘滿 虛煩 肺痿 咳嗽 肉いたみ

皮膚癢 嘔吐 不食 狂走り 背癆を治す。太陽と少陽と併病、頭項強いたみ 或

は眩冒 心下痞 硬に太陽の經の肺俞 肝俞を刺べし。

厥陰俞 二穴「厥陰俞」四椎の下、左右へ一寸五分づつ。針三分、灸七壯。

欬逆 牙痛 心いたみ 胸滿 嘔吐 煩悶を主る。即ち心包絡の俞なり。

心俞 二穴「心俞」五椎の下、左右へ一寸五分づつ。

針三分留ること七呼、氣を得て即瀉す、刺て心に中れば 噫 して即死、

禁灸。千金に曰 中風 心急には心俞を灸すること百壯。

中風 胃絶 てんかん 狂走を主る。

熱一月經通ずる帯下と治す
○長強二穴脊の骸骨の端俗に龜の尾
と云處より針二分留らし七呼灸五
壯あるの三十壯二百壯を是痔の
根本より腸風下血久痔腰背の
狂乱大小便の頭重く洞淋病小
兒驚風驚風癲癩癰疽血驚恐
視正正正正正正正正正正正正
○風門二穴背の三推の下兩旁へ寸五
公の針五分三分留し七呼灸五壯
瘧疾身熱し氣短く欬逆胸背痛
嘔吐傷寒頭項強り目瞤り胸脇治
○肺俞二穴三推の下兩旁へ寸五分

針三分五分留し七呼氣を得て
ささり瀉し刺し肺の中を灸
三日小死す灸百壯五十壯勞瘵口舌
乾し上氣腰脊強し寒熱氣短喘
滿虛煩肺痿咳嗽肉の皮癢嘔吐
不食狂走り背癢治す太陽心陽
と併病頭項強し或は眩冒心下痞
硬は太陽の經の肺俞肝俞刺し
○厥陰俞二穴四推の下左右へ寸五分
針三分灸七壯欬逆牙痛心の胸痛
嘔吐煩悶と主す即ち心包絡の俞
○心俞二穴五推の下左右へ寸五分
針三分留し七呼氣を得て即瀉し
刺し心の中を瀉し即死禁灸

千金曰中風心急心俞灸之
と百壯中風胃逆心俞灸之
○商俞二穴七推の下兩旁へ寸一
五分灸三壯壯多灸之灸心中
は微く悸惕する針三分留し七呼
若刺て脇の中を一歳過して
死と心痛周痺吐食譫胃骨蒸手足
急驚一と目と心と痰癰熱嘔吐
兩胃寒疼飲食下る熱病汗出と
身なり常に瀉して不食身を瀉
腹滿自汗多と治す
○肝俞二穴九推の下兩旁へ相去寸
五分灸三壯七壯針三分留し七呼
刺し肝の中を灸七五日に死と

怒り黃疸熱病の後目く涙の目
眩氣短く欬血目上視欬逆口乾
筋筋寒へ熱痙筋急は相引轉筋腹
入り欬し胸脇を引て痛を反折上
視し驚狂と心と唾血短氣積聚治
○膽俞二穴十推の下兩旁へ寸五分
針三分五分留し七呼灸三壯五壯
刺し膽の中を一日に死と頭痛振寒
汗出と腹下腫心腹脹口苦舌乾
咽痛乾嘔吐骨蒸勞熱不食目黃治
四花の上二穴商俞下二穴肝俞あり
○脾俞二穴十一推の下兩旁へ相去寸
五分針三分留し七呼灸三壯五壯
刺し脾の中を瀉し五日に死と

鬲俞二六「鬲俞」七椎の下、兩旁へ去一寸五分づつ。

灸三壯 卅壯 壯多く灸すれば心中に徹て悸惕する、針三分留こと七呼、若刺て膈に中れば一歳を過ずして死す。

心痛周痺 吐食 翻胃 骨蒸 手足怠惰して卧ことをこのみ 痲癖 欬逆 嘔吐 鬲胃寒 痰飲 食下らず 熱病汗出ず 身おもく常に温にして不食 身いたみ 脇腹満 自汗 ねあせを治す。

肝俞二六「肝俞」九椎の下、兩方へ相去こと各一寸五分。

灸三壯七壯、針三分留ること六呼、刺て肝に中れば欬して五日に死す。

多怒り 黄疸 熱病の後目くらく涙いで 目眩 氣短く 欬血 目上視 欬逆 口乾き 寒疝 筋寒へ 熱瘧 筋急に相引 轉筋腹に入り 欬して胸脇に引て痛み 反折り

上視し 驚狂 はなぢ 唾血 短氣 積聚を治す。

膽俞二六「胆俞」十椎の下、兩旁 各一寸五分づつ。

針三分五分留ること七呼、灸三壯五壯、刺て膽に中れば一日に死す。

頭痛 振寒汗出ず 腋下腫 心腹脹 口苦く 舌かはき 咽痛乾き 嘔吐 骨蒸 勞熱 不食 目黄を治す。四花の上二穴は鬲俞 下二穴は膽俞なり。

脾俞二六「脾俞」十一椎の下、兩旁へ相去こと一寸五分づつ。

針三分留こと七呼、灸三壯五壯、刺て脾に中れば 吞酸 して五日に死す。

多食して身瘦 鹹き汁を吐き けんべき 積聚 脇下みち 洩利 痰瘡 寒熱 水腫 氣脹 脊に引ていたみ 黄疸 不食を治す。

胃俞二六「胃俞」十二椎の下、兩旁へ一寸五分づつ。

針三分留ること七呼、灸三壯七壯。

中濕 霍乱 胃冷 腹脹て鳴り 翻胃 嘔吐 不食 多食して瘦羸 目暗く 腹いたみ むねわき支満 脊いたみ 筋挛を治す。

三焦俞二六「三焦俞」十三椎の下、左右へ一寸五分。

針三分五分留ること七呼、灸三壯五壯。

積じゆ 脹満 不食 羸瘦 傷寒 頭痛 吐逆 肩背腰強り 小便澁り 泄注 腹脹 腸鳴り 目眩 頭痛を治す。

多食して身瘦弱汁は止まんべ
積聚腸下の洩利痰瘧寒熱水腫
氣脹者引く引く黄疸不食治
○胃俞二穴十二推の下兩旁二寸五分
針三分留七呼灸三壯七壯
中濕霍亂胃冷腹脹鳴り嘔胃嘔
吐不食多食瘦弱目暗く腹を
ひひく支滿者引く筋挛治と
○三焦俞二穴十二推の下左右二寸五分
針三分留七呼灸三壯五壯
積下腹滿不食羸瘦傷寒頭痛吐逆
肩背腰強り小便赤り泄注腹脹腸
鳴り目眩頭痛と治と
○腎俞二穴脊の十四推の下左右二寸

五分膺平灸三壯針三分留と
七呼り刺腎中五推六日に
死と五勞七傷虛弱羸瘦耳聾と
下部令淋濁目暗く溺血遺精腰膝
脚の消渴身熱振寒多食
と瘦面黃黒く腸鳴四散と洞
洩食化せ身浮腫と治と
○大腸俞二穴十六推の下左右二寸五
分灸三壯針三分留七呼中
腰脊強り腰痛腹の腸鳴り多
食身瘦大小便結洩利白痢腸澼
○小腸俞二穴十八推の下左右二寸五分
灸三壯針三分留七呼中身小
便赤く淋瀝遺溺小腹脹滿汚痛と

泄痢膿血五色脚腫五痔瘡瘰癧之
津液とく消渴口乾と帶下と治と
○膀胱俞二穴十九推の下兩旁二寸五
分灸三壯七壯針三分留七呼
風勞脊強り小便赤黄遺溺陰痿少
氣經寒拘急腹滿大便と洩行瀝
と脚膝力乏女子瘕聚と治と
○膏肓俞二穴四推の下五の推の上に
脊中と左右相去各三寸傳小脾
骨のさへ一指と側置るに點と
後氣海丹田関元中極四穴の内一穴
と足の三里灸と灸と火氣引下
灸百壯五百壯と虚損傳尸
骨蒸遺精瘦つれ健忘痰飲とく上

氣發狂と主る隔噎心中妨悶項背と
まり肩氣病諸病治とく治と
○神堂二穴五推の下左右三寸づ開
針三分五分灸五壯三壯腰背強り
寒發熱胸腹滿氣逆上攻時と瘧と
○譙譙二穴六推の下左右三寸づ開
肩膊の内と針三分留七呼灸五壯
灸六分留七呼瀉五吸灸五壯
百壯と大風汗出と勞損脚と
瘡疾背の氣滿腹脹氣眩と
○腰脊痛の灸灸灸喘逆
膈内廉の灸食時腹痛五心熱と治と
○高関二穴七推の下左右三寸づ開
の中針五分灸三壯背痛惡寒脊

腎俞 二六「腎俞」脊の十四椎の下、左右へ一寸五分づつ、臍と平し。

灸三壯、針三分留ること七呼、もし刺て腎に中れば噎て六日に死す。

五勞七傷 虚して羸瘦 耳聾 下部冷 淋濁 目暗 溺血 遺精 腰膝脚いたみ

消渴 身熱 振寒 多食しても瘦 面黄黒 腸鳴 四肢だる 洞洩 食化せず

身浮腫るを治す。

大腸俞 二六「大腸俞」十六椎の下、左右へ一寸五分づつ。

灸三壯、針三分留ること六呼。

中燥 脊強り 腰痛み 腹いたみ 腸鳴り 多食して身瘦 大小便結 洩利

白痢腸癖を。

小腸俞 二六「小腸俞」十八椎の下、左右へ一寸五分づつ。

灸三壯、針三分留ること六呼。

中暑 小便赤く 淋瀝 遺溺 小腹脹満 疝痛み 泄痢 膿血五色 脚はれ 五痔

づつ 虚乏 津液すくなく 消渴 口かはき 帶下を治す。

膀胱俞 二六「膀胱俞」十九椎の下、兩旁へ一寸五分づつ。

灸三壯七壯、針三分留ること六呼。

風勞 脊強り 小便赤黄 遺溺 陰瘡 少氣 脛寒拘急 腹満 大便かたく 洩利

腹いたみ 脚膝力なく 女子瘕聚を治す。

膏肓俞 二六「膏肓」四椎の下、五の椎の上にちかし脊中を左右へ相去こと各三寸。

口傳に胛骨のきはに一指を側置ほどに點すべし、後に氣海 丹田 関元 中極

四穴の内一穴と足の三里とに灸して火氣を引下てよし、灸百壯五百壯まで。

虚損 傳尸 骨蒸 遺精 瘦つかれ 健忘 痰飲 しゃくり 上氣發狂を主る。膈噎

心中妨悶 項背こわり 目病 氣病 諸病治せずといふことなし。

神堂 二六 五椎の下、左右へ三寸づつ開。針三分五分、灸五壯三壯。

腰背強り 惡寒發熱 胸腹満 氣逆上攻 時に 饅るを。

諱諱 一六 六椎の下、左右へ三寸づつ開。肩膊の内かど。

針三分留ること七呼あるひは六分留ること三呼瀉五吸、灸五壯より百壯まで。

大風汗出ず 勞損臥ことを得ず 瘧疾 背もだへ 氣滿腹脹 氣眩 むねわき腰背痛み

目いたみ 鼻衄 喘逆 臂膊内廉いたみ 食時頭痛 五心熱を治す。

鬲関 一六「膈関」七椎の下、左右へ三寸づつ、陷の中。針五分、灸三壯。

背痛み 惡寒 脊強り 不食 しゃくり 涎唾多く 胸もだへ 大便調はず 小便黄

なるを治す。

魂門 一六 九椎の下、左右へ三寸づつ開き。針五分、灸三壯。

背より心に引いたみ 尸厥 腹鳴 大小便とのはざるを治す。

意舎 一六 十一椎の下、左右へ三寸づつ開。針五分、灸五十壯百壯。

腹滿 泄瀉 小便赤黄 嘔吐 不食 消渴 目黄なるを治す。

肓門 一六 十三椎の下、左右へ三寸づつ開。針五分、灸二壯あるひは三十壯。

心下いたみ 大便かたく 婦人の乳病を治す。

志室 一六 一四椎の下、左右へ三寸づつ開。針五分、灸三壯七壯。

陰腫いたみ 腰背こはりすくみ 食化ず 遺精 淋病 吐逆 兩のわき牽りいたみ

霍乱を治す。

胞育 一六 十九椎の下、左右へ三寸づつ。針五分、灸三十五壯五十壯。

腰背いたみ 腹脹 食化ず 淋病 大小便通ぜざるを治。

秩邊 二六「秩辺」二十椎の下、左右へ三寸づつ。針三分五分、灸三壯。

五痔 小便赤 腰痛を治。

肘手の部

極泉 二穴 肘を脇に下付れば 肘と肩二つに折る横文のかしら、すこし胸の方へ推入てとる、筋肉の間 動脈のある処なり。針三分、灸七壯。

肘手足冷あがり 心脇いたみ 煩れ 乾嘔し 悲み多く發るを治す。

天府 二穴 極泉の下三寸 筋骨の間に動脈ある処なり、下の尺澤を目あてにして点す。禁灸、針四分 留こと七呼 或は三呼。

卒中風 邪氣 飛尸 惡症 鬼語 めまひを治す。

俠白 二穴「俠白」天府の下二寸 動脈の處也。針三分灸五壯。

心痛 短氣 乾嘔 心煩を治す。

尺澤 二穴「尺沢」肘の中 屈伸する横文の中 中指と無名指との間の通り、

推ば筋骨の解め 動脈の處。針灸ともに肘の中の青筋に中らぬやうにすべし。

針三分 留こと三呼。

肩背いたみ 中風 小便數 よく噎て 樂ず 寒熱 風痺 臑肘 牽り こうひ 上氣 嘔吐 口舌かはき 咳嗽 おこり 手足はり にはかに腫 心痛 心煩 勞熱 上氣 腰背 強痛み 肺の積 小兒慢きやうふうを治す。

魚際 二穴 手大指本節の後へ内側 うでの横文の中 寸口の脉の上際なり。

針一分 留ること三呼、禁灸。

酒病 惡寒 虛熱 舌胎 黃 づつう 咳嗽 胸腹いたみ 目眩 不食 肘牽り 咽乾 尻いたみ 溺血 嘔血 心痺 乳癰を治す。

〔圖〕

孔最 二穴 尺澤を目的に魚際より七寸。針三分、灸五壯。

熱病汗出ず 欬逆 肘痛 手握られず 吐血 咽腫 声出ざるを治す。

列缺 二穴「列欠」腕の側 上へ一寸五分、然ども寸を以は知がたし。左をとるには、病人の右の食指を左の五指と食指との間に組入て 右の食指の頭のあたる処を穴とす、右を取も比のごとし。

針三分留ること三呼 瀉は五吸、灸三壯七壯四十九壯にいたる。

中風 口噤み 口眼ゆがみ 手肘力なく 半身かなはず 寒熱 おこり 咳嗽 唇ゆるまり 健忘 溺に血まじり 精もれ 陰痛み 小便熱し 驚癇 癰腫 肩痺 胸脇冷尸厥 手足腫るを。

太淵 二穴 掌の後へ 陷中、魚際と寸口との間。

灸三壯、針二分留ること三呼。

胸痺 逆氣 嘔吐 咳嗽 不寐 目痛 青く 或は白 翳赤筋を生じ 轉筋 乍寒 乍熱し 掌中熱し 缺盆の中と 胸肩背臂いたみ 寒喘 咳血 吐血 振寒 咽乾 狂言 溺の色 牽り遺失度なきを治す。

少商 二穴 手大指の内側ら「小指の方は外 大指の方は内」爪の生ぎはを一分ほど去る。針一分留ること三呼 瀉は五吸、禁灸。

頤腫 喉閉 心の下満 汗出て寒く 痰瘧 欬逆 腹脹 不食 指いたみ 掌熱し 小兒の乳鵝を治す。

商陽 二穴 手食指の内「大指の方」側ら 爪甲の角を一分ほど去る。

針一分留ること一呼、灸三壯。

胸中に氣みち 喘欬 おこり 熱病汗出ず 耳鳴 きこへず 頤はれ 齒いたみ 肩背 缺盆いたみ、目青くらむに灸三壯 目左ならば右にすべし。

二間 二穴 手の食指の本節の前「爪の方」内側ら 拳をにぎれば 食指の内側 本節の前に折目出る、おりめの頭ら陷の中也。針三分留ること六呼、灸三壯。

喉痺 頤腫 肩背腕いたみ 齒いたみ 目黄み はなぢ 口ゆがみ 不食 傷寒の水 結を治す。

三間 二六 手食指の本節の後内側 拳をにぎりて食指の内側ら 本節の後にいづるおりめのかしら 陷の中。針三分留ること三呼、灸三壯。

こうひ 下齒を虫喰いたみ 胸腹つかへ 腸鳴 泄瀉 かんねつ おこり 唇焦れ 口乾き 目眚いたみ 舌を吐 氣喘 不食 傷寒 氣熱 身冷 結胸を。

合谷 二六 手大指と食指との岐 骨の間だ 陷中 推ば肘にこたへる処。

灸三壯、針三分留ること六呼。

傷寒 大に渴き 發熱 惡寒 づつ 背強り 汗なく 寒熱 瘧り はなぢ 目くらく

虫齒 耳聾 喉痺 面はれ 言 こと能ず 口噤み 中風 かざぼろせ、痲疥 偏正のづ

つつ 腰背いたみ 小兒乳鵝を治。

陽谿 二六 「陽溪」 腕中の上側 兩筋の間 陷の中、直に合谷の通の腕くび 屈伸

する節なり。

狂言して笑ひ 瘡疾 づつ 胸満息ならず 寒咳 こうひ 耳鳴り きこへず 肘痛

痲疥を。

偏歴 二六 陽谿の上「ひぢの方」三寸にあり。比より以下の穴は、陽谿と曲池とを

目的にしてとる。針三分留ること七呼、灸三壯。

肩肘腕しびれ痛み 衄血 瘡 てんかん こうひ 耳なり 小便しげきを治す。

溫溜 二六 直に偏歴の上二寸、腕のうしろ五寸。針三分、灸三壯。

上氣 めまひ てんかん 風逆 手足はれ 肘痛 こうひ 口舌痛 はなぢを。

下廉 二六 偏歴のとをり 曲池の下四寸。針五分留ること二呼、灸三壯。

泄瀉 勞瘵 小腹つかへ 大小便に血まじり 中風 熱風 冷しびれ 顔色あしく

けんへき 腹脇いたみ 食こなれず 乳癰を治す。

上廉 二六 曲池の下三寸。針五分、灸五壯。

小便しがり黄赤く 胸いたみ 中風 半身かなはず 骨髓ひへ 手足しびれ

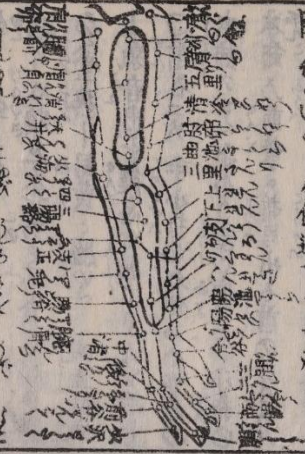
喘息 腦風 づつを治す。

○溫溜二穴直に偏歴の上二寸腕のじろ
五寸針二分冬三壯上氣めすのじん
風通手足れ肘痛くひ口舌痛く多
○下廉二穴偏歴の二寸曲池の下四寸
針五分留ろく二呼灸三壯池瀉瘰癧
小腰く大小便の血まや中風流風
るひと顔色かへんへと腰脇の
食こたれと乳癰治と
○上廉二穴曲池の下三寸針五分冬五
壯小便あす黄赤く胸のく中風
半身く骨痛の手足く常息
腦風はつと治と
○手三里二穴曲池の下二寸推指の四
方の内高く起る処針二分灸三壯中風

○曲池二穴肘のくめ手先と胸のく
肘の横文の上方のく曲骨の間
針七分氣得て編一後にく補と或
五分留ろく七呼灸三壯又日七壯
二百壯のく且停ろく余日
又七壯中風半身く手肘のく風
からく胸のく肘瘦力く傷寒
の餘熱く身痛く虫のく
痲赤婦人經脈つと治と
○五里二穴曲池の上三寸大筋の真中
く肩髃のく目的く灸針
冬十壯瘰癧風吐血肘のく上氣心痛

○臂臑二穴直に曲池の上七寸肩髃
目的く筋骨の間くの中冬日
七壯二百壯に至る針のく若針
せむ三分く深くく肘のく
かやく肘痛のく頸項牽る治と
○少海二穴肘のく横文の下く
小指のとけり也横文の上のく曲池
下の尖のく針三分留ろく三
呼瀉五吸禁灸齒疼く目く發狂
嘔吐項のく肘牽り腕下のく手足わ
くを腦風く心痛喉逆のく治
○青靈二穴直に少海の上三寸肘の伸
く禁針灸三壯七壯目黄く

○神門二穴小指の後の通り腕の横
文の中く則掌の後の尖骨の下
手



○少府二穴掌の内小指の無名指の
かめて兩指の頭のく間く針
冬三壯七壯心煩火氣入と患は手
熱く肘のく脇牽り腕のく久瘡
陰のく小便通く

手三里 二穴 曲池の下二寸、推ば指の四方の肉高く起る处。

針二分、灸三壯。

中風 口ゆがみ手足かなはず 霍乱 遺失 音出す 齒疼み 頰頰腫る いれき 肘臂い
たむを治す。

曲池 二穴 肘をかがめ手先を胸にあてて、肘の横文の上方のはづれ、曲る骨の間
だ。針七分 氣を得て瀉し 後にこれを補す 或は五分 留ること七呼、灸三壯 又
日に七壯 づつ二百壯にいたる 且停ること十余日して 又七壯。

中風 半身かなはず 手肘いたみ 風ほろせ ころひ 胸いきれ 肘瘦力なく 傷寒の餘
熱 てんかん 身痛かゆく 虫のさすごとく 痂疥 婦人經脉 づつぜざるを治す。

五里 二穴 「手五里」 曲池の上三寸、大筋の真中にあり、肩髃「肩の部にみへたり」を
目的にとる。禁針、灸十壯。

驚風 吐血 肘いたみ 上氣 心満 身黄み る いれきをつかさどる。

臂臑 二穴 直に曲池の上七寸、肩髃を目的にとる 筋骨の間くぼみの中。

灸日に七壯 二百壯に至る、針はよろしからず 若 針せば三分より深くすべからず。
肘ほそく力なく 肘痛 る いれき 頸項 拳るを治す。

少海 二穴 肘をかがめて横文の下はづれ 小指のとをり也、横文の上の尖は曲池
下の尖は少海なり。針二三分 留ること三呼 瀉は五吸、禁灸。

齒疼み 目まひ 發狂 嘔吐 項こはり 肘拳り 脇下いたみ 手足あがらず 腦風
づつう 心痛 呃逆 る いれきを治す。

青靈 二穴 「青靈」 直に少海の上二三寸、肘を伸挙てとる。禁針、灸三壯七壯。
目黄み づつう 肩肘いたみてかなはざるを治す。

少府 二穴 掌の内 小指と無名指とをかがめて兩指の頭のあたる間なり。
針二分、灸三壯七壯。

心煩 少氣 人を畏れ 手中熱し 肘しびれ 脇拳り 胸いたみ 久瘡 陰かゆくい
たみ 小便通ぜざるを治す。

【圖】

神門 二穴 小指の後の通り 腕の横文の中にあり、則 掌 の後の尖骨の下
手外 蹠の上 兩骨の間 拳を握り力めば陷処なり。

針三分留ること七呼、灸七壯。

瘡り 心煩れ 水を好み 不食 心痛 手肘ひへ 掌熱し 目黄み 脇いたみ 嘔血 吐血
上氣 音出ず 健忘 心積 てんかんを治す。

前谷 二穴 手小指の外側ら 小ゆびの本節のまへにあり、拳を握れば小指の本節の
前後に折目出る 前のおりめは前谷 後の折目は後谿なり。

針一分留ること三呼、灸一壯三壯。

熱病 汗出ず 瘡り てんかん 耳鳴 こうひ 頸項煩はれ 鼻塞 咳嗽 吐血 肘いた
み 産後乳なきを治す。

後谿 二穴「後溪」前谷の後にあり。針一分留ること二呼、灸一壯。
治証も前谷に同じ。

陽谷 二穴 手外の側ら 小指の後 外蹠の下 腕の文の中。
灸三壯、針二分留ること三呼。

目眩 てんかん 脇いたみ 頸項腫 耳きこへず 虫牙、小兒木舌 乳を吞ざるを。
曲澤 二穴「曲沢」肘の内の横文の中にあり、曲池へは遠く 少海へはちかし

動脈の処也。灸三壯、針三分留ること七呼。

心痛 身熱し 煩 かはき 嘔血 かざぼろせ 肘腕揺 傷寒 逆氣 嘔吐し 頭を揺す
を治す。

大陵 二穴 掌の後へ 腕の横文の中 兩筋の間にあり。
灸三壯、針五分六分留ること七呼。

熱病 汗出ず 掌熱し 肘攣痛み 脇腫 心煩れ 心痛 目赤く 小便赤 嘔呃 こう
ひ 口乾き 身熱し づつう 氣みぢかく 胸脇いたみ 疥癬を治す。心胞絡の實はこれ
を瀉すべし。

外踝の上兩骨の間を握り力め指
宛より針三分留るゝ七呼灸七壯
瘡り心煩と木と好く不食心痛手肘
の掌熱目黄腸の嘔血吐血
上氣音出と健忘心積をんん治と
○前谷二穴 手小指の外側よりゆひの
本節のよりゆひの掌と握るゝ小指の
本節の前後は折目出る前のゆひめ
前谷後の折目後縁より針一分留る
ゝ三呼灸二壯三壯 枕病汗出と瘡り
てんん耳鳴とゝの頸項煩とん鼻塞
嗽吐血肘の産後乳と治と
○後縁二穴 前谷の後より針 分留
と二呼灸一壯 治証と前谷に同一

○陽谷二穴 手外側の小指の後外踝
の下腕の文の中灸三壯針二分留と
二三呼 目眩とんん腸の頸項
耳ととと虫牙小兒木舌乳と治と
○曲澤二穴 肘の内の横文の中より
曲池へ遠く少海へは動脈の処也
灸三壯針三分留とと七呼 心煩身
熱と煩と嘔血ががらる肘腕痛
傷寒逆氣嘔吐と頭と振と治と
○大陵二穴 掌の後腕の横文の中
筋の間より灸三壯針五分六分留
とと七呼 枕病汗出と掌熱と肘痛
痛と腸腫心煩と心痛目赤と小便赤
嘔吐と口乾と身熱とばつと熱

心胞絡の實をこれと治と
○中衝二穴 中指の内側より生脈
とと一分留の中針一分留と三呼
灸二壯 熱病のより手汗出と半
の中熱と身火の如く心痛手強と
治と心胞絡の虚をこれと補と
○液門二穴 手小指と無名指との間無
名指の本節の前よりゆひの掌と握りて
とと針二分留とと二呼灸三壯瘡り
ゆひの咽腫手肘の頭と目
赤と流り耳ととととと治と
○中渚二穴 手小指と無名指との間無
名指の本節の後へ隔との中より

液門のより二寸をゆひ灸三壯
針二分留とと三呼 熱病汗出と目
の頭と咽と耳ととととと目膜と
生と久瘡肘手指の屈伸と治と
治と三焦の虚をこれと補と
○陽池二穴 小指と無名指との間と
筋骨のより推上せば腕の痛
の止る処腕の中より針二分留と
六呼 禁灸消渴口乾とと肩の
の折傷と治と
○支溝二穴 直は陽池の上三寸兩骨
の間筋の中灸三壯五壯十四壯針二
分三分留とと七呼 熱病汗出とと
のら痺とととと手足拳らる瘡

中衝 二穴 手中指の内側ら 爪の生際を去こと一分 陷の中。

針一分留ること三呼、灸一壯。

熱病 いきれもたへ汗出ず 掌の中熱し 身火の如く 心痛 舌強るを治す。

心胞絡の虚はこれを補す。

液門 二穴 手小指と無名指との間 無名指の本節の前にあり 拳を握りてとる。

針二分留ること二呼、灸三壯。

瘧り むなさばぎ 咽腫 手肘いたみ 頭つう 目赤く渋り 耳きこへず 齧いたむを治す。

中渚 二穴 手小指と無名指との間 無名指の本節の後へ陷みの中、すなはち液門の

しりへ一寸ほどにあり。灸二三壯、針二分留ること三呼。

熱病汗出ず 目まひ 頭つう 咽はれ 耳きこへず 目膜を生し 久瘧 肘手指いたみ 屈伸ならざるを治す。三焦の虚これを補すべし。

陽池 二穴 小指と無名指との間を筋骨にしたがひ推上せば 腕にて指の止る処 腕

の中にあり。針二分留こと六呼、禁灸。

消渴 口乾き おこり 肩ひぢいたみ 折傷を治す。

支溝 二穴 直に陽池の上三寸 兩骨の間 陷みの中。

灸三壯五壯一四壯、針二分三分留ること七呼。

熱病汗出ず かたひぢ痺おもく 脇いたみ 手足拳らず 霍乱 嘔吐 口噤て開かず 心悶へ 心痛 傷寒 疥癬 妊婦脉通ぜず 産後血暈を治す。

天井 二穴 肘しりの尖骨の後一寸 兩筋の間、肘のつがひ 陷みの中。

針三分 あるひは一寸留ること七呼、灸三壯五壯。

心痛 咳嗽 上氣 唾に膿血まじり 不食 寒熱 卧ことならず 驚悸 てんかん 中風 耳きこへず 喉痺 目じり痛み 頬はれ 耳後肘いたみ うちみ 腰臑項頸いたみ

大風 痛む処を知ず 心わろく 脚氣を治す。

臑會 二穴 「臑会」肩の前の廉、肩の頭を下ること三寸、天井を目的にとる。

灸五壯七壯、針五分七分留ること三呼。

肘痛しびれ力なく 癭瘤をつかさとる。

腿脚の部

陰廉 二穴「陰廉」氣衝を斜に下ること二寸、股の附根。

針八分留ること七呼、灸三壯。

一切婦人の病を治す、子なき人或ひは子落やすき人は比に灸して妙なり。

「氣衝は腹の部」比より以下の十一穴は足厥陰肝經也。

五里 二穴「足五里」陰廉の下一寸、陰包を的にして点す。針六分、灸五壯。

腹中満熱して小便通ぜざるを治す。

陰包 二穴「陰包」直に曲泉の上四寸、跪坐すれば比所の肉に溝出て

膾のごとき兩筋の間。針六分、灸三壯。

腰尻より小腹へ引いたみ小便覺へず通ずるを治す。

曲泉 二穴膝をかがめて内の折目の頭ら、大筋の上小筋の下に点す。

針六分、灸三壯。

疝氣にて陰丸腫内股いたみ房事大過して泄痢女の血塊を治す。

膝関 二穴膝蓋の下に牛の鼻つらのごとく陷みあり、其下二寸に点す。

針四分、灸五壯。

膝痺れ疼み咽中痛むを治す。

中都 二穴直に蠡溝の上二寸。針三分、灸五壯。

腸下り疝氣婦人の血崩を治す。

蠡溝 二穴内踝の前の通りを踝のうへ五寸に点す。

針二分留ること三呼、灸三壯七壯。

疝氣臍の下に積氣石のごとく婦人の赤白をまじへ下すを治す。

中封 二穴足の内踝のまへ一寸、すなはち大指と次指との間の通りに

点すべし。針五分、灸三壯。

おこり寒疝腰いたみあるひは陰囊縮て腹に入相引痛を主る。

大衝 二穴「太衝」足大指の側ら本節の後へ二寸。針三分、灸三壯。

心痛小便しづり腰より小腹に引いたみ婦人の漏下を治す。

乱嘔吐口噤と開く心悶へ心痛傷寒
赤痢妊婦脉通せ産後血暈を治
○天井二穴肘よりの上骨の三寸兩
筋の間肘の下の陷の中針三分
めりひす留め七呼灸三壯五壯
心痛咳嗽上氣唾膿血より不食
寒熱用とめと驚悸より中風
耳さへと喉痺目より痛煩れ
耳後肘の下の陷と腰腹項頸の
大風痛い処と知と心より脚氣を治
○臑會二穴肩の前の廉肩の頭と下
三寸天井より月的小さる灸五壯七壯
針五分七分留ろ三呼肘痛を治
かやく瘰癧をつとめる

腿脚の部

○陰廉二穴氣衝と斜下ろし寸股
の附根針八分留ろ七呼灸三壯
一切婦人の病を治とめ人々或は子
落せと人々此灸とめ妙き
此より以下の十二穴は厥陰肝經
○五里二穴陰廉の下二寸陰包とめ
点と針六分灸五壯腹中滿熱して
小便通ぜざると治と
○陰包二穴直に曲泉の上四寸跪坐せ
て此所の肉を清出と膈の下の兩筋
間針六分灸三壯腰尻より小腹引
けと小便覺へ通せると治と
○曲泉二穴膝よりめて内の折目の頭を

大筋の上小筋の下に点を針六分
灸三壯疝氣を治陰九腹内股の
房事太過と泄痢女の血塊を治
○膝関二穴膝蓋の下に牛の鼻の
く陷とあり其下二寸に点を針四
分灸五壯膝痺と疼と咽中痛を治
○中都二穴直に盡海の上二寸針三分
灸五壯腸下り疝氣婦人の血崩を治
○蠡蓋二穴内踝の前の通り踝の上
五寸に点を針二分留ろ三呼灸三
壯七壯疝氣肘の下に積氣石の
婦人の赤白より下と治と
○中封二穴足の内踝のより一寸を
大指と次指との間の通りに点を

針五分灸三壯かとり寒疝腰の
より陰囊縮て腹より相引痛と主
○大衝二穴足大指の側ら本筋の後
二寸針三分灸三壯心痛小便を腰
より小腹引けと婦人の漏れを治
○行間二穴足大指と次指との縫の
間と二穴大指の方へへ灸針六分
灸三壯嘔吐洞泄陰莖中痛淋病
婦人經水多く下て止ざると治と
○大敦二穴足の太指の外へ灸生陰
より一寸分より針三分灸三壯五壯
七和陰莖の腫れ婦人の血崩を治
○陰谷二穴膝の折目の外に輔骨と
大骨のより下太廉大筋の下小筋の上

行間 二穴 足大指と次指との縫の間にすこし大指の方へよりめに。

針六分、灸三壯。

嘔吐 洞泄 陰莖の中痛み 淋病 婦人經水多く下て止ざるを治す。

大敦 二穴 足の大指の外側 爪生際を去こと二分ばかり。針三分、灸三壯。

五淋 七疝 陰莖いたみ 頓死 婦人の血崩を治す。

陰谷 二穴 「陰谷」 膝の折目の外に輔骨と云大骨あり、其下廉 大筋の下 小筋の上。

針四分、灸三壯。

膝いたみ 陰なへ 男は蠱脹の如く 女は妊のごとくなるを治す。

是より以下十穴 足少陰腎經なり。

築賓 二穴 内踝の上五寸、兩筋の間にあり。針三分、灸三壯五壯。

疝氣 癰かん 足の臍いたむを治す。

交信 二穴 復溜と相並び付る間に筋を隔つ、復溜は後へ 交信は前すこし上めに点

す。針四分、灸三壯。

疝氣 氣淋 陰囊はれ 婦人崩漏 陰挺出るを治す。

復溜 二穴 内踝の後への通り 踝の上二寸。針三分、灸五壯七壯。

腸鳴 痢病 鼓腸 胃熱虫を動し 涎を出し 血痔を治す。

水泉 二穴 太谿「後」にみゆ「の」下一寸ばかり内踝の後へ下。針四分、灸五壯。

目とをく見ること能はず 小便淋瀝 婦人の月水通ぜず 通ずるときは心下悶痛むを

治す。

照海 二穴 「照海」 足の内踝の前の下一寸。針三分、灸三壯七壯。

おこり 疝氣 手足力なく 陰濕りかゆく 月水とのはざるを治す。

大鐘 二穴 内踝の後へ 跟骨の上廉、跟と踝との中央に点す。

灸三壯、針二分留ること七呼。

嘔吐 ぜんそく りんびやう 舌こはり 膈噎を治す。

針四分灸三壯 膝の如く灸の如く灸を治す
是より以下十穴足太陰經より
○華蓋二穴内踝の上五寸 兩筋の間
ふわり針三分灸三壯五壯 疝氣瘰
癧足の腫の如く灸を治す
○交信二穴復溜と相並ぶ有る間が
筋の隔の復溜の後へ交信の前を
上めに灸を針四分灸三壯 疝氣瘰
癧陰囊の婦人崩漏陰挺出を治
○復溜二穴内踝の後へ通り踝の上三
寸灸三分灸五壯七壯 腸鳴病鼓脹
胃熱再動涎涎血痔を治す
○水泉二穴大髀後の下二寸より内

踝の後へ下針四分灸五壯 目赤赤く
見ると能く小便淋瀝婦人の月水
通ずる通じぬ心下悶痛を治す
○照海二穴足の内踝の前の下二寸 針
三分灸三壯七壯 疝氣手足力
弱陰濕りや月水不調を治す
○大鐘二穴内踝の後へ跟骨の上廉跟
と踝との中央の点灸三壯針二分
留と七呼嘔吐を治す
○太谿二穴足の内踝の後へ五分跟骨の
上動脈の処針三分灸三壯久瘡心
痛足冷痿喘息痰實七口中滑を
○然谷二穴足の内踝の前大指の本節

の後への側ら通ふ起骨の骨の
下の点灸三分留る三呼刺て
灸を灸と灸れ灸三壯足痿を治す
男子精泄や婦人子宮冷陰戸出
月水調を小兒の膀胱口瘻を治す
○湧泉二穴足掌の中脛坐して足
仰け指と捲屈て灸を針三分灸五壯
灸を灸と灸れ灸三壯尸厥心痛
目明を灸と灸れ灸五壯と痛む治
○箕門二穴内股の動脈の中跪坐
此処の肉起る魚腹の正其肉の上大
筋の間即ち血海の上六寸灸三壯針
淋病小便覺と通じぬを治す
此より以下十穴足太陰脾經より

○血海二穴膝頭の内廉の上二寸五分
即ち陰陵泉の通りの上より針五分
灸三壯氣逆腹脹婦人の帶下を治す
○陰陵泉二穴膝の下内側轉骨の
下陷の中足と伸て灸三壯灸五
分腹中冷や腹の脹を治す
○地機二穴膝の下五分足と伸て灸
針三分灸三壯腰の痛と泄瀉水腫
堅く小便通ずる不食女子の瘰癧
○漏谷二穴足の内踝の上六寸針二分
灸三壯腸鳴や膝痺を治す
○三陰交二穴内踝の上三寸脛骨の内
側骨と筋との間針三分灸三壯脾

太谿 二六「太溪」足の内踝の後へ五分 跟骨の上 動脈ある処。

針三分、灸三壯。

久瘡 心痛 足冷痿 喘息 痰實して口中滑るを。

然谷 二六 足の内踝の前 大指の本節の後への側に通に起骨あり その骨の下

に点す。針三分留ること三呼 刺て血を出すことなかれ、灸三壯。

足痿しびれ 男子精泄やすく、婦人子なく 陰戸出 月水調ず、小兒の臍風 口噤を

治す。

湧泉 二六 足掌の中、脆坐して足を仰け 指を捲屈て点す。

針三分五分 血を出すことなかれ、灸三壯。

尸厥 心痛 目明ならず 目眩 五指ごとく痛むを治。

箕門 二六 内股の動脈の中 跪坐れば比処の肉起て魚腹のごとし、其肉の上

大筋の間、即ち血海の上六寸。灸三壯、禁針。

淋病 小便覺ず通ずるを治す。

比より以下十一穴 足太陰脾經なり。

血海 二六 膝頭の内廉の上一寸五分、即ち陰陵泉の通りの上なり。

針五分、灸三壯。

氣逆 腹脹 婦人の帶下を主とる。

陰陵泉 二六「陰陵泉」膝の下内側ら 輔骨の下 陷なる中、足を伸てとる。

禁灸、針五分。

腹中冷 せんき 腰いたみ 水腫 小便通ぜず 淋病 陰いたむを治す。

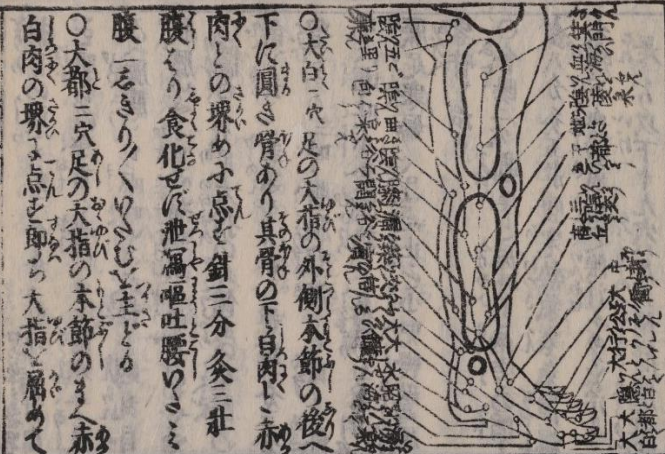
地機 二六 膝の下五分、足を伸てとる。針三分、灸三壯。

腰いたみ 溏泄 水腫はり堅くして 小便通ぜず 不食 女子の癥瘕を。

漏谷 二六 足の内踝の上六寸。針三分、灸三壯。

腸鳴 けんへき 膝痺れ 歩きがたきを。

胃虚弱心腹脹滿不食小便不通
 陰莖不舉足膝痠痛下
 痛經行時久房事不
 崩漏下血下多小便
 商三穴足の内踝の下より三寸
 張率の骨の上の折目の其折
 のより筋骨の間に点と針三分灸三壯
 腸脹狐疝上下の走り小腹を引く
 脾積舌の本強り胃脘の急痛
 婦人子宮く小兒慢驚風
 公孫二穴足の大指の本節のありす
 ところから大指の通り針四分灸三壯
 寒瘧不食頭面を引く心いさひの咽
 渴と膽虚を治す



○大指二穴足の外側本節の後へ
 下に圓さ骨のり具骨の下自肉に赤
 肉との界め点と針三分灸三壯
 腹より食化せし泄瀉嘔吐腰の
 腹一をよりへりし主と
 ○大都二穴足の大指の本節のより赤
 白肉の界め点と即ち大指の肩めて

折目の頭より針三分灸三壯熱汗出
 ぞ眼の重く骨の傷寒手足
 の胸腹に嘔吐の熱い眼目
 眩暈の胃心痛或は小兒のや治
 ○隱白二穴足の大指の外側筋の生際
 角と去し垂葉の多針一分三分
 留る三呼吸腹脹満して吐く能
 の嘔吐不食胸熱は熱い吐く
 厥足寒婦人止す小兒慢驚風
 寒瘧を治す
 ○會陽二穴龜尾の尻骨と兩旁の筋
 針八分灸五壯腹寒熱氣寒氣泄瀉
 久痔下血陽氣虚乏陰汗を治す
 是より以下十九穴は太陽膀胱經也

○承扶二穴尻の下股陰上衝文正中針
 七分灸三壯腰脊相引くの久し
 痔尻に大便く小便通せざる治
 ○殷門二穴承扶の下六寸針七分灸
 腰脊の伸屈を治す外腿腫重を
 持て瘀血の泄注を治す
 ○浮都二穴委陽の上二寸針五分灸
 三壯霍乱轉筋大小便熱を治す
 脛の外に骨不仁を治す
 ○委陽二穴承扶の下八寸膈中の
 横文の外側の頭兩筋の間針七分灸
 三壯腰脊の陰中を引く小便通せ
 てん小腹を傷寒大熱を治す
 ○委中二穴足脛の横文の中央膈多中

三陰交 二六「三陰交」内踝の上三寸、胫骨の内側骨と筋との間。

針三分、灸三壯。

脾胃虚弱 心腹脹滿 不食 小便通ぜず 陰莖いたみ 足痿 夢に精もれ 臍の下痛み
經行の時に房して羸瘦 癥瘕 崩漏 さんご血下ること多して昏暈するを。

商丘 二六足の内踝の下少しまへ、足を張挙げば跗骨の上に折目いづる 其折
めのかしら 筋骨の間に点す。針三分、灸三壯。

腸脹 狐疝上下に走り小腹に引いたみ 脾積 舌の本強り 胃脘いたみ 怠惰 卧ことを
このみ 婦人子なく 小兒慢驚風を。

公孫 二六足の太指の本節のしりへ一寸、すなはち大都の通り。針四分、灸三壯。
寒瘧 不食 頭面はれ 心いきれくるひ 咽渴き 膽虚するを治す。

【圖】

大白 二六「太白」足の太指の外側本節の後へ、下に圓き骨あり 其骨の下 白肉と
赤肉との堺めに点す。針三分、灸三壯。

腹はり 食化せず 泄瀉 嘔吐 腰いたみ 腹一しきりくいたむを主どる。

大都 二六足の太指の本節のまへ 赤白肉の堺に点す、即ち大指を屈めて折目の
頭に。針三分、灸三壯。

熱病汗出ず 眠らず 身重く 骨いたみ 傷寒 手足ひへ 胸腹みち 嘔吐 いきれ熱し
悶乱 目眩 腰いたみ 胃心痛 蚘虫 小兒おびゆるを治す。

隱白 二六足の太指の外側爪の生際の角を去こと韭菜ほど。

灸三壯、針一分三分留ること三呼。

腹脹 喘滿して卧こと能はず 嘔吐 不食 胸熱し 暴泄 はなぢ 尸厥 足寒 婦人月經
止ず、小兒慢驚風 客忤を治す。

會陽 二六「会陽」亀尾と尻骨と兩旁の陷み。針八分、灸五壯。
腹寒 熱氣 寒氣 泄瀉 久痔 下血 陽氣虚乏 陰汗しめるを治す。

是より以下十九穴は 足太陽膀胱經也。

承扶 二穴 尻の下 股陰上 衡文正中。針七分、灸三壯。

腰脊相引ていたみ 久しき痔 尻はれ 大便かたく 小便通ぜざるを治す。

殷門 二穴 承扶の下六寸。針七分、禁灸。

腰脊いたみ 伸屈ならず 外腿腫 重きを持ちて瘀血いたみ 泄注を治す。

浮郤 二穴 委陽の上一寸。針五分、灸三壯。

霍乱 轉筋 大小便熱してかたく 脛の外いたみ 髀樞不仁を治す。

委陽 二穴 承扶の下 一尺六寸、脛中の横文の外側の頭 兩筋の間。

針七分、灸三壯。

腰脊いたみ 陰中に引 小便通ぜず てんかん 小腹かたく 傷寒大熱を治す。

委中 二穴 足 脛の横文の中 中央 陷なる中。

針五分 留ること七呼 委中の大脉を刺ことなかれ、灸三壯。

腰脊膝いたみ 遺溺 小腹かたくはり 身痺れ 髀樞痛み「血を出す」傷寒 四肢熱し

熱病汗出ず「血をとる」、大風髪眉ぬけおちたる者 刺て血を出すべし。

合陽 二穴 委中の下三寸。針六分、灸五壯。

腰脊こはり 腹に引ていたみ 陰股熱 肘痠腫 寒疝 陰囊いたみ 崩漏 帶下を。

承筋 二穴 腓腸の中央の陷中 脛の後 合陽のとをり 足跟より七寸上。

灸三壯、禁針。

腰背いたみ 痙痺 腓跟いたみ 鼻血 霍乱 轉筋を治す。

承山 二穴 合陽の通り、腓の肉高 起て止る所の肉の分 陷なる中。

針七八分 氣を得て 卽瀉し はやく針を出す、灸五壯。

大便通ぜず 痔はれ 戰慄 かつけ腫いたみ 霍乱 轉筋 不食 傷寒の水結を治す。

飛揚 二穴 承山と相並ぶ 承山は 膕の中央通りの下 飛揚は 外踝の後 通り

の上、踝の上七寸に点す。灸三壯、針三分。

痔腫いたみ 體おもく 脚腓はれいたみ 目眩 目痛 てんかん 寒瘧を治す。

附陽 二六「附陽」飛揚の下四寸、外踝の上三寸、筋骨の間。

針六分留ること七呼、灸三壯五壯。

霍乱 轉筋 腰足痛 頭重く寒熱あるを治す。

崑崙 二穴 足の外踝の後へ、踝の下、跟骨の上の前め、陷なる中。

針三分五分留ること十呼、灸三壯、妊婦には禁。

腰尻足腫いたみ 頭肩背いたみ 目眩 目痛 おこり 汗多く 咳喘 はなぢ 陰腫いた

み 胞衣下らず 小兒の驚癇を治す。

僕參 二穴 崑崙の下、跟骨のわれめ、陷なる中。針三分、灸七壯。

足痿 脚氣 膝腫 轉筋 吐逆 尸厥 癲癇 狂言を治す。

申脉 二穴「申脉」外踝の下五分、陷みの中。針三分留ること七呼、灸三壯。

風眩 腰足いたみ 冷痺 勞極 癲癇ひるおこるを治す。

金門 二穴 申脉の下一寸。針一分、灸三壯。

霍乱 轉筋 尸厥 てんかん 暴疝 脚膝痛み 身戦、小兒口をはり 頭を揺かし

身反を治す。

京骨 二穴 足の外側大骨の下、小指の本節の後へ、陷みの中。

針三分留ること七呼、灸五壯七壯。

頭痛 頸項 腰背足 飭いたみ 筋牽り 目の内眥赤くただれ 白翳 目眩 瘧り

喜驚き 不食 心痛を。

束骨 二穴 足の小指の外側本節の後、赤白肉の際、陷なる中。

灸三壯、針三分留ること三呼。

腰脊脚頭項いたみ 耳聾 惡寒 目眩 身熱し 肌肉動き 目眥赤くただれ 瀉泄 痔

瘡 てんかん 癰疔を治す。

通谷 二穴 足の小指の外側ら 本節の前、陷みの中。灸三壯、針二分留ること五呼。

頭重 めまひ 項いたみ 胸滿 食化ず。

針五分留る。七呼委中の大脉、刺
し、冬三壯腰脊膝の、遺溺
小腹、身痺、脾振痛、
傷寒四肢熱、熱病汗出、
髪肩の、者刺、血出、
○合陽二穴委中の下三寸針六分灸五
壯腰脊、腹引く、陰股熱
肝痰腫寒、陰囊の、崩漏下、
○承筋二穴臍腸の中央の陷中、脛後
合陽の、足跟、上冬三壯
禁針腰背の、痺痺、
血霍乱轉筋、治と
○承山二穴合陽の通り、肉高起、
止る所の肉の分陷、中針七八分、
灸と

得て即湯、針、灸五壯
大便通、痔、
霍乱轉筋、食傷寒、水結、
○飛揚二穴承山と相並ぶ、
中央通りの下飛揚、外踝の後、
の上踝の上七寸、冬三壯針三分
痔腫の、脚端、
目眩、目痛、
○附陽二穴飛揚の下四寸、外踝の上三
寸、筋骨の間、針、
五壯霍乱轉筋、腰足、
の、
○遺尿二穴足の外踝の後、
骨の上の筋、
中針三分五分留

十呼冬三壯妊婦の禁、
頭肩背、目眩、
汗多、咳喘、
下、
○僕参二穴崑崙の下、
中針三分灸七壯、
○申脉二穴外踝の下五分、
針三分留る、
足、
○金肱二穴申脉の、
霍乱轉筋、
身戰、
○京骨二穴足の外側、
大骨の下、

本節の後、
七呼冬五壯七壯頭痛、
筋、
自、
○束骨二穴足の小指の外側、
赤白肉の隙、
留、
○通谷二穴足の小指の外側、
の、
○至陰二穴足の小指の外側、
の、

至陰 二六「至陰」足の小指の外側、爪の生際の角をさること二分。

灸三壯、針二分留ること五呼。

寒瘡 汗出ず 心煩 足下熱し 小便利せず 遺精 目いたみ翳を生じ 鼻塞り 頭重く 胸脇いたむを治。

脾関 二六「脾関」膝の上二尺二寸、跪坐すれば股の附根のすこし下に横文あり

その中に点す。針六分、灸三壯。

腰痛 足膝不仁痿しびれ 小腹咽に引いたむを治す。

比より以下十四穴は 足陽明胃經なり。

陰市 二六「陰市」膝上三寸、即三里の通り也。針三分、禁灸。

腰脚膝冷痿しびれ 寒疝 小腹いたみ 脹満 消渴を治す。

梁丘 二六陰市の下一寸 兩筋の間也。灸三壯、針三分五分。

腰脚冷痺痛を。

犢鼻 二六膝膑の下 脛骨の上陷中 即ち三里の上三寸。針六分三分、灸三壯。

脚氣 膝腫痛を治す、膝腫潰ば治せず。

三里 二六「足三里」膝眼の下三寸、脛骨の外大筋の中。

灸三壯七壯 あるひは一二百より五百壯まで、針五分八分留ること十呼 瀉すること

七吸 あるひは一寸留ること一呼。

胃中寒 心腹脹満 小腹脹堅く 腸鳴 臍氣虚し 眞氣不足し 腹いたみ 不食 心悶

心痛 逆氣上り攻 喘息 腰いたみ けんべき 四肢満 膝飭いたみ 脚氣 目明ならず

産後血暈 傷寒惡寒 熱病汗出ず 嘔吐 口苦 發熱 反折 口噤 頤腫痛み 乳癰

乳腫 こうひ 胃氣不足 久泄利 食化せず 苦飢 腹熱し 身煩 狂言 みだりにわら

ひ 恐れ怒り 霍乱 遺尿 失氣 頭眩 大小便利せず しゃくり 五勞七傷 諸病皆治

す。凡 年三十已上の人 は三里に灸せざれば氣上て目に沖しむ、又 四花膏盲

百會等に灸せば 後に三里に灸して上熱を下せ。

巨虚上廉 二穴「上巨虚」三里の下三寸。

針三分八分 氣を得て即瀉す、灸三壯七壯。

藏氣不足 偏風 脚氣 腰腿手足不仁 骨髓冷いたみ 大腸冷食化せず 飡洩 勞瘵

臍腹脇痛 腸鳴 氣上喘息 傷寒の胃熱を。

條口 二穴「条口」上廉の下二寸。針五分八分、灸三壯。

寒濕に感じ 足麻痺腫いたむを。

巨虚下廉 二穴「下巨虚」上廉の下三寸。

針六分 氣を得て即瀉す、灸三壯四十九壯まで。

中風 痿痺 熱風 冷湿 足重くいたみ こうひ 唇乾き 涎出汗出ず 毛髪こがれ

肉脱 顔色なく 傷寒 胃熱して食進ず 膿血を下し 胸脇小腹痛 驚狂 乳癰

を治。

豐隆 二穴 外踝の上八寸、下廉の傍ら一筋を隔て 跗の外廉 陷の中。

灸三壯七壯、針三分。

厥逆 大小便かたく 胸腹腿膝いたみ 風痰 づつう 四肢腫 こうひ てんかんを。

解谿 二穴「解谿」衝陽の後一寸五分 腕上の陷の中 足の次指の直上 跗上。

灸三壯、針五分留ること三呼。

頭痛 目まひ てんかん 霍乱 轉筋 面浮腫 腹脹 脚はるるを治す。

衝陽 二穴 足の跗上五寸 陷谷を去こと三寸 次指と中指との間通りを足腕の方へ

撫上せば 足跗の中ほどに指の止る処。

灸三壯、針三分留ること十呼 もし刺て血出れば死す。

中風 口眼ゆがみ 足収らず 跗腫 むしば 寒熱し 腹堅大に不食し 傷寒

振寒 狂乱を治す。

陷谷 二穴 足の次指外の間 本節の後 陷中、内庭を去こと二寸。

灸三壯、針五分留ること七呼。

面浮 水腫 腸鳴 腹いたみ 熱病汗出ず 惡寒 瘡を治す。

内庭 二穴 足次指の外間 陷みの中。灸三壯、針三分留ること十呼。

傷寒汗出ず 瘧疾 不食 赤白痢 四肢厥冷 腹はり 惡寒 咽いたみ 口ゆがみ 上齒重
くひ 皮膚いたみ 鼻衄 人の声を聞ことを惡むを。

「足三陽經穴之圖」

厲兌 二穴「厲兌」足の次指の外側ら 爪甲の角を去こと一二分。

針一分、灸一二壯。

尸厥 口噤 心腹脹滿 水腫 熱病汗出ず 寒瘧 不食 好飢 ころひ 上齒むしくひ
惡寒 鼻ふさがり 狂走 黃疸 はなぢ 口ゆがみ 面くび腫 もも膝節 跗はれいた
み 小便黄なるを治す。

環跳 二穴 髀樞「腿の外後かど」の中、病人側卧て下足を伸 上足を屈て
腿を腹へ抱き付れば 股と腰との二つに折る横文の頭ら、筋骨の解め。

灸三壯五十壯、針一寸留こと三呼。

冷風 濕痺 不仁 遍身半身遂はず 腰脚いたみ伸縮なりがたきを。

此より以下の十四穴は 足少陽膽經なり。

中瀆 二穴 環跳の下 髀の外 膝の折目の上五寸、分肉の間。

灸五壯、針五分留ること七呼。

寒に感じ髀膝痺いたむを治す。

陽関 二穴「膝陽関」陽陵泉の上三寸、犢鼻の外陷の中。針五分、禁灸。

風痺 膝痛を治す。

陽陵泉 二穴 膝の下一寸、髀の外かど 膝をかがめて外側の折目のかしらより一寸
下。灸三壯七壯より五十壯まで、針六分留ること十呼 氣を得て即ち瀉す。

膝のびて屈まず 腿ひざ冷痺 中風半身遂はず 足筋攣り 頭面はるるを治す。

陽交 二穴 外踝の上七寸、外丘の前。針六分留ること七呼、灸三壯。

胸滿 足膝いたみ 厥冷 驚狂 ころひ 面腫るを治す。

外丘 二穴 外踝の上七寸、陽交と相並 陽交は前 外丘は後へ。針三分、灸三壯。

胸滿 頭項いたみ 惡寒 犬に傷られて發熱してんかん、小兒の龜胸を治す。

光明 二穴 外丘の下二寸。灸五壯七壯、針六分留ること七呼。

虚すれば痿痺す、實すれば足跖熱し痛み 身體不仁ず。

陽輔 二穴 陽交の下三寸。針五分留こと七呼、灸三壯。

腰足冷 膝はぎ心脇頭の角 頤目皆喉 諸の節ごとくくいたみ 常の処なく痿痺

れ不仁ず 口苦く 汗出 振寒く 瘡 ころひを治す。

絶骨 二穴「懸鐘」 足外踝の真中通り 踝の上三寸、動脈の中。

針六分留こと七呼、灸三壯七壯。

心腹脹滿 胃熱して不食し 脚氣 筋骨攣いたみ 虚勞 呃逆 ころひ 泄注 頸項こは

り 痔 下血 はなぢ 鼻乾 脳疽 大小便しづり 中風 手足隨ざるを。

丘墟 二穴 足の外踝の下 骨縦の中 臨泣を去こと三寸 夾谿より五寸、踝の

骨のまへ。灸三壯、針五分留ること七呼。

胸脇みちいたみ 息することを得ず 久瘡 振寒 頸腋の下はれ 腰腿肘いたみ 轉筋

卒疝 小腹かたく 寒熱 太息するを治す。

臨泣 二穴「足臨泣」 足小指の次指の本節の後への間 陷中、夾谿を去こと一寸

五分。禁灸、針二分留こと五呼。

胸脇 脇みち支へ 振寒 心痛 周身痺痛常の處なく 厥冷 氣喘 瘡日々に

おこり 婦人月經通ぜず 乳癰を治す。

地五會 二穴「地五会」 小指の次指の外側 夾谿を去こと一寸。針一分、禁灸。

腋痛み 内損 唾血 足の外うるほひなく 乳ようを。

夾谿 二穴「俠溪」 足の小指の次指の岐骨の間 本節のまへ 陷の中。

針三分留こと三呼、灸三壯。

胸脇支滿 寒熱 傷寒 熱病汗出ず 目の外眥赤く 目眩 頰頤腫 巨髆 胸中いた

み 痛常の処なきを治。

竅陰 二穴「足竅陰」 足の小指の次指の外側 爪の生際の角を去こと二分。

灸三壯、針二分留ること二呼。

脇痛 欬逆息することを得ず 手足煩熱し汗出ず てんきん 癰疽 心いきれ 舌こは

り 口乾き 口痺 肘いたみ 耳きこへず 目いたむを治す。

秘傳の穴

患門 二穴 男は左 女は右の足の五指の頭 爪の先より足のうらを跟の下に引、それより 膈の後の横文までの寸を取て、其稗を鼻の頭より項にのぼせ 項の後に下し 稗の盡る処に脊の正中に假点を付、又 鼻下より兩の吻までの寸を取て 其稗の真中を假点にあて 兩の端に点す、これ患門の二穴なり。

さて前に点したる脊の正中の点はぬぐひ去べし。但し立ば 膈の紋あまた見て正からず、初まづ坐して横文のかしらにかりに墨を付て それを見て紋の正中までの寸をとるべし。

灸數は病人の歳のかずに一壯ましてすべし、たとへば三十歳ならば 卅一壯すべし。

虚勞 手足の心熱し 盜汗 精神くるしみ倦 骨節いたみ寒 初は咳嗽して漸く膿血を吐き 肌瘦 面黄み 食少く力とぼしきを治す。

聚英に曰く、比穴を考るに五椎の兩旁へ二寸づつ 心俞の二穴より五分づつひらく、心は血を主る故にこれを灸すと云云。

四花 四穴 稗心を三條ばかり結びつぎ、正中を大椎にあて 頸にかけ 兩の端を前に下し 鳩尾にて兩の先を截る、さて其稗心の正中を結喉へあて 後へまはし 稗の盡る処の脊の正中に假に墨を点す。別に又口の廣さの寸を唇のなりに隨ひ取て 其正中を前の假点に横に當 兩の端に点し、又その稗を豎にして正中を假点に當て 上下の端に点す。これ四花の穴なり、中の假点はぬぐひさるべし。

先患門の二穴と四花の横の二穴と合て四穴を同時に灸す、一穴に廿一壯づつ 毎日灸して、一穴に百五十二百壯に至る。其灸漸く愈んとするとき豎の二穴を灸すべし、一穴に七壯づつ 毎日灸して一穴に五十壯百壯まで、

後に三里に灸して氣を下すべし。

傳尸 勞咳 骨蒸 虛熱 元氣いまだ脱ざる先に灸すれば必ず効り。

又崔氏が四花の穴は臑俞 臑俞の四穴に合る。

聚英に曰く、血は臑俞に會す 臑は肝の府 血を藏す故に比を取る。

類經四花、崔氏四花、○かり点

腰痛 一六 病人を立て腰をみれば 兩旁にすこし陥みありて 兩眼のごとし、
是穴なり。合面に卧て、一穴に七壯か十四壯か。

勞瘵の腰痛に妙なり、勞虫あれば吐出か大便より下る。

癸亥の日 亥の時に灸すべし、故に癸亥の穴と云、俗に亥眼とも云。

風市 一六 腿の外の正中 膝の上七寸 兩筋の間なり、立て身を直にし 兩手を齊
おろし 中指の頭の盡 処 陷の中。五十壯百壯。

腰腿脛しびれいたみ 脚氣 中風を治。

騎竹馬 一六 先 長き稗にて 男は左 女は右の手の肘横文の中より 手の中指の
端までの寸を取り、病人を丸竹の上に跨げ乗せ 別に兩人して竹を持あげ 病人の
足 畳よりはなれて 背を直にして、肘より取たる稗の端を跨たる竹の際 龜尾の
所にあて 脊にそふて上に升せ稗の盡る所の脊に假点し、それより左右へ一寸づ
づ。灸十四壯廿一壯。

癰疽一切の惡瘡 ちうぶ 痛風等に妙なり。

鬼哭 一六 病人の兩手を合せ 大指を汰ならべて 紙よりにて 兩の大指を縛り、
艾を四分ばかりの大きさにして 兩の爪の角と肉と四処にあて、

灸すること七壯十四壯。

狐つき物つき 驚風 てんかんを。

斜差 一六 脊の九椎の下 左へ一寸五分、十一椎の下 右へ一寸五分。

肝俞は風邪に傷られざるため、脾俞は飲食に傷られざるため。

小兒は氣力脆して灸炷に勝かぬるゆへに四穴に灸せず、

肝は左にあり、脾は右にあるゆへに畧して二穴に点す。

鍼灸諸病の治例

中風 かぜにあてらるる

風者百病の長たり。其變化すること極なし。偏枯は、半身遂はず、

風痺は、身に痛なく四肢収らず、風懿は、昏冒して人事を知らず、

風痺は、しびれてふるふ。みな元精虚弱にして榮衛調護をうしなひ、あるひは

憂思をすごして真氣耗散じ、腠理密ずして風邪に中る。

肝風は、筋挛り手足遂はず汗出て風を惡む。心風は、發熱舌強て言ず。

脾風は、口ゆがみ言澁り肌肉不仁心いきれ心酔がごとし。

肺風は、息づかひ苦しく身緩り声かれ手足なゆる。

腎風は、腰いたみ骨節痠れ耳鳴聲にぐる。

又風、血脉に中れば、口眼ゆがむ。府に中れば、手足かなはず身節痠すく

む。臟に中れば、耳口鼻とどこほり舌強り声出がたし。

氣虚は、右の半身かなはず。血虚は、左の半身かなはず。

卒中風は、卒に倒れて發るなり、もし口開き手撒り眼合り遺尿し髮直沫を

吐き頭を揺かし直視声いびきの如汗出て玉のごとく面青きは死証なり。

神闕風池百會曲池弱風風市環跳肩髃、皆針灸して風を疎し氣を道く。

中風には此八穴を第一にもちゆ。又いづれの中風にても腹をよく候ひみるに腹に

塊あり、その塊りに針すべし。發て悩むときもこの塊に刺ば必しづまる。

針▲卒中風には、天府少商申脉人中

▲人事を知らずは、中衝大敦百會

▲口噤には、頰車風池承漿合谷

▲不仁には、魚際尺澤少海委中

灸▲百會風池大椎肩井間使曲池三里

▲人事を知らずは、中衝大敦百會

▲口噤て言語ずは、針の穴と同じ

▲不仁には、風市肘髃中渚太冲環跳三陰交

痺痛

痺はみな氣血の虚なり。榮衛しぶり、經絡通ぜざるゆへなり。

曲池 風市 しびる処に刺て血をめぐらすべし。

▲風痺は、尺澤 陽輔

▲痰痺は、膈俞

▲寒痺は、曲池 委中 風市

▲厥逆は、列缺

痿 なゆる

濕熱あり 痰あり 血虚あり 氣弱きあり 瘀血あり 腎虚あり。

内関 肩髃 曲池 風市 陽陵泉 痿る所に刺て氣をひき、血をつごかすべし。

中瀆 環跳に針して停て氣を待こと二時、三里 肺俞に灸すべし。

するゝめ小兒に氣力脱して灸柱を
 勝るゝめゆつゝ四大灸を肝に左に
 あり脾に右にありゆつゝ累々二灸点
 針灸諸病の治例

○中風 うちふう

○中國をさす

風者百病の長なり其變化多と極
み偏枯の半身遂に風非に身に痛
ましく四肢収るに風説の皆冒る人事
に如じ風痺はあひもそあひも元
精虚弱に榮衛調護をしるひ
あひの憂慮を以て真氣耗散
腰理定めて風邪に中る肝風筋
牽り手足遂に汗出く風を惡む心
風に發熱舌強く言と脾風に口喎る

言瀝り肌肉不仁心の酔ふと
 肺風の息づい苦く身緩り声れ
 手足多の腎風の腰の骨節痠
 耳鳴聲むる又風血脈の中は日眼
 多む府の中に手足多の身節痠
 と心膈の中に耳口鼻の身節
 吉強り声出づ氣虛は右の半身多
 つと血虛は左の半身多のす
 卒中風の卒に倒して發ち多かり
 口開き手撒り眼合り遺尿一髮直
 泣くは頭は痛く直視声は多の如
 汗出く玉の面青は死証多
 神蘭風池百會曲池弱風風市
 環跳肩髃背針灸く風と疎と

道く中風^{ちゆうふう}なり此^{この}穴^{あな}の第一^{だいいち}なるものス
 いまだの中風^{ちゆうふう}より腹^{はら}を候^{まち}ふるもの
 腹^{はら}は塊^{かたまり}なりその塊^{かたまり}は針^{はり}を灸^あて
 候^{まち}ふることの塊^{かたまり}は刺^さは必^{かならず}要^いる

針▲卒中風雲工府少商申脉人中

人事と知ると申衡大敦百會

▲日曛小頰車風池兼漿合谷

不仁魚際尺澤少海委中

灸百會風池大推肩井間使曲池三里

人事之知者中衝大敦百會

▲口繫て言語と云針の穴と同一

▲不仁ハ風帝射膠カウ中渚ナカ太冲タウ環跳カンテウ三陰サンイン英

○痺痛

痺^{しび}れ^れの氣血^{きけつ}の虚^{きょ}まり^{まり}采衛^{さいゑ}を^をず^ず經^{けい}

路通せり
 曲池
 風市

あひく 刺く血とあぐらふ

風痺ハ尺澤陽輔 痰痺ハ膈俞

寒痺六曲池委中風市厥逆六列缺

○瘰癧

濕熱あり 瘰癧あり 血虛あり 氣弱あり

瘀血あり腎虛あり
内関肩髃曲池

風市陽痿泉痿る所は刺て氣をのこさ

血とて中環跳を針して

寺三時重師命之冬之

○易寒并然いそいそ 必且かならず 腹飽はらみ 之これ

傷寒 癰疽 瘰癧 疔瘡 癰疽 瘰癧 疔瘡

冬月ふゆ月つき寒ふの節ふしに木き實み林りんくく拉らひひて

とあるは冬の中に病と正傷寒といふ

傷寒 并 熱病 ひへにやぶらるる

冬月 風寒に傷られ 寒 極て熱となり、すなはち冬の中に病を正傷寒といふ。

寒毒 内に藏れて 春に至て發るを温病といひ、夏に至て發るを熱病と云。

汗なきを傷寒とし、汗あるを傷風とす。

▲初め一二日、頭痛 惡かん發熱 身いたむ者は、病 足太陽の經にあり、發散すべし。

▲二三日、目疼み 鼻乾きて 眠ることを得ざるは、足陽明の經にあり、解肌すべし。これまでを病 表にありとす、汗すべし。

▲三四日、耳聾 脇いたみ 嘔して 口苦 寒熱往來「惡かんと發熱とかはるぐ」おこる「するは、病 足少陽の經にあり、これを半表半裏にありといふ、和解すべし。汗 吐下すことをいむ。

▲五六日、脉沈 咽乾き 腹みち 自利は、足太陰の經にあり。
是より裏に入とす。

▲六七日、口噤み 舌乾き 口渴き 譫語は、足少陰經にあり。

▲七八日、煩滿 囊ちぢまり 脉沈澹は、足厥陰にあり、みな下すべし。

▲汗出ず 惡寒せば、玉枕 大杼 肝俞 陶道

▲身熱 惡かんせば、後谿

▲身熱 汗出 足冷は、大都

▲身熱 づつ 食下らずは、三焦俞

▲身熱し 頭痛 汗出ずは、曲泉にとる

▲熱進退 づつ せば、神道 関元 懸顙

▲背惡寒し 口中和するは、関元に灸す

▲風を惡まば、まず風池 風府に針して、桂枝湯 葛根湯をもちゆべし

▲汗出ずは、合谷 後谿 陽池 厉兌 解谿 風池

▲身熱し 喘は、三間

▲餘熱盡ずは、曲池

▲陽明の病 下血 譫言 頭汗は、期門に刺

▲太陽少陽の并病は、肺俞肝俞。頭痛は、大推。冒悶して結胸の如なるは、大推肺俞肝俞に刺すべし。

▲煩満汗いでは、風池命門に取る

▲汗出寒熱せば、五處攢竹上腕を取る

▲煩心よく嘔せば、巨関商丘にとる

▲吐利手中熱脈至ずは、少陰太谿に灸す

▲嘔吐は半表半裏にあり、厥陰に灸五十さう

▲欬逆せば、期門に刺すべし

▲胸脇満たわことを言には、期門に刺す

▲小腹満腹痛ば、委中奪命の穴に刺す

▲腹痛み冷結久して、氣心に冲て死せば、委中に刺すべし

▲陰証小便通ぜず陰囊縮り入小腹痛て死せんとする者は、石門に灸すべし

▲六七日手足冷煩躁せば、厥陰俞に灸す

▲少陰膿血を下すは、少陰太谿に灸す

▲七八日熱さめ胸脇満譫言は、期門に刺して甘草芍薬湯、もし愈ずは隠白に刺

▲結胸は心満堅く痛む、期門肺俞に刺

▲熱病汗出ずは、商陽合谷陽谷俠谿厲兌勞宮腕骨に刺すべし

▲同熱度なく止ずは、陷谷に刺すべし

中寒 ひへにあたる

寒は天地殺厲の氣たり。虚する者これに中らるる則ば、昏冒口噤み四肢僵直し攣急いたみ惡寒あるひは發熱面赤く汗あり、あるひは熱なく頭痛なく手足冷、あるひは腹いたみ吐瀉し涎沫を吐、あるひは戦慄して面疼み衣を引倦み卧して脈遅なり。

▲氣海関元に針灸し、或は腎俞肝俞に灸す

▲昏みて人を知ずは、神闕に灸

病といふ復に至る發熱と熱病と云
 汗多くと傷寒と汗多くと傷風との
 初め十日頭痛惡寒發熱身重
 者病足太陽の經あり發散せしむ
 二三日目赤鼻乾眼重得る
 足陽明の經あり解肌せしむ
 三四日耳聾脇痛嘔吐口苦寒熱
 往來寒熱身重病足少陽の經
 あり解肌せしむ汗下せしむ
 五日脈沉咽乾腹脹自利足太
 陰の經あり是より裏へ入る
 六七日口噤舌乾日渴譫語足

少陰經にあり七八日煩滿囊下より
 脈沉満は足厥陰にありとせしむ
 汗出と惡寒と主心大行肝命閉道
 身熱惡く後熱身熱汗出足冷
 八大都身熱汗下食下二三日
 身熱頭痛汗出曲泉にあり
 熱進退とせしむ神道関元
 背惡寒口中和とあり関元と灸せしむ
 風と惡くとあり風池風府に灸せしむ
 桂枝湯を服せしむ
 汗出とあり合谷陽池及先將難
 身熱喘三間熱盡にあり
 陽明の病下血譫語頭汗にあり
 太陽少陽の并病肺命肝命頭痛

大椎肩髃と肩髃の如くは肺
 俞肝俞を刺せしむ
 肩髃汗下とあり風池命門に灸せしむ
 汗出寒熱五處攢竹一處に灸せしむ
 煩心嘔吐巨關商丘に灸せしむ
 吐利手中熱脈至る少陰入命に灸せしむ
 嘔吐六半表裏あり厥陰灸手
 救逆とあり期門を刺せしむ
 胸脇痛なりとあり期門を刺せしむ
 小腹痛腹痛を灸せしむ命門の穴を刺せしむ
 腹痛冷結久とあり氣逆とあり死せしむ
 委中を刺せしむ
 陰証小便通とあり陰囊縮り小腹痛
 死せんとする者石門と灸せしむ

六七日手足煩躁とあり厥陰命門に灸せしむ
 少陰膿血とあり少陰太谿に灸せしむ
 七八日熱とあり胸脇滿譫語にあり期門を刺せしむ
 七井草を煮湯り愈せしむ陽白を刺せしむ
 結胸心清堅痛にあり期門肺俞を刺せしむ
 熱病汗出とあり商陽合谷陽谷に灸せしむ
 厥陰勞官腕骨を刺せしむ
 同熱度とあり止とあり陽谷を刺せしむ
 ○中寒の如くは
 寒天地殺厲の氣なり虚とありこれ
 中らる則ち口鼻四肢僵直
 身重とあり惡寒の如くは發熱身重
 汗ありとあり熱とあり頭痛とあり手足
 厥ありとあり腹ありとあり吐瀉とあり

痲瘧 おりり

夏暑に感じ即病ず、秋又濕風に傷られておこる。初は惡寒發熱、づつづつして感冒のごとし。但脉弦手ふるひ發に時分あるを異なりとす。

▲合谷曲池公孫承滿大推の頭に針三本して、その針後に灸二十壯して奇効あり、又三推の上もよし。又いづれの瘡にも梁門に針して奇効あり。久しき瘡には、承滿梁門のあたりに瘡母と云て塊りあるぞ。是を針にて刺くだきて効あり。

痢病 しぶりはら

赤白ともに濕熱と作て治すべし。古へに腸癖といひ滯下といふは、みな今の痢病なり。脉滑沈小はよし、弦急は死す。もつはら血を下し屋の雨漏のごとく魚の腦髓の如なるは、皆死。

▲脾俞関元腎俞復溜長強大腸俞小腸俞中脘足三里太谿に灸すべし。おしなべて氣海水分天樞に針して奇妙なり、いづれも五分づついくたびも刺なり、ふかく刺べからず。

泄瀉 くだりはら

胃泄は、胃虚して尅化せず、黄色にて食物とろけず。脾泄は、脾虚して五藏に分散せざるゆへに、腹脹り嘔逆す。

大腸泄は、大腸に寒邪あるにより、食後に腸いたむ。

小腸泄は、小腸いたみ膿血をまじへくだして小便しげし。

大瘕泄は、裏急にしてしぶりて通じがたし、陰莖の中いたむ。

五泄の證によりて治す。

▲針関元復溜長強腹哀天樞

▲灸三里氣舎中脘大腸小腸俞脾俞腎俞、おのくゑらひもちゆべし

霍乱

霍乱は、外暑熱に感じ、内飲食生冷に傷られ、たちまち心腹疼み吐瀉發熱惡かん頭痛眩暈煩燥し手足ひへ脉沈にして死せんとす、轉筋腹に入るものは死す。又吐せず瀉せず悶乱するを乾霍乱といふ、治しがたし。

▲轉筋は卒に吐瀉して津液かはき脉とぢ筋つづまり攣り、はなはだしきはふべりちぢまき囊縮り舌卷ときは治しかたし。男は手にて其陰囊を引き、女は兩の乳を引、中へ一処に寄すべし、これ妙法なり。

▲腹脹急にいたむときは、針をまづ幽門に刺べし。此穴に刺ば、かならず吐逆するぞ。しかれども痛増て目など見つむることあり、苦しからず、さて氣海天樞に針すべし。

▲霍乱には、陰陵泉支溝尺澤承山

▲腹痛には、委中

▲吐瀉には、三里関冲

▲胸滿悶吐せずは、幽門に針すべし

傷食

傷食 しょくたたり
飲食停滯するときは、脾胃傷れて腹痛み吐瀉をなし、或は惡寒發熱づつうして傷寒のごとし。

外傷は、左の脉盛に手の背熱し鼻塞り頭の角いたみ身疼む。
内傷は、右の脉盛に手中熱し額の正中いたみ腹いたみ不食す。

▲脾俞三里に灸し、▲梁門天樞通谷中脘に針すべし。

嘔吐

嘔吐 えずき
胃虚して吐する者あり、胃寒して吐する者あり、暑に犯さるる者あり、飲食に傷られ氣結れて痰聚り、みなよく人をして嘔吐をなす。

▲針氣海風池大淵三里

▲灸胃俞三里

膈噎 翻胃 かく

憂思 勞氣より生ず。噎とは、食飲くだらずして噎る也。膈とは、喉のおくに何やらさはり吐ども出ず 呑ども下らず、痰鬱によつて氣鬱す 食をそのまま吐逆す。翻胃は、朝食する物を夕に吐し 夕に食して晨に吐するは、病ふかくして治せず。

▲天突、石関 二里 胃脘 胃脘 鬲脘 水分 氣海 臆謔 胃倉

咳逆 しゃくり

一日 咳逆「吃逆」 發呃は、氣逆 上衝して声をなす也。又 胃火上衝して逆す。口にしたがひ膈より起るは 治し易し。臍下より上るは 陰火上衝く 治しがたし。

▲期門に針し、脾脘 中脘 乳根に灸す。

喘促 ぜり、すたき

肺虚寒の喘あり、肺實熱の喘あり。水氣肺に乗じて喘し 氣滯り肺脹て喘し 氣急の喘 胃虚の喘 陰虚 氣虚 痰喘 其病を受ること同からず。

▲灸 中府 雲門 天府 華蓋 肺俞

▲針 中脘 期門 章門 肺俞

痰飲 かすはき

夫痰は、湿に屬す、津液の化する所なり。痰の患たること、喘をなし 咳をなし 嘔をなし 暈をなし、あるひは嘈雜 怔忡 驚怖し 寒熱し 痛腫れ 痞塞 壅盛 四肢不仁し 口眼瞤動 眉稜耳輪いたみかゆく 膈脇の間に聲あり。あるひは背心一点 氷のごとく冷へ 肩頂いたみ 咽にねばり付て 吐ども出ず 呑ども下らず。みな胃虚して肺を攝することあたはず。あるひは 四氣七傷に犯され 氣塞り 痰聚りて然らしむ。

▲不容 承滿 幽門 通谷 風門 膈脘 肝俞 中瀆 環跳 肺俞 三里

▲肺滿悶吐せし幽門は針を下し
 ○傷食、嘔吐、さるり
 飲食は滞り、さるり、八、脾胃傷、さるり
 腹痛、吐瀉、さるり、或ハ、寒食、さるり
 つり、傷寒の、外傷、左の
 脈盛、手の背熱、鼻壅、頭の
 般の、身寒、内傷、右の脈盛、
 手中熱、額の正中、さるり、腹の
 不食、脾、二里、灸、
 ▲梁門、天樞、通谷、中脘、針、さるり、
 ○嘔吐、さるり、
 胃虚、さるり、者、の、胃寒、さるり、
 者、の、胃、さるり、者、の、飲、さるり、
 傷ら、と、氣、結、さるり、痰、聚、さるり、さるり

人、淡、さるり、嘔吐、さるり、
 ▲針、氣海、風池、大淵、三里
 ▲灸、胃俞、三里
 ○膈噎、翻胃、さるり、
 憂思、勞、さるり、生、さるり、飲、さるり、
 さるり、さるり、噎、さるり、噎、さるり、
 何、さるり、吐、さるり、出、さるり、
 下、さるり、痰、さるり、氣、さるり、食、さるり、
 さるり、吐、さるり、翻胃、さるり、食、さるり、
 物、さるり、吐、さるり、食、さるり、晨、さるり、
 さるり、病、さるり、治、さるり、
 ▲天突、石關、三里、胃俞、胃脘、臑俞
 水分、氣海、臆膳、胃俞
 ○咳逆、一日、呃逆、さるり

發呃、氣逆、上衝、さるり、さるり、
 又、胃、火、上衝、さるり、逆、さるり、さるり、
 膈、さるり、起、さるり、治、さるり、膈、さるり、上
 さるり、陰、火、上衝、さるり、治、さるり、
 ▲期門、針、脾俞、中脘、乳根、灸、
 ○喘促、さるり、さるり、
 肺虚寒、の、喘、の、肺、實熱、の、喘、の、
 水、氣、肺、さるり、喘、さるり、氣、滯、肺、
 脹、さるり、喘、さるり、氣、急、の、喘、胃、虚、の、喘、
 虚、氣、虚、痰、喘、其、病、受、さるり、同、さるり、
 ▲灸、中府、雲門、天府、華蓋、肺俞
 ▲中、中脘、期門、章門、肺俞
 ○痰飲、さるり、さるり、
 夫、痰、ハ、濕、屬、と、津、液、の、化、さるり、所

あり、痰、の、患、さるり、喘、さるり、咳、さるり、
 嘔、さるり、暈、さるり、さるり、嘔、難、証、
 驚、怖、さるり、寒、熱、さるり、痛、腫、さるり、痰、壅、盛、
 四肢、不、仁、さるり、口、眼、瞤、動、さるり、肩、背、耳、輪、
 さるり、さるり、膈、膈、の、間、さるり、さるり、
 背、心、一、点、水、の、さるり、冷、さるり、肩、項、さるり、
 咽、さるり、さるり、付、て、吐、さるり、出、さるり、
 下、さるり、さるり、胃、虚、さるり、肺、さるり、
 さるり、さるり、さるり、四、氣、七、傷、さるり、
 氣、塞、り、痰、聚、り、さるり、然、さるり、
 ▲不容、承、滿、幽、門、通、谷、風、門、膈、俞
 肝、俞、中、瀆、蠡、臑、肺、俞、二、里
 ○咳嗽、さるり、さるり、さるり、
 咳、の、聲、あり、と、痰、あり、肺、氣、あり、と

咳嗽（がいそう） しはぶき せき たぐる

咳は聲ありて痰なし、肺氣やぶれて涼しからず。嗽は痰ありて声なし、脾濕その痰を動するゆへなり。あるひは風寒濕熱の邪に感じ、あるひは陰虛火動によつて労咳をなし、水うかれて痰となり、みなよく咳嗽せしむ。

肺俞 肩井 少商 然谷 肝俞 期門 行間 廉泉に灸し、すべて不容 梁門に針す。

▲肺咳は手太淵

▲脾咳は足太白

▲腎咳は足太谿

▲多く眠るには三里

▲面赤く熱咳には支溝

諸氣

氣の脉は沈なり

經に曰、百病は氣より生ず。

喜で心を傷るときは、其氣散じ 腎氣乗ず。

怒て肝を傷るときは、其氣のぼり 肺氣乗ず。

憂て肺を傷るときは、その氣聚り 心氣乗ず。

思て脾を傷るときは、其氣結れ 肝氣乗ず。

恐て腎を傷るときは、其氣怯く 脾氣乗ず。

暑き則は氣泄、寒ずるときは氣おさまる。

もし恬憺虚無 精神内に守れば、病何によつてか生せむ。

▲灸 肺俞 神堂 膈俞 肝俞 三里

▲針 承滿 梁門に刺べし

鬱證

氣血通和すれば百病生ぜず。一つも結聚するときは六鬱となる。

氣鬱は、腹脇脹滿刺ごとく痛みて舒ず 脉沈也。

血鬱は、大小便紅に紫血を吐きいたみ處を移ず 脉數濇なり。

食鬱は、噯氣吞酸胸腹飽悶いたみ 不食右脉盛なり。

痰鬱は、喘滿氣急痰嗽胸脇いたみ 脉滑なり。

熱鬱は、小便赤く澀り五心熱し口苦く舌乾き 脉數なり。

濕鬱は、身節走いたみ 陰雨に遇へば發り 脉濡なり。

▲膏肓 神道 肝俞 不容 梁門

癆瘵 きのかた

癆瘵の證、ただ一端にあらず、氣體虛弱し心腎を勞傷してこれを得たり。

心は血を主り、腎は精を主る。精血かはき相火たかぶりて、咳嗽吐血遺精

盜汗惡かん發熱五心煩熱食少く羸れ瘦日晡にはなはだし。

此證、勞重ありて骨をくらひ、相傳て親類を滅すを傳戸と云。

▲梁門をめぐりて幾度も刺す

▲患門 四花膏肓 章門 氣海 三里に灸

吐血并衄血 欬血 唾血 咯血

陽盛にして陰虛するゆへに血下に行ず 炎上して口鼻より出るなり。或は一椀ばかり吐て別にわづらひなきは、腹中の宛血あるなり ふし熱の傷たるなり、くるしからず。吐血は胃より出ず 全く血を吐く。先痰を吐て後に血を吐は積熱なり。先血を吐て後痰をはくは陰虛なり、治しがたし。衄血 欬血は肺より出、唾血 咯血は腎より出ずる。

▲曲澤 神門 魚際

▲嘔血は、大淵 長強

▲吐血は、前谷 上腕 丹田 隱白 脾俞 肝俞

▲衄血は、諶諶 二間 三間 風府 委中 合谷

▲欬血は、肝俞 大淵

▲唾血は、肝俞

下血 ちをくだす

風寒濕熱 臟腑に入て腸胃をやぶり 血を大腸に引て 下血をなす。

▲腎俞 氣海 陽関 関元 三陰交 絶骨。

虚損 よはみ

凡 元氣素より弱く 或は起居宜きを失ひ あるひは飲食勞倦し、

心を用こと太過によつて眞氣を損じ、形體やせ 眼かすみ 齒動き 髪落 耳鳴とをく 腰膝力なく 小便しげく 汗多出、あるひは遺精 白濁 内熱 晡熱 口乾

き咽渴き 心神寧からず 寤て寐られず 小便短少餘瀝 肢體寒をおそれ 鼻氣急促

眩暈 健忘 四肢倦怠等の証を顕す。

▲灸 肺俞 肝俞 脾俞 腎俞 三里 膏肓

▲針 梁門と中脘といくたびも刺すべし

汗あせ

發散はつさんによらずして自おのづから出るを自汗じかんといふ、陽虛ようきょなり。

睡中ねいちゆうにおぼへず汗出あせいじるを盗汗とうかんといふ、陰虛いんきょなり。

▲盗汗とうかんには腎俞じんゆ、自汗じかんには脾俞ひのゆ 肺俞はいゆに灸きゆうすべし

▲合谷くわく 曲池きよくち 湧泉ゆうせん 然谷ぜんこくに刺はすべし

諸熱しよねつ

▲五藏ござうの熱證ねつしやう

肺熱はいねつすれば、皮毛熱かわけねつし 喘咳寒熱ぜんがいかんねつす。

心熱しんねつすれば、脉熱みやくねつし 煩熱いきれねつ 心痛しんつうし 手の中熱てのうちのねつす。

脾熱ひねつすれば、肌肉熱はだえにくねつし 夜はなはだしく怠惰かいだろくして四肢收てあしおさまうず。

肝熱かんねつは、筋熱すじねつし 寅卯とらうの刻こくはなはだし 脉弦みやくげんにして多く怒おほり 手足熱てあしねつして筋すじなゆる。

腎熱じんねつすれば、骨髓熱こつすいねつし 骨の中ほねのなかを垂むしくらふ 起おきて居いられず。

▲諸經しよけいの熱證ねつしやう 面熱かおねつするは足陽明あしのようめい、口熱くちねつし 舌乾したかわくは足少陰あしのしょういん、耳みみの前熱まえねつするは手

太陽たいよう、掌熱てのうらねつするは手三陰てのさんいん、足の下熱あしたのねつしたむは足少陰あしのしょういん、身熱みねつし 肌はだえいたむは手

少陰しょういん、洒淅さいしやくとして寒熱かんねつせば手太陰てのたいいん、中熱ちゆうねつし 喘ぜんするは足少陰あしのしょういん、身みの前熱まえねつす

るは足陽明あしのようめい、一身熱いっしんねつし 狂乱きやうらんし 讒言たわごとは足陽明あしのようめい、肩背足かたせなあしの小指こゆびの外熱そとねつするは足

太陽たいよう、肩かたの上熱うえねつするは手太陽てのたいよう也。

▲晝熱ひるねつするは熱陽分ねつようぶんにあり、夜發よるおこるは熱陰分ねついんぶんにあり、晝夜ひるよる同おなじく熱ねつするは熱血ねつけつ

室しつに入り 重陽無陰じゆうむいんなり、陰いんをおぎなひ陽ようを瀉しやすべし。

▲梁門りやうもん 羨滿せんまん 天樞てんすう 氣海きかい 針はりいくたびも刺さてよし、又また尺澤しゃくたく 委中いちちゆうより血ちをとる。

▲曲澤神門 魚際 嘔血ハ大淵長強
 ▲吐血前谷 上腕丹田隱白脾俞肝俞
 ▲鍼灸諸論 二間三間風府委中合谷
 ▲救血肝俞大淵 唾血肝俞
 ○下血 引く下血
 風寒濕熱臟腑久へく腸胃より
 血大腸より引く下血より
 ▲腎俞氣海陽關元三陰交絶骨
 ○虚損
 凡元氣素より弱く或は起居宜し
 失ひあつた飲食勞倦一に用と
 太過にうへて真氣損じ形體を
 眼も齒動も髪落耳鳴も腰
 膝力多く小便をひく汗多出る

遺精白濁内熱肺熱口乾咽渴
 心神驚悸多寐寐中驚悸小便
 短少餘瀝肢體寒多それ氣志
 促眩暈健忘四肢倦怠等の証を
 ▲肺俞肝俞脾俞腎俞三焦俞
 ▲針深門と腕との二つを刺す
 ○汗
 發散の多きもの自汗出る自汗
 の陽虛多し睡中驚悸を汗出る
 陰虛多し盗汗を汗出る
 自汗を脾俞肺俞灸す
 ▲合谷曲池湧泉灸す刺す
 ○諸熱
 五藏の熱證肺熱を皮膚毛熱

嘔吐寒熱心熱を脈熱
 煩熱心痛手の中熱を脾熱を
 心肉熱を夜多き事を心驚悸
 四肢収む肝熱を熱熱を寅卯の
 刻に多き脈強多き怒り手
 足熱を驚悸の腎熱を骨熱
 熱骨の中より起る居れど
 諸經の熱證面熱を足陽明口熱
 舌乾を足少陰耳の前熱を
 手太陽掌熱を手足少陰足の下
 熱を足少陰足少陰身熱を肌を
 手少陰洒淅を寒熱を手足少陰
 中熱を喘を足少陰身熱を
 足陽明一身熱を在乱證を足

陽明肩背足小指の外熱を
 足太陽肩の上熱を手足太陽也
 熱熱を熱陽分を夜多き
 熱陰分を晝夜同熱を
 熱血室に入り重陽無陰を
 多き陽を漏す
 ▲梁門天樞氣海灸す
 刺す又入澤中血を
 ○健忘怔忡驚悸
 精神短少を多き事を健忘
 怔忡を多き事を驚悸を
 心怔忡を心中惕々を跳動を驚
 悸を驚悸を驚悸を驚悸を

健忘 怔忡 驚悸

精神短少なる者、心をもちゆることを過し 恍 惚 として 多く事を忘るるを健忘といふ。

怔忡は、心中 惕々として跳動す。

驚悸は、驚怖して寧からず 人の捕んとするがごとし。みな心脾の虚損なり。或は痰、心竅に迷て事をわする者あり。

▲灸 膈俞 肝俞 肺俞 脾俞 腎俞

▲針 神門 大陵 巨闕 上皖 三里

眩暈 かしらくるめき めくるめく

諸の眩暈は、みな肝に屬す。風邪上り攻痰雍りて眩暈をなしあるひは氣虚失血あるひは陰虚火動、みなよく此証をなす。風眩は脉浮にして汗あり、痰は脉弦にして滑なり。

▲針 上星 風池 天柱 臨泣 風府 陽谷 中渚 梁門

▲灸 上星 額會 前頂 百會 風門 厥陰

中惡 あしきものにあてらる

中惡とは、人の精神衰へ弱して、鬼邪の氣 卒に中るゆへなり。其かたち 卒然として胸腹刺ごとく痛み、悶乱して死す。あるひは吐血するもあり。

▲先 幽門 百會 関元 氣海に灸し、安息香を豆粒ほど火に入煙を吞すべし

癲癇 くるち

癲癇は、元母の胎内に在りて驚を受く。五種あつて五藏に應ずといへども、心の一藏に歸す。驚ときは神舎を守らず、舎空き則ば痰涎心竅に迷ひふさぎたましぬ出入せざるによりて卒に倒卧て手足びくめかし口眼引つり、あるひはさけびよばはり沫を吐く、暫にしてよみがへる。

▲針 大推 水溝 百會 神門 金門 巨闕 崑崙 筋縮 湧泉

▲灸 百會 鳩尾 上脘 陽蹻「ひるおこる」陰蹻「よるおこる」

狂乱 きちがひ

狂は、くるひみだれて正く定ならざる也。あるひは痰火實盛あるひは心血不足にして、憂驚によつて志をうしなひ此証をなす。喜で笑は心火盛なる也。

▲針 尺澤 間使 天井 百會 神門 中脘

▲灸 承山 風池 曲池 尺澤 神門 上脘

諸虫 もろくのむし

虫は濕熱より生ず、腐草虫となるがごとし。其証、饕餮、腹痛、涎沫を嘔吐し、面の色痿黄、眼眶鼻の下青黒く、食少く、色黒く、瘦、あるひは寒熱咳嗽せしむ。

九虫は、一に伏虫、ながさ四寸、諸虫の長なり。

二に蛔虫、長さ一尺、動ときは清水を吐き出るときは心痛す、もし心をつらぬくと、きんば人を殺す。

三に寸白虫、長さ一寸、動ときは腹痛、腫聚り、清水を吐き、上下り、おこりぎめあり、心を傷るときは死す。

四に肉虫、ただれたる杏のごとし、人を煩満せしむ。

五に肺虫、蚕のごとし、人をして咳嗽せしむ。

六に胃虫、かわづに似たり、吐逆、噦をする。

七に弱虫、爪のなかのごとし、多く唾を吐く。

八に赤虫、生の肉のごとし、腸を鳴しむ。

九に蟯虫、細にして菜虫のごとし、疥癬、痔、瘍、瘡を生ず。

千金方に曰く、五臓勞するときは熱を生ず、熱するときは虫を生ず。

心虫を蛭と云、脾虫を寸白と云、肺虫はかいのごとし、肝虫は李のことし、腎虫は寸々に切たる線のごとし。

三虫は長虫、赤虫、蟯虫なり。諸虫みな、上半日は頭を上、下半日は頭を下にむかふ。

「又子のときより辰のときまでは、かしらを上にむかふといへり」

凡そ諸虫を治するに、寒熱虚實を察し、脉をわきまへ、つまびらかにして針を行ふべし。

▲三陰交、三里、内関、陰谷、行間、太白、復溜、氣海、脾俞、梁門、天樞、滑肉門

虫の發りたる時、痛みの上に刺すべからず、まづ足の穴にて氣を下すべし。

諸虫は、みな氣血のあつまり、邪氣に感じ、その時節の氣に應じて色々のかたちをなす。氣を引下すときは、虫おのづから治す。

積聚 はらのかたまり

肝の積を肥氣といふ、左の脇にあり、面青く、兩わきいたみ、小腹に引。心の積を伏梁といふ、臍の上におこり、胸の中に横たへ、腹熱し、面赤く、胸いきれ、咽かはき、不食し、やせて吐血す。

脾の積を痞氣といふ、臍の真中のとをりにあり、面の色黄にして、飢るときはかくれ飽ときはあらはる、常に腸ふくれ、足はれ、泄瀉、嘔吐し、瘦おとろふ。

肺の積を息賁といふ、右の脇にあり、面白、背いたみ、膚冷、皮の中時にいたみ、虫のはぶがごとく。

腎の積を奔豚といふ、小腹にあり、おこるときは胸にのぼり、面黒く、飢るときはあらはれ、飽ときはかくる、腰いたみ、骨ひる、目くらく、口かわく。

積に腹痛あり、痛まずして塊ありて不食するもあり、或は咳逆、咳嗽、短氣、心痛をなす。腹痛するときは、猥に痛処に刺べからず。まづ積ある処をよくおし、やわらげ、其後、いたむ処より一二寸ばかりわきに針すべし。

若痛みつよきとき、むさといたみのうへに刺せば、かへつて痛みまし、人を害すこと多し。積にかまはず、わきをやわらげて、氣を快くするときは、おのづから治す。

▲三里 陰谷 解谿 肺俞 膈俞 脾俞 三焦俞 期門 章門 中脘 氣海 関元

黄疸

五疸の分ありといへとも、皆これ脾胃、水穀、濕熱、相蒸ゆへに黄を發する也。

胸腹飽悶、身面目みな黄、小便黄、汗の衣を染ること、黄柏の汁のごとし、たとへば麴のごとし。濕と熱とたたかひ、氣ととのをらざれば、鬱して疸となる。

▲針 承滿 梁門にいくたびも刺すべし

▲灸 天樞 水分 氣海 膈俞 肝俞 膽俞 脾俞 腎俞 胃俞に灸すべし

生じ熱をくくたの虫を生じ
心虫と蛇と云脾虫とす白三肺虫
のこのに肝虫の季のに腎虫はす
小蛇のの線の一三虫の長虫赤虫
蛇虫より諸虫の上半日へ頭上
こひつゝ子の子のり腹のり
心諸虫と治とる小寒熱重實と
寒一脈と一脈のり
針と行と一三張交三里内関
陰谷行間太白復溜氣海脾俞
新天樞滑肉門
虫の發りるを痛の上の刺と
べつとすの足の穴を氣と下と
諸虫の氣血のあり邪氣は

感トその時節の氣に應トて色々
のくくたの氣と引下とるに虫
かのつゝ治と
○積聚とるのり
肝の積と肥氣とる左の脇のり面
青く兩とるのり小腹は引心の
積と伏梁とるのり膈の上かこの
中に横とるのり腹熱一面赤く胸のり
咽のり不食とるのり吐血とるのり
積と痞氣とるのり小腸の真中のり
よりの面の色黄とるのり飢とるのり
かかれ飽とるのり常の腸のり
足とるのり泄瀉嘔吐とるのり
の積と息責とるのり脇のり面白

背のり膚冷皮の中時とるのり
却のりくくたの腎の積と奔豚と
のり小腹のりかこるのり胸のり
のり面黒く飢とるのりかかれ
飽とるのりかかれ胸のり
目くく口のり
積と腹痛のり痛とるのり塊のり
て不食とるのり或のり咳逆喘
短氣心痛とるのり腹痛とるのり
痛處とるのり刺とるのり積とるのり
くくたのり其後のりくくたのり
二三のりくくたのり針とるのり若痛と
つれとるのりくくたのりくくたのり
くくたのりくくたのり人々害と

多し積とるのりくくたのりくくたのり
氣と快くくたのりくくたのり治と
▲三里陰谷解谿肺俞膈俞脾俞
三焦俞期門章門中皖氣海関元
○黄疸
五疸の分ありくくたのり皆れ脾胃
水穀濕熱相蒸とるのり黄とるのり
胸腹飽悶身面目のり黄小便黄澀
汗の衣とるのり黄柏の汁のり
くくたのりくくたのり濕とるのり
氣とるのりくくたのり鬱とるのり
▲針承滿梁門のりくくたのり刺とるのり
▲灸天樞水分氣海膈俞肝俞膽俞
脾俞腎俞胃俞は灸とるのり

水腫 はれやまひ

内經に曰く、水腫その本は腎にあり、そのすゑは肺にあり、みな水のつもりなり。

故に水病は、下腫れ腹大きに、上喘急をなし臥ことを得ず。

先腹よりはれ後に手足はるるは治すべし。まづ手足より腫れ後に腹はるるは治せず。もし肉かたく掌たいらかなるは治せず。

▲灸 臍俞 肝俞 膽俞 脾俞 腎俞 通谷 石関 水分 天樞 氣海

▲針 胃倉 合谷 石門 水溝 三里 復溜 四滿 曲泉

▲渾身浮腫は、曲池 合谷 三里 内庭 行間 三陰交

▲水腫は、列缺 腕骨 間使 陽陵 陰谷 解谿 公孫 厲兌 冲陽 陰陵 胃俞

▲四支浮腫ば、曲池 合谷 中渚 液門 三里 三陰交

▲風腫 身浮ば、解谿

▲遍身腫滿 飲食化せずは、腎俞 百壯 即瘥

脹滿 かめばら

腎を水とし、脾土を堤とす。故に脾腎虚するときには腫脹をなす。遍身はるるを

水腫とし、腹ばかり大にして鼓のごとく、面目手足腫ざるを脹滿といひ、蠱脹と

もいふ。脉洪大はよし、微細はわるし。

▲針 上腕 三里 章門 陰谷 関元 期門 行間 脾俞 懸鐘 承滿 復溜

▲灸 三里 章門 脾俞 承滿。

▲水脹 脇滿ば、陰陵泉

▲水分に刺を禁ず

消渴 かはきのやまい

上消は、邪熱肺を燥して、多く水を飲食すくなく大小便つねのごとし。
中消は、胃熱し脾陰虚す、飲食ともに多く小便赤し。

下消は、腎虚し水乾く、多水をのみ小便膏の如にしてしがる。

▲水溝 承漿 金津 玉液 曲池 太冲 行间 勞宮 商丘 然谷 隱白

▲灸 腎俞 中脘 意舍 小腸 膀胱 関元

▲針 中脘 意舍 照海 曲池 曲骨

淋病 小便閉

淋は、小便しづり痛むなり。熱膀胱に客とし、爵結して滲泄すること能はざるがゆへに淋をなす。五種あり。

熱淋は、小便赤くしづり痛みはなはだし。

沙石淋は、莖中いたみ努力ときは沙石のごとし。

氣淋は、小便しづりいたみつねに餘瀝ありて盡ず。

血淋は、尿血結熱して莖痛をなす。膏淋は、尿膏に似たり。

勞淋は、勞倦すればすなはち發る。又色欲すでにぎざして強留て泄さず、小便急に乘じて溺を忍ゆれば多く淋を致す。

▲針 関元 夾溪 三陰交

▲灸 腎俞 膀胱 小腸 中脘 三陰交、炒塩を臍中に填満て大艾炷七壯すべし

▲陰寒 甚して小便通ぜず 陰囊縮入 小腹痛み 死せんとするには、石門に灸す

○水腫
 内經曰、水腫、その利ハ腎にあり、そのとあるハ肺にあり、水、そのつりあり、故に水病ハ下腫、腹大、上喘急、と云、即ち得て先腹よりこれ後、手足より治む、治む、手足より腫、腹より治む、治む、肉より掌より治む、治む、
 ▲灸 臍俞 肝俞 膽俞 脾俞 腎俞
 通谷 石関 水分 天樞 氣海
 ▲針 胃倉 合谷 石門 水溝 三里 復溜 四滿 曲泉
 ▲渾身浮腫ハ曲池合谷三里内庭行間三陰交水腫ハ列缺腕骨間使陽陵

陽令解谿公孫厲兌冲陽陰陵胃俞
 ▲四支浮腫ハ曲池合谷中渚液門三里
 ▲三陰交風腫身浮ハ解谿遍身腫滿飲食化せハ腎俞百壯即痊
 ○張滿
 腎とオ、脾と堤、故に脾腎虛と云、ハ腫脹と云、遍身と云、水腫と云、腹より大、或の面、手足腫、腹滿、の、蠱脹、の、脈洪大ハ微細、ハ針上腕三章門陰谷関元期門行間脾俞懸鐘承滿復溜
 ▲灸 三章門 脾俞 承滿
 ▲水腫脇滿ハ陰陵泉水分に利、

○消渴
 上消ハ邪熱肺と燥、多、水、飲、食、の、大小便、の、中消ハ胃熱、脾陰虛と飲食、の、多、小便赤、下消ハ腎虛、水乾、多、水、の、小便、の、如、の、
 ▲水溝 承漿 金津 玉液 曲池 太冲
 行間 勞宮 商丘 然谷 隱白
 ▲灸 腎俞 中脘 意舍 小腸 膀胱 關元
 身中皆意舍照海曲池曲骨
 ○淋病 小便閉
 淋ハ小便を痛む、熱、
 ▲骨結と滲泄とあり、
 ▲五種あり、熱、

ハ小便赤く、痛む、
 石淋ハ莖中の、
 氣淋ハ小便を痛む、
 餘瀝ありて盡ど血淋ハ尿血結熱して華痛と云、膏淋ハ尿膏は似たり、受淋ハ勞倦とれど、
 又色欲と云、
 小便急に棄て濁と云、
 多く淋と致す
 ▲針 関元 夾溪 三陰交
 ▲灸 腎俞 膀胱 小腸 中脘 三陰交
 炒塩と臍中に填滿て大炷七壯、
 陰寒甚て小便通じずハ陰囊縮入小腹痛、死、
 ▲

溺濁 いぼりじぼる

赤濁は血に屬す、思慮を過し心虚して熱するなり。

白濁は氣に屬す、房勞をすごし腎虚して寒するなり。

▲腎俞 氣海 関元 脾俞 三里 三陰交

遺溺 いぼりたれ

凡そ遺尿は、小腸 膀胱の陽氣衰へ脱するゆへなり。經に曰く、膀胱利せざれば癰をなす、約せざれば遺をなす。又曰く、下焦に血をたくはへ虚勞し内損すれば小便おのづから遺て知す。下焦虚寒し水液を溫制することあたはざれば、小便たへずながれいづる。

▲腎俞 氣海 小腸俞 絶骨 三里 関元

遺精 もうざうをみる

夜夢に人と交り感じて精を泄すを夢遺といふ。夢に因ずして精おのづから出るを精滑といふ。心腎内虚に因て固く守ることあたはず、みな相火動するゆへなり。又久しく交合せず精満て溢るものは病にあらず。

▲灸 脾俞 肺俞 腎俞 氣海 三里

▲針 関元 曲泉 然谷 大赫 三陰交

秘結 だいべんつうぜず

風秘は、風痰 大腸に結して通ぜず、風を發散すべし

氣秘は、氣とどこをり後 重せまりいたみ煩悶 張満す、氣をめぐらすべし

寒秘は、腹冷 痙癖 結滯す、溫補すべし

虚秘は、津液虚し血少くしてかわき渋る、潤し滑にすべし

熱秘は、實熱 氣ふさがり心満 腹脹り煩渴す、熱をすずしくすべし

▲灸 肝俞 膽俞 腎俞 大腸俞 関元

▲針 天樞 滑肉門 石門 陰交 養山

痔漏 いぼぢ あなぢ

尻の穴に瘡を生じて傷れず、あるひは傷ても少にして愈やすきを痔と云。瘡潰て竅を作し膿血出て愈がたきを漏といふ。

痔に六種あり。

牡痔は、肛門の邊に肉珠を生じて鼠の奶のごとくにて、うみ血を出す。

牝痔は、瘡を生じ、腫いたみ四五日にうみ潰て即ち散る。

脉痔は、尻の凹につぶくと生じ、いたみかゆく膿血を出す。

腸痔は、肛門の中に結核を生じ、血を出し寒熱往來し溷に行ごとに脱肛をなす。

血痔は、大便に清血を下すこと止す。

酒痔は、酒をのむごとに瘡出、血をながす。

▲灸 百會 氣海 腎俞 大腸俞 長強 膀胱俞 三陰交

▲針 秩邊 委中 陽輔

▲血痔には、羨山復溜

▲腫痛には、飛陽

▲漏 には、長強 商丘 承扶

脱肛

肛門の翻出するなり。肛は大腸の門なり、大腸は肺の府なるによつて、肺實すれば秘結し肺虚寒すれば脱出す。又經に曰く、腎は穴を二陰にひらくと。

故に腎虚する者、多く此症あり。

▲命門俞 腎俞 長強 百會 膀胱に灸

○溺濁 いじりある
 赤濁ハ血ヲ屬シ思慮ヲ過シ心虛
 一ノ熱散るガリ白濁ハ氣に屬シ房
 勞ヲ多クシ腎虛シ寒シガリ
 腎俞氣海関元脾俞三里三陰交
 ○遺溺 いじりある
 凡そ遺尿ハ小腸膀胱の陽氣衰ハ脱
 下ルヤアリ經ハ白ク膀胱利セザレ
 瘻ノ多ク約ミタレト遺シ又腎
 下焦ハ血トシ久ク虚勞ハ内損シレ
 小便ホノベリ遺テ知テ下焦虚寒
 水液ヲ温制セタカハハハハハハ
 便シタカハハハハハハハハハハハ
 腎俞氣海小腸俞絶骨三里関元

○遺精 りうじやうとせう
 夜夢ホ人ト交リ感トテ精ヲ泄シ
 夢遺トシ夢ハ因ジテ精ホの
 つツ出る精滑トシ心腎内虚ハ
 因ト固ク守ルコトホハハハハハハ
 動シタカハハハハハハハハハハハ
 満ク溢ルハ病ホハハハハハハハ
 ▲灸 脾俞肺俞腎俞氣海三里
 ▲針 関元曲泉然谷大赫三陰交
 ○秘結 いべんつせき
 風秘ハ風痰大腸ヲ結シて通ゼズ
 風ト發散シテ氣秘ハ氣ニ依リ
 後重セリハハハハハハハハハハハ
 与ハハハハハハハハハハハハハハハ

滯ト温補シテ虚熱ハ津液虚
 血少トシハハハハハハハハハハハ
 下熱秘ハ實熱氣ホハハハハハハ
 脹リ煩渴トシハハハハハハハハハ
 灸 肝俞膽俞腎俞大腸俞関元
 針 天樞滑肉門石門陰交秉山
 ○痔漏 いがらやから
 尻の疔ハ瘡ト生シテ傷ミハハハ
 ハハハハハハハハハハハハハハハ
 瘻潰ハ瘻ト作リ膿血出テ愈ガ
 シ漏トシ痔ハ六種ホリ壯痔ハ肛
 門の邊ハ肉珠ト生シテ瘻の如ク
 クハハハハハハハハハハハハハハ
 下腫ハハハハハハハハハハハハハ

散ル脉痔ハ尻の四ホハハハハハ
 ハハハハハハハハハハハハハハハ
 ハハハハハハハハハハハハハハハ
 往來ハハハハハハハハハハハハハ
 痔ハ大便ハ清血ト下シテ止テ酒
 ハ酒トシハハハハハハハハハハハ
 ▲灸 百會氣海腎俞大腸俞長強
 膀胱俞三陰交
 ▲針 秩邊委中陽輔血痔ハ秉山
 復溜腫痛ハ陰陽ハ漏ハハハハ
 商丘秉扶
 ○脱肛
 肛門の翻出シタカハハハハハハ
 あり大腸ハ肺の府ホハハハハハ

頭痛 かしらいたむ

頭は、諸陽經の首也。風寒の頭痛は鼻塞り惡かん發熱す、湿は頭重し、食滯は額の正中いたむ。左邊痛は氣虛右は血虛夜痛み苦し、眉輪骨いたむは痰火なり。

眞頭痛は、腦顛の底にとり痛みはなはだしく手足冷、臂とひざより上までひへ上るは半日に死す。

▲百會、風池、風府、合谷、攢竹、曲池、腕骨、京骨、合骨、衝陽、風市、三里

▲頭重く鼻塞るには、百會に刺すべし。

▲目眩き頭のかわ腫には、前頂に刺す。

▲項強り惡寒せば、後頂に針すべし。

痲痺

肩の痛むこと、或は痰により或は風寒濕によるといへども、多くは氣血つかへたるゆへなり。此處に刺こと秘傳あり。まづ手にて肩を押ひねり撫くだし、氣を開かせて後に刺すべし。

深きときはあやまちあり、若みだりに刺ときは人を害す。これを刺には、針をふして皮肉の間をとをすべし、少も肉を刺ことなかれ。

肩背には撚針を用べからず、砭針をもちゆべし。管に入てはぢき下し、皮をやぶりにて氣血をぬく、その効速なり。針を刺たるあとを又管にて推べし。かならず血出て邪氣さるなり。

上古には石の尖にて痛痺る處を刺し、脉をやぶり邪をさる。鍼經に、砭石をもつて膿血を出すとあり。

手指 てのゆび

手の痛は痰により風濕による。老人は氣血衰弱して、肢をやしなはざるゆへなり。かいなの骨節ふとり大にして節間ほそくなり、指も亦かくの如なるは、痰と血の不足なり。

▲曲池 手三里 肩髃 列缺 尺澤

心痛 しんつう むねいたみ

心痛に九種あり、虫痛 疰痛 風痛 悸痛 食痛 飲痛 寒痛 熱痛 去來痛也。

厥心痛は、寒邪心包絡に客たり。真心痛は、寒邪心の藏を傷る、痛みはなはだしく手足青くして臂膝を過るは、半日に死す。

▲胸の中 刺がごとくいたみ 手足ひへ 唇青く 脉沈なるに、太谿に刺してよし

▲胸中 満ふくれいきどをしく 缺盆より引つり痛み死せんとするには、行間尺澤に刺してよし

▲胸つよくいたみ 死せんとするには、然谷 湧泉に刺す

▲神門 健里 大都 太白 中腕に撰刺

▲灸は、厲兌 鬲兪 肺兪 太谿 中腕 下腕 三里

それ秘結し肺虚寒をば脱出
を又經一日腎ハ二陰の
くを故小腎虚する者多く此症あり
▲命門俞腎俞長強百會膀胱と灸
○頭痛
頭ハ諸陽經の首也風寒の頭痛は鼻
塞り惡ん發熱を並に頭重一食
滯ハ額の正中のむ左邊痛氣虛右
血虛左痛苦一眉輪骨のむ疾
欠あり真頭痛ハ腦巔の底にあり
痛くくありく手足冷臂のむ
く上りその上り半日に死を
▲百會風池風府合谷頤竹曲池
腕骨京骨合骨衝陽風市三里

▲頭重く鼻塞り少百會に刺す
▲目眩く頭のうき腫る前頂に刺す
▲項強り惡寒をば後頂に針す
○痲痺
肩の痛む或ハ發熱する或ハ風寒
濕にうき多し多し氣血のうき
ゆあり此處は刺し秘傳あり
手少陰肩の押のむ無き氣を
開き後刺す深きとたハ
あやまちあり若し若し刺すハ
人ハ害をこれ刺す針をうて
皮肉の間をうて火を肉に刺
くく肩背のむ熱針を用べし
砒針よりく管に入てく

針灸綱目 百四十四

下皮をうて氣血をくその
効速あり針刺るあや又管を
く推べくく血出て邪氣を
くり上古の石の尖を痛痺の
處に刺し脈をく邪をく鐵
經は破石をうて膿血を出て
○手指
手の痛ハ痰に風濕より老人
の氣血衰弱く肢をくく
ありありの骨節をくく大に
間をくく指をくくの如く
痰と血の不足あり
▲曲池手三里肩髃列缺尺澤

心痛に九種のり心痛症痛風痛悸
痛食痛飲痛寒痛熱痛去來痛也
厥心痛ハ寒邪心包絡に客する真
心痛ハ寒邪心の藏に傷る痛く
くく手足青くく臂膝を過
る半日に死を
▲胸の中刺がくく手足の唇
青く脈沉多に大絡に刺すは
▲胸中滿うきをくく鉄盆を
引く痛く死せんをくく行間
尺澤に刺すは胸をくく
死せんをくく然本湧泉に刺す
▲神門健里大都太白中腕に刺す
▲冬ハ臑炁臑俞肺俞大絡中腕に刺す

針灸綱目 百四十五

腹痛 はらのいたみ

腹痛に九種あり。綿々として増減なきは、寒也。乍痛乍止は、熱痛なり。食するときは腹痛み泄して後に痛減するは、宿食なり。時に痛み時に止み、面白く唇紅にして、飢るときは痛はなだしく食するときはしばらく止ば、虫痛なり。

痛處移らざるは、死血なり。脇下に引いたみ聲あるは、痰飲なり。手にて腹を按に軟に痛やはらぐは、虚なり。腹硬く、手にて按ときはいよくいたむは、實痛なり。

いづれの腹痛にも、先腹に針灸すればかへつて痛ますものなり。必まづ足の穴に針灸して痛み和ぎてのち腹に刺すべし。

尋常のかろき腹痛には、まづ腹滑肉門を重く押へて刺すべし。

もし腹痛はなだしく目眩き死せんとするには、隱白湧泉に針して正氣を付べし

▲上腕 中腕 巨闕 不容 天樞 章門 氣海 崑崙 太白 大淵 三陰交

脇痛 わきいたみ

兩脇痛は、肝火盛に本氣實するなり。咳嗽していたみ走注し痰の声あるは、痰なり。左の脇に塊ありて痛處を移さざるは、死血。右の脇に塊ありて飽悶するは、食積なり。肝積は左に在、肺積は右にあり。

▲針日月 京門 腹哀 風市 章門 丘墟 中瀆 期門

▲灸 肝俞 絕骨 風市

腰痛 こしのいたみ

腰は、一身の大関、六經の懸るところ。

太陽腰痛は、項脊尻に引せなか重し。

陽明の腰痛は、左右へかへりみられず強りかなしむ。

少陽の腰痛は、針にて皮をさくがごとし、俛仰ならず。

太陰の腰痛は、熱して腰に横木あるが如く遺尿す。

少陰の腰痛は、張弓のごとく、黙々として心わろし。

脾に熱たたかふときは、腰痛み、俛仰せられず、腹満て泄す。腎に邪熱あれば、

腰痛み脛しびれ舌かはく。

又曰く、腰は腎の府、多くは色欲を過し腎を勞傷すれば、常に腰を痛ましむ。

日輕く夜重きは、瘀血なり。陰雨に遇ひ久しく坐して發るは、濕なり。

腰背重 走注串き痛は、痰なり。頭痛 惡寒 發熱するは、風寒による。腰冷る

は、中寒なり。

▲腎俞 膀胱 腰俞 志室 崑崙に灸し

▲崑崙 肩井 環跳 陰市 三里 陽輔に針

▲委中より血をとるべし

▲兩腿 水のごとく冷、腰脇肋いたむは、尺澤 三陰交 合谷 陰陵 行間 三里

手三里

▲腰痛 動がたきは、風市 委中 行間

▲腰脊強痛には、腰俞 委中 湧泉 小腸俞 膀胱俞

金匱要略

卷之六

金匱要略

卷之四

痛風

痛風は、遍身骨節走注していたむ也。氣血虚弱し風寒濕に感じ、或は痰經絡に流れ注ぎ、關節利せず。

▲針百會環跳に刺べし

▲灸肩臂いたまば、肩髃曲池にすべし

脚氣 あしのいたみ

男は腎虚、女は血海の虚より發る。或は風寒暑濕をうけて生ず。走りいたむ處さだまらざるは、風なり。筋拘急してひきさく如に痛むは、寒なり。腫て重きは、濕なり。手足ねまり熱し燥渴て便實は、暑熱なり。

骨節大きになり、節の間ほそくなるを鶴膝風と云、治しがたし。

脚氣腹に入るときは大事なり。

▲灸三里三陰交風市外踝内踝

▲針公孫衝陽委中懸鐘飛陽、又痛む上に針を刺すべし

疝氣

凡そ疝氣は、濕熱痰積 流下て病をなす。或は虛寒により、食積によつて發る。みな肝經に歸す、宜く肝經を通ずべし。又腎經を干ことなかれ。

七疝の症

厥疝は、心痛し 足冷、食を吐く。

瘕疝は、腹中に氣積かたまり、臂のごとし。

寒疝は、冷たる食を用ゆれば にはかに心腹ひきいたむ

氣疝は、忽にみち 忽に減じていたむ。

盤疝は、腹中いたみ 臍の旁にひく。

附疝は、腹いたみ 臍の下につらなり 積聚あり。

狼疝は、ほがみと陰へ引痛む。

▲針 天樞 大衝 大敦 腹結 氣海 関元 石門 滑肉門 三陰交

▲灸 章門 三陰交 大敦 氣衝 肝兪

▲秘灸 病人の口を合がしめ 口の濶さの寸を三つとり

それを三角に△此の如して 上の角を臍の下廉にあて、下の兩角に灸すること
左右各二十一壯すべし、七疝ともに奇妙なり

▲陰卵 偏大なるは、関元に灸百壯すべし

眼目

目は、肝の外候五藏の精華にして、諸脉は皆目に屬す。

烏睛は肝木、兩眦は心火、上下の胞は脾土、白睛は肺金、童子は腎水の精なり。

暴に赤腫痛は、肝經の風熱、久病昏暗は腎虛、遠く視ことあたはざるは心虛、近視ことあたはざるは腎水の虧たるなり。

▲灸 巨骨 膏肓 曲池 肝俞 脾俞 三里

▲針 神庭 上星 前頂

▲熱血 目赤きには、絲竹空 百會 上星

▲皆 痛み 涙出で 明ならずは、風池 合谷

▲雀目には、睛明 攢竹

▲瘡目には、合谷 各一壯

▲赤くただるるには、陽谷 太陵

耳病

耳は腎に屬して、竅を少陽の部に開、會を手三陽の間に通ず、腎に關かり腦を貫く。故に腎虛するときは、耳聾して鳴る。兩耳腫痛みあるひは膿を出す

は、腎經の風熱なり。口苦く脇痛み寒熱往來は、少陽膽經の風熱。左の耳聾

は、忿怒膽の火を動す。右の耳聾するは、色慾相火を動す。兩耳俱に聾する

は、厚味胃火を動ず。あるひは氣によつて閉る者あり、あるひは痰火に因て耳鳴も

のあり。小兒耳腫耳痛耳停は三陽の風熱なり。

各証を詳にして治すべし。

▲灸 腎俞 百會

▲耳聾鳴には 聴會五壯

▲耳聾 耳痛は 翳風七壯 耳門三壯

▲針 陽谷 前谷 液門 商陽 少海 聴宮 肩貞、灸らみて刺すべし。

少の腰俞委中 湯泉小腸俞膀胱俞

○痛風

痛風ハ遍身骨節走注していじ也
氣血虛弱一風寒濕一感一或ハ
痰結絡一流注注さ関節利でと

針 百會 環跳は刺へー
灸 肩髃いさへ肩髃曲池まで

○脚氣

男ハ腎虛女ハ血海の痺より發る或ハ
風寒暑濕より生じ走りいじむ
處さるる風より筋拘急て
ひささく如に痛ハ寒あり腫て重さ
ハ風より手足痺より熱一燥渴く
便實ハ暑熱より骨節太さくあり

節の間よりくろく鶴膝風と云治
く一 脚氣腹に入ると大事なり
灸三里 三陰交 風市 外踝内踝
針 公孫 衝陽 委中 懸鐘 絶陽
又痛じ上に針し刺とへー

○疝氣

凡そ疝氣濕熱痰積流下て病と
と或ハ虛寒にうり食積にうて發
る肝經は歸と宜く肝經を通じ
又腎經と通とく
七疝の症 厥疝ハ心痛 足冷食吐く
疝疝ハ腹中に氣積くさきり臂のじ
寒疝ハ冷さる食と用やとさあつる
心腹のささく一氣疝ハ忽にさ忽に

厥疝といふは盤疝ハ腹中いじ
の旁にのり 附疝ハ腹の下の

ふつりの積聚なり 狼疝ハ
と陰ハ引痛ハ針 大樞大衝大敦
腹結 氣海 関元 石門 滑肉門 三陰交
灸 章門 三陰交 大敦 氣衝 肝俞
秘灸病入のり合りあ口の瀾さの

○眼目

目ハ肝の外候五藏の精華はて諸脉
七疝といふ奇妙なり
陰邪偏大より関元は灸百壯とて

皆目ハ屬と烏睛ハ肝水兩腎ハ心火
上下の馳ハ脾土白睛ハ肺金童子ハ腎
木の精なり 暴赤ハ腫痛ハ肝經の風
熱久病昏暗ハ腎虛遠く視とさる
さるハ心虛近視といふさるハ腎水の
虧なり

○耳病

灸 巨骨 膏肓 曲池 肝俞 腰俞 三里
針 神庭 上星 前頂
熱血目赤さる絲針空 百會 上星
腎痛ハ淚出で明々すハ風池 合谷
雀目ハ睛明 翳外 海目ハ合谷 莊
赤くさるさハ陽谷 太陵
耳ハ腎に屬しと發ハ少陽の部ハ開

鼻病
はなのやまい

鼻は肺の候なり、和するときにはよく香臭を分別す。若七情内に鬱し六淫外を傷り飲食勞役して、鼻氣調はず清道ふさがりて病をなす。

鼻塞り濁涕を流すは熱邪とし、清涕を流すは寒邪とす。香臭を聞ざるは、肺に風熱あり。濁涕あるひは清汁をながして止ざるを、鼻淵といふ。乃風熱脳をやりぶり脳氣固からずして、液をのづから滲る也。

臭き膿水ながれ出るを脳漏といふ。面白く清涕をながし香臭を聞ざるは、肺虚なり。鼻赤きは熱血肺に入る、酒齕鼻といふ。鼻頭紫黒きは、風寒によつて血冷凝滯て散ぜざるなり。みな症を詳にして治すべし。

▲百會 上星 肺俞 風門

▲鼻塞るは、上星 臨泣に針し、上星七壯百會 厲兌 前谷に灸すべし

▲清涕は、人中 上星 風府 又風門に灸

▲脳漏 臭き涕出ば、曲差 上星

▲久病 涕ながれて止ずば、百會に灸して妙なり

▲息肉は、迎香

▲衄血は、風門 風府 風池 合谷 二間 三間 後谿 前谷 委中 申脉 上星 三里

▲鼻瘡は、上星 百會 風府

牙齒 ぎば はのやまひ

夫齒は骨の餘り、腎これを主る。上の前齒は督脉に屬し、下の前齒は任脉に屬す。兩頤の上齲は手陽明大腸、下齲は足の陽明胃の經これを絡ふ。

風を呷ときは痛はなはだしきは、腸胃に風邪あり。腫痛は陽明の風熱、臭く

穢しきは腸胃に熱あり、動き揺ぐは腎元の虚なり。血火に遇ときは沸出て宣

露る、熱極り齒の縫より血出るは虚熱なり。

蛀牙は竅あり、腸胃の濕熱なり。

走馬牙疳は即時に腐落る、眞陰いまだ成らずして熱さかん也。

▲少海 合谷 内庭 四瀆 上廉 大淵 三間 浮白 陽白

▲齒痛ば、商陽 ▲牙痛は、陽谿 少海 曲池 陽谷 二門 厲兌

▲上牙痛には、人中 内庭 大淵 呂細 少海 三里、

又肘の上肉の起るところに灸して妙なり

▲下齒いたまば、龍玄側腕交叉 養漿 合谷 三間、又腕くびより五寸上 兩筋の間灸五壯して妙なり

▲血熱 胃口にあり 咽齒に引いたむには、浮白 内庭 合谷

▲頬腫牙いたまば、頰車 曲池

▲重牙には、いたむ牙のとをりの齲に刺べし、妙也

▲重喰牙にて瘡を生じ ただるものは、養漿に灸七壯すべし

▲牙疳は、養漿に針灸

會手三陽の間を通り腎の関り
野々々故に腎虚と云々久耳聾
と鳴る兩耳腫痛と云々の膿出
と腎經の風熱と口苦と脇痛と
寒熱往來と少陽膽經の風熱左の耳
聾と色慾相火と動と兩耳俱に聾
と厚味胃火と動と右の耳聾
と開る者ありありの痰火と因
て耳鳴りあり小兒耳腫耳痛耳
停三陽の風熱あり各証と詳して
治と云々
灸腎俞百會耳聾
少聴會耳聾耳痛腎風耳聾
門三針針陽谷前谷液門商陽少海

鼻宮肩見ありと刺と云々
○鼻病
鼻の肺の候より和と云々久々香
臭と分別と若し七情内傷と六
淫外傷り飲食不役と鼻氣調
と清道と云々病と鼻塞り
濁涕と流と熱邪と清涕と流
寒邪と香臭と聞と肺と風熱
あり濁涕あり清汁と云々止
と鼻淵と云々風熱腦と云々
腦氣固くと液と云々滲る也
臭と膿水と云々出と腦漏と云々
白く清涕と云々香臭と聞と肺
虚と鼻赤と熱血肺と入酒饌

鼻の鼻頭紫黒と風寒と云々
血冷凝滯と散と云々ありと証と詳
と治と云々
會手三陽の間を通り腎の関り
野々々故に腎虚と云々久耳聾
と鳴る兩耳腫痛と云々の膿出
と腎經の風熱と口苦と脇痛と
寒熱往來と少陽膽經の風熱左の耳
聾と色慾相火と動と兩耳俱に聾
と厚味胃火と動と右の耳聾
と開る者ありありの痰火と因
て耳鳴りあり小兒耳腫耳痛耳
停三陽の風熱あり各証と詳して
治と云々
灸腎俞百會耳聾
少聴會耳聾耳痛腎風耳聾
門三針針陽谷前谷液門商陽少海

鼻の鼻頭紫黒と風寒と云々
血冷凝滯と散と云々ありと証と詳
と治と云々
會手三陽の間を通り腎の関り
野々々故に腎虚と云々久耳聾
と鳴る兩耳腫痛と云々の膿出
と腎經の風熱と口苦と脇痛と
寒熱往來と少陽膽經の風熱左の耳
聾と色慾相火と動と兩耳俱に聾
と厚味胃火と動と右の耳聾
と開る者ありありの痰火と因
て耳鳴りあり小兒耳腫耳痛耳
停三陽の風熱あり各証と詳して
治と云々
灸腎俞百會耳聾
少聴會耳聾耳痛腎風耳聾
門三針針陽谷前谷液門商陽少海

唇病

經曰く、脾の榮は唇にあり。唇潤くは風也、乾くは燥なり、裂は熱なり、掲は寒なり。唇腫裂あるひは瘡を生じ米汨のごとくなるは瀦といふ、脾經の風熱也。唇緊口小くなるを緊唇といふ。又中氣虚損して、唇口瘡を生ずる者あり。又陰虚火動して、唇燥裂て繭の如なる者あり。

▲唇乾 液あるは、下廉

▲唇乾き 食下らざるには、三間 少商

▲唇動き 虫の行がごとくなるは、水溝

▲唇腫ば、迎香

▲緊唇は、虎口を灸す「男は左 女は右」又姜漿に灸三壯すべし

口病

經に曰く、脾氣は口に通ず。肝熱すれば口酸し、心熱すれば口苦し、膽熱するときも口苦し、脾熱すれば口甘し、肺熱すれば口辛し、腎熱すれば口鹹し。口臭きは内熱、口乾き 口瘡は脾熱。

▲口乾は、尺澤 曲澤 大陵 二間 少商 商陽

▲口噤には、頰車 支溝 外関 列缺 厲兌 内庭

▲口眼喎斜ば、頰車 水溝 絲竹空 列缺 太淵 合谷 二間 地倉

舌病

舌は、心の苗也。又脾の經絡、舌の本に連る。惟舌の下 廉泉の穴は、腎經に屬す。故に心熱すれば舌腫瘡を生ず。心脾熱を重て、舌腫て言語す。

心脾虚して風熱をつけ、氣鬱して重舌を出す。心脾熱して舌胎を生ず。

肝ふさがれば血を出す。上に鬱熱をたくはゆるときは、口舌のやまひを生ず。

▲舌緩は、太淵 合谷 冲陽 内庭 風府 三陰交 崑崙

▲舌強は、亞門 二間 少商 魚際 中冲 陰谷 然谷

▲舌黄は、魚際

咽喉いんこう のんどのやまひ

喉のどは肺はいに通つうじて、氣きの往來おうらいを主つかさどる。氣き鬱結うつけつして上かみにのぼり頸くびの間に血熱けつちねつをたくはへ血餘ちあまりて喉痺こうひを病やむ。又また手少陰てのしょういん少陽しょうようの二脉みやくも喉氣のどきに並ならぶ。火ひは、腫脹はれはるるを主つかさどる、故ゆえに熱上焦ねつじょうじょうに客やてして咽隘のんどはるる。

或あるいは腫痛はれいたみ或あるいは瘡かさを生しょうじあるひは紅くれなゐにはれ結核腫さねをむすひはれいたみ。

或あるいは閉塞とちふさがり言ものいふこと能あたわず。俱ともにこれ風熱痰火ふうねつたんなり。

▲尺澤しゃくたく 瘰癧あそんより血ちをとる、口くちを開ひらかせて喉のどの腫はれたる所ところをひねり針はりにて突ぬき血ちをとるがよし

▲あるひは喉閉のどふさがり 急症きゅうていには、三稜針さんりょうしんを少商しょうしやうに刺さして毒血どくけつを出いだすべし

▲喉痺こうひには、夾車きやくしや 合谷がうく 少商しょうしやう 經渠けいきよ 大陵だいりやう 二間じかん 尺澤しゃくたく 前谷ぜんこく 陽谿やうけい

▲頤腫おとがこほには、少商しょうしやう

▲咽痛のどいたば、風府ふうふ、妙みやうなり

▲咽のどの中なか 鯁うおのほねの如ごとくいらつくには、間使かんし 三間さんかん

▲咽腫のどはれば、中渚ちゆうしよ 太谿たいけい

▲咽のどの外そとはるるには、液門えきもん

▲食下しょくくだらずは、宣中だんちゆうに灸きゆうせよ

▲咽のどの中なかふさがるには、合谷がうく 曲池きよくち

▲又またふさがりて飲食のみくいくだるには、合谷がうく 少商しょうしやう

▲咽乾のどかわらぐは、大淵たいえん 魚際ぎよさい

▲消渴しょうかつには、水溝すいこう 行間こうかん 曲池きよくち 養漿しやうじやう 然谷ねんこく 商丘しやうきやう 隱白いんはく 勞宮らうきやう

外科門

瘡瘍 かさはれもの

經に曰く、諸痛痒瘡瘍は、皆心火に屬す。蓋し心は、血を主て氣を行らす。若氣血凝滯り心火の熱を夾て癰疽のたぐひを生ず。

大にして高く起るを癰とす。平にして内に發するを疽とす。癰は頭のある小瘡。瘡は總名なり。

此病、多は魚肉厚味を食し安坐して身をつかはず色慾を過して、水へり火盛になり熱毒内に攻め氣血を煎熬して成る。

▲癰疽背に發するは、肩井委中に針すべし

▲又始めて發せば、蒜を片て瘡の上に貼その上に灸して、疼ざるは疼むま
で疼む者は疼まざるまで灸すべし、發することを覺て七日より中なれば愈べし

▲癰背より出るは、至陰通谷束骨崑崙委中

▲髻より出るは、竅陰夾谿陽輔陽陵泉

▲髭より出は、厲兌内庭陷谷衝陽解谿

▲腦より出るは、絶骨

▲腸癰は、兩肘を曲正して肘の頭の銳骨の端に灸百壯すれば膿血を下して安し

▲囊癰陰腫には崑崙に灸三壯、久病陰腫るには水分に灸す

▲乳癰には、天樞水泉肩井臨泣夾谿

▲疔はかならず面手足に生ず、面上と口の角に生ぜば合谷に灸す、手に生ぜ

ば曲池に灸す

▲背上は、肩井二里委中臨泣に灸、行間通里少海太冲

▲足には、行間二里委中臨泣

▲掌後横文に灸す、男は左女は右に七壯すなはち瘰癧る

▲紅絲疔は、頭手足の間に黃泡を生ずその中に紫紅の線あり、針を線の
処に刺て血水を去、しからざれば心に入て治がたし

▲瘰癧は結核、耳の前後 頤頤頸喉に生ず。胸脇に生じて形長きを馬刀とす、小なるを結核といふ、いくらも連るをるいれきといふ。

少海「まづ皮の上に刺こと三十六息して後、その核の大きさほど針を入れて三上三下して出す」天池 章門 臨泣 支溝 陽輔に灸百壯、肩井「年のかず」手の三里 曲池 大迎に灸すべし。

▲痰核は、項腋にありて 紅ならず 痛まず 膿ならず、肩井 曲池に針す

▲瘰癧には、天容 翳風 間使 天突二十一壯 肩髃十八壯、又兩耳後髮際灸七壯

▲瘰癧は、いぼの上に灸一壯して水を滴てよし

▲瘍 瘰癧は、少海

▲癰瘡は、曲池 支溝 後谿 崑崙 大陵

▲癰疹には、肩髃 曲澤 曲池 環跳 合谷

▲便毒は、手掌の後の横文より中指の先までの寸をとり 其寸を 又横文より臂の方へ向て寸の盡るところに三壯灸す、便毒右ならば右の手に灸すべし

癰風 癰風 大麻風 皆かつたい也

癰風は、天地殺物の風也、陽明の一經に外ならず。初て起るものは白屑雲頭紫黒、疥瘡、膿を流しあるひは燥てうまず。

麻木不仁、はなはだしきものは毛落眼ただれ眉脱し遍身癩疹いで鼻くづれ肉陷り声啞る。痒きは虫あり、耳鳴り膝はれ足の底穿つ。

▲養漿に灸七壯すれば瘡軽くなる、再灸すれば愈る、三たび灸すべし

▲又大拇指 筋骨縫の間 約すること半寸、灸三炷、香して毒氣を出す

▲又三稜針にて委中を刺て血を出すこと二三合、紫黒 疥瘡の處も亦惡血を去べし。一日を隔て一刺すべし、三次刺して血の色変ず、此のごとくすること二十餘日して已べし。

損傷 そこなひやぶる

經に曰く、墮墜折傷すれば、瘀血腹中に留り、腹満 大小便通ぜず 心腹に攻上て悶乱して死する者あり、これを瀉すべし。又皮敗れて血出たるは補ふべし。

足の内踝の下 然骨の前を刺して血を出す、止すんば大敦より血をとるべし。

又足の跗上の動脈の処に三毛といふ穴あり、これに針して血を出す、右ならば左に 左ならば右に刺べし。

大衝 崑崙も針して血をとるべし。灸は宜からず。

中毒 づくにあたる

凡そ砒霜石斑猫の毒。その外もろくの毒に中る者は、中腕にふかく針して吐すべし。又水溝に針して妙なり。

虫獸 むしけものにかまるる

蛇に咬れたるは、その処に蒜の片たるをしき、上に灸三壯すべし。
犬に咬れたるは、その咬たる処に灸すべし。

頓死 にはかにしする

驚て死するあり、悲みて死するあり。

▲驚きて死し 心下温ならば、針を醫者の口中にてあたためて、兇骨を刺ししづかに出て穴をもめば活かへる

▲悲み哭て死し 手足冷たりとも 口身温ならば、水溝に針して百會に灸七出すべし

▲目神轉らず 口に延なく 舌卵縮らずんば、合谷に針を刺し 治を施すべし、湧泉神道會陰に針すべし

諸の氣付

驚き肝をつぶし氣を上へとりあげ絶入たるには、三里三陰交に針すべし。

▲眠ごとく引入やうに絶入たるには、百會水溝に針して活べし

▲腹痛て絶たるには、湧泉に針すべし

▲胸痛で絶入たるには、三里に針すべし

▲氣付には、合谷中府勞宮陽谿みな針してよし

▲氣付には何様なるにも、神闕関元に灸數百壯すべし

▲魔れ死するには、兩足の大拇指の聚毛の中を灸すること三五壯

▲又魔死一切の卒死に、人中を灸すること三五壯

▲又臍の中百壯すべし

溺死 みづにおぼれてしぬる

凡そ水におぼれて死したるをば、一夜すぎてもすぐふべし。まづ皂角を粉にして綿につつみ肛門に入て百會関元に針灸すべし、又臍中に灸すべし。

脉絶 みやくたゆる

脉微細にして尋ねべからずあるひは絶て有ことなきがごとくは、少陰の經。

▲復溜の穴に針すべし。圓利鍼にて針骨の處に至り針を順し下し刺す。陽を固

し脉をうかがひ、脉生ずるときにしづかに針を出すべし。

婦人の科

夫婦人は、十四にして月水行り 四十九にて絶。その病 太低男子と異なることなし、惟胎前産後月經調はず 癥瘕崩漏帶下の證のみ同じからず、常に血虚し氣鬱しやすし。

▲月水調らざるには、氣海 三陰交 中極 帶脉、灸一壯より過すべからず、又肩俞効あり

▲月水多く下るは、通里 行間 三陰交

▲月水來らず 面黄み 嘔吐し 子なきには、三陰交 曲池 支溝 三里

▲經閉は 會陰三壯、月水通ぜずは 氣衝七壯 あるひは 関元

▲月水通ぜず あるひは 多 心下満 目遠みる こと能はず 腹いたまば、水泉五壯

灸すべし

▲崩漏 月水調はず 逆氣 腹脹は、血海に灸三壯

▲漏血止ずんば、太冲 三陰交

▲血崩には、氣海 大敦 陰谷 太冲 三陰交 然谷 中極

▲赤白帶下は、白環 帶脉 関元 三陰交 氣海 間使

▲久き帶下は、曲骨 次膠 長強

▲月水をみる時に交合し 寒熱さし 引 形瘦て 虚勞のごとくは、腎俞 風門 中極

氣海 三陰交

▲經行の時に傷寒を病ば、期門に針す

▲臍腹冷痛み 脇下に引痛は、中庭 廿一壯

▲諸節疼ば、陽輔

▲喘肺の病は、崑崙 羨山

▲足緩は、陽陵 冲陽 丘墟

▲脚弱は、膝関 委中 三里 陰市

▲脚筋短急 足重腫痛み 鶴膝 歴節風は、風市

▲腰重く 脚筋攣には、兩脚腓を曲め 兩紋 四处三壯一同に灸す

▲腰痛ば、僕参三壯

- ▲膝より上のいたみは、環跳 風市
- ▲膝より下は、犢鼻 膝関 三里 陽陵に灸
- ▲踝より上は、三陰交 絶骨 崑崙に灸
- ▲踝より下は、照海に灸
- ▲腿痛は、寛骨康し
- ▲脚氣は、風市に灸し 次に伏兔に針三分「灸すべからず」、犢鼻 膝眼 地五會 三里 上廉 絶骨
- ▲一切冷 つかるるには、関元に灸すべし
- ▲月水調はず 塊となるを癥瘕といふ、関元に灸すべし
- ▲血塊には、復溜 三里 氣海 丹田 復帶 三陰交
- ▲小腹堅は、帶脉
- ▲血の道は 目眩 頭つう 發熱 嘔吐して不食す、不容 風府 大椎 大抒

腹痛く絶るに湯泉に針を
 胸痛く絶るに三里に針を
 氣付む合谷中府宮陽給
 氣付む何様あるも神關元
 是數百壯を
 魔を死する少の指の
 毛の中を三三三壯又魔
 の中を人中を三三三壯又
 肺の中百壯を
 溺死しはわかれ
 凡そ水にわかれて死しは
 せきせきと水にわかれ
 せきせきと水にわかれ

関元針をへり又肺中に針を
 脈絶しはわかれ
 脈微細しはわかれ
 絶て有るはわかれ
 復溜の穴に針を
 骨の處に針を
 陽と面脈を
 あつふ針を
 婦人の科
 夫婦人十四ヶ月水行り
 絶その病を
 惟胎前産後月經調
 崩漏帶下の證の
 血虚氣鬱

月水調らるる氣海三陰交中極
 帶脈灸一壯より過るは
 月水多るは通里行間三陰交
 月水來るは面黃嘔吐
 三陰交曲池支溝三里
 經閉の會陰三三三月水通るは氣衝
 心下滿目遠るは能るは腰の
 水泉五壯を
 崩漏月水調るは逆氣腹脹は血海
 是三三三壯漏血止るは太冲三陰交
 血崩少の氣海大敦陰谷太冲三陰交
 然谷中極
 赤白帶下は白環帶脈關元三陰交

氣海間使各帶下は曲骨太冲長強
 月水くる時小交合寒熱引
 形瘦く虚勞の腎俞風門中
 極氣海三陰交
 經行の時傷寒と病は期門針を
 膈腹冷痛は脇下に引痛は中庭三壯
 諸節疼は陽輔膈脈の肩髃崑崙
 崑崙足緩は陽陵冲陽丘墟脚弱
 膝關本節三里陰市脚筋短急
 足重腫痛は鶴膝麻節風ハ風市
 腰重く脚筋攣は兩脚脈は曲
 兩紋四三三壯同は灸は腰痛は僕參
 三壯膝より上の環跳風市
 膝より下の犢鼻膝關三里陽陵灸

妊娠 はらみおんな

▲子なきは、三丘 中極

▲又は腎俞 命門

▲妊婦 頓に仆ることあれば 胎動して安からず、あるひは胎衝上て心をせめ腹いたむには、巨闕 三陰交に針すべし

▲小産 胎墮して後 手足水のごとく厥冷するに、肩井一針すべし。針刺ことふかければ 悶へくるしむ、急に三里に刺。

▲胎落やすきは、神闕に灸す 永く落す

▲難産 横産 死胎には、合谷を補して 再は瀉すべし、三陰交 太冲

▲横産にて 子の手を出さば、産母の右の足の小指の尖の上に、灸 小麥ほどにして三壯か五壯すべし

▲胎子 手足を出さば、針にて手足の心を一分刺て 塩をぬり 徐に送入れば、子がへりして順に産す

▲難産には、至陰三壯、又 太衝三壯

▲子心へつき上り 悶くるしむには、巨闕 三陰交を瀉し 合谷を補すべし

▲子心に衝上り 痛み息ずは、氣衝七壯

▲胞衣下らずは、中極 崑崙 三陰交に針

産後

- ▲産後の諸病には、期門
- ▲惡露止ざるは、氣海 関元
- ▲同 腹痛ば、陰交百壯 氣海に灸す、期門 伏兔 関元 腎俞
- ▲惡露止ず 小便しづり通ぜずは、氣海に灸すべし
- ▲兩脇痛ば、石門五十壯
- ▲耳鳴 腰いたむは、合谷 光明
- ▲血量には、支溝 二里 三陰交に針し、氣海に灸すべし
- ▲卒に口噤み 語音出ざるには、羨漿五壯
- ▲血氣俱に虚するには、血海百壯
- ▲惡露行ざるは、石門 三陰交 崑崙
- ▲陰挺出には、曲泉 照海 大敦に灸す
- ▲産後 手足水のごとく冷ば、肩井に針五分
- ▲乳汁通ぜずは、臈中に灸し、少澤より針すへし、前谷
- ▲乳腫痛は、足の臨泣
- ▲乳癰は、下廉 二里 魚際 少澤 委中 足の臨泣 夾谿
- ▲兒の息が乳にあたりて 惡寒發熱するには、百會
- ▲子を妊ことを絶んと欲せば、合谷 右足の内踝の上二寸に灸、臍下二寸三分に灸三壯すれば 陽氣消す。
- 又肩井に灸すれば、永く孕まず、又関元 陰交 石門 合谷に針灸するも。

▲疎より上の三陰交絶骨崑崙に灸
 ▲疎より下の照海は灸▲腰痛は眞骨
 康▲脚氣は風市に灸▲灸伏兎
 は針三分灸は臍臍膝眼地五會
 三里上廉絶骨
 一切灸はつゞに關元灸灸とへ
 ▲月水調は塊とありと微癢とあり
 關元灸灸とへ▲血塊は復溜三里
 氣海卅由海帶三陰交小腹堅骨脉
 血の道は月事頭つゝ發熱嘔吐して
 不食と不容風府大椎大杼
 ○妊娠
 子ありは三五中極又ハ賢俞命門
 ▲妊婦頻に小便とあれば胎動して

安くどあつたハ胎衝と云ふ
 腹のひびくハ巨關三陰交針とへ
 ▲小産 胎隨と後手足水のこと
 厥冷とるに肩井一針とへ一針刺と
 うつたれに悶へるゝは急は三里に刺
 ▲胎落をさるハ神闕灸灸とへ水と落
 ▲難産横産死胎は合谷と補して
 再ハ漏とへ一三陰交太冲
 ▲横産おく子の手と出さハ産分の有
 足の小指の尖の上は灸小麥灸とへ
 一三壯り五壯とへ
 ▲胎子手足と出さハ針とへ手足の
 心と一分刺とへ塩とあり餘は送入
 且ハ子とへつゝ順に産と

▲難産より至陰三壯又太衝三壯
 子心へつゝ上り悶くゝは巨關
 三陰交と濁合谷と補とへ
 子心へ衝上り痛と息とハ氣衝
 胎衣下らハ中極崑崙三陰交針
 ○産後
 ▲産後の諸病は期門
 ▲惡露止さるハ氣海關元▲同腹痛
 陰交百壯氣海は灸と期門伏兎關元
 腎俞惡露止と小便とあり通せ
 氣海灸灸とへ▲兩脇積石門
 耳鳴腰のむハ合谷光明
 ▲血暈は支溝三里三陰交針
 氣海灸灸とへ

老に口嚔と語言出さるハ養老三壯
 血氣俱は虚とるハ血海百壯
 ▲惡露行さるハ石門三陰交崑崙
 陰挺出さハ曲泉照海入敦灸灸とへ
 ▲産後手足水のことハ冷肩井針とへ
 ▲乳汁通ぜハ臍中灸灸とへ少澤より
 針とへ一前谷
 ▲乳腫痛ハ足の臨泣乳癰ハ下廉三里
 魚際少澤委中足の臨泣灸灸とへ
 ▲兒の息が乳ふのりハ惡寒灸灸とへ
 ちハ百會
 ▲子と妊とと絶んと欲せハ合谷右足
 の内踝の上一寸灸臍下二三壯
 灸三壯とれハ陽氣消と

小兒の科 ちごのりやうじ

小兒の病を治すること 古人みな難しとす。誠に証を問の一法を闕。故にこれを啞科と云。しかのみならず、脉氣いまだ定まらずして、浮沈極て決しがたし。面部の外候 虎口の説、ともに闕べからず。比等に依ざれば、其証を極ること成がたし。

小兒の脉法

「面部形色圖」

▲左の腮は、肝に屬す。色青きを順とし 白きを逆とす。赤きは肝經の風熱を主どり、青黒きは驚風 腹痛をつかさどり、淡赤きは潮熱 痰嗽をつかさどる。

▲右の腮は、肺に屬す。色白きを順とし 赤きを逆とす。赤きこと甚しきは、咳嗽 喘息を主る。その色 頰へ傳れば 小便赤くしぶりあるひは通ぜず。

▲額は、心に屬す。色赤きを順とし 黒きを逆とす。青黒きは、驚風 腹いたみ 瘰癧 啼をつかさどる。少し黄なるは、盗汗 驚疳 骨熱することをつかさどる。

▲鼻は、脾に屬す。色黄なるを順とし 青を逆とす。赤きは、脾經の虛熱を主る。ふかく黄なるは、小便通ぜず あるひは鼻かわき 衄血いづることをなす。

▲頰は、腎に屬す。色黒きを順とし 黄なるを逆とす。赤きは、腎と膀胱とに熱ありて 小便通ぜざることを主とる。

小兒三歳より内は、虎口三関の紋理を見て病をしるべし。

「虎口三関之圖」

男は左 女は右の手の食指の本の節を風関とし、中の節を氣関とし、第三の節を命関とす。

その紋、風関にあれば病あさく治し易し、氣関にあれば病重しとす、命関にあれば病すでに深く治しがたし。

○紋の色 むらさきは、熱とし

○赤は、傷寒とす

○青きは、驚風をつかさどる

○白きは、疳の病

○黒きは、惡氣に中らるる

○黄なるは脾の困み、つかるるなり

○淡赤きは、寒熱表にあり

○深紅は、傷寒 痘疹を主とる

○紋乱るときは、病久し

○細なるときは、腹いたみ 多く啼き 乳食消せず

麤くして直に指に入は、驚風をつかさどる、惡証なり。黒く墨のごとくなるは、諸病ともに治しがたし、かならず死す。右は心肝に應じ、左は肺脾に應ず。

魚刺の形は、驚風 痰熱を主とる

懸針の形は、傷風 泄瀉 積熱を主とる

水字の形は、食積 咳嗽 驚風と疳

乙字の形は、肝の病 きやうふうを主とる

虫の形は、肝虫 大腸 穢積を主とる

環の形は、疳積 吐逆をつかさどる

珠のかたちは、死をつかさどるなり

乱れたる紋は、虫をつかさどる也

▲小兒三歳より後は、醫者の大指ばかりにて、兒の寸関尺を按候ふなり。脉の數、呼吸の間に六七至るを常の脉とす。是よりかず多きを熱とし、是よりかずくなきを寒とするなり。浮數なるは、風熱とす。

○虚滯は、驚風

○緊弦は、腹いたむ

○弦急は、氣和せず

○牢實は、大便結す

○沈細は、冷

○緩小沈細なるを 宿食消せずとす

○沈遅は、虚とす

○沈實を 積とす

○單細は、疳勞なり

右、寸関尺の脉法一歳よりうちといふとも、浮沈遲數を辨へ寒熱虚實を察すべし。十三歳より以後は、大人と法を同じうすべし。

驚風

急驚風は、風熱よりおこる。或は卒に大聲を聞き、あるひはころひて驚き、搐搦き身熱し面赤く口渴きいき熱く大小便黄赤く目を見つめ反張る。

▲前項に灸、若愈ずは攢竹人中各三壯

慢驚風は、久病の後あるひは吐瀉の後、脾胃虚し身冷口鼻のいき涼しく手足びくめき昏睡して睛をあらはし發る時は目をみつめ涎を流す。

▲尺澤七壯 頤會百會各三壯灸すべし

▲驚風には、腕骨最真也、百會前頂上星水溝合谷尺澤中腕章門少海長強、急驚には針すべし慢驚には灸すべし

驚風入病の後、のけ吐瀉の後、
 脾胃虚、身冷口鼻のいさ涼く
 手足のひびき、昏睡して晴むるに
 發する時、月經の涎と流し
 天澤七散、頗會百會三三、灸と下
 驚風の脱骨最真也、百會前項上
 星木溝合谷、天澤中腕章門少海
 長強急驚金匱と一雷驚又灸
 ○驚癇、めんかん、くつら
 大人へ癲云小兒へ癇といふその証
 月眩さ搐搦涎沫吐きたちち
 ち作息人々ち々風癇手足
 とあ口の閉じ驚癇へ頭目と癲一口
 足而一のの背くののの那

視^ミと食^ク痢^リハ肢^シ搐^クと^ハ胃^イ反^ハ胃^イ大^{ダイ}逆^{ギャク}
 一^ハ食^ク吐^トと飲^{カン}痢^リハ足^{ソク}搐^ク動^{ドウ}一^ハ食^ク
 飽^ホと^ハく^ハわ^ハの^ハの^ハ數^{スウ}日^{ニチ}食^クて^ハ中^{チュウ}
 一^ハ發^{ハツ}飽^ホと^ハ中^{チュウ}と^ハち^ハら^ハ疾^{シツ}痢^リハ狂^{キヤウ}
 の^ハと^ハく^ハ耳^{ミミ}と^ハ目^メと^ハて^ハ夢^{ユメ}の^ハと^ハく
 醉^{スイ}と^ハく^ハ又^{マタ}曰^{イハレ}く犬^{イヌ}痢^リハ反^ハ
 折^{セツ}上^{ジョウ}竈^{カマド}大^{ダイ}叫^{ケウ}と^ハ多^タハ肝^{カン}也^{ナリ}牛^{ウシ}痢^リハ目^メ
 直^{ジツ}視^シ腹^{フク}滿^{マン}牛^{ウシ}叫^{ケウ}と^ハ多^タハ脾^ヒ也^{ナリ}雞^{トリ}痢^リハ
 驚^{キョウ}跳^{テウ}反^ハ折^{セツ}手^テ雞^{トリ}叫^{ケウ}と^ハ多^タハ肺^{フイ}也^{ナリ}
 猪^{ブタ}痢^リハの^ハと^ハく吐^{ハク}と^ハ猪^{ブタ}叫^{ケウ}と^ハ多^タハ
 多^タハ胃^イ多^タハ羊^{ヒツ}痢^リハ目^メ瞪^{トウ}と^ハ舌^{ゼツ}と^ハく
 羊^{ヒツ}叫^{ケウ}と^ハ多^タハ心^{シン}多^タハ
 一^ハ驚^{キョウ}痢^リハ頂^{テイ}上^{ジョウ}旋^{セン}三^{サン}の中^{ノナカ}三^{サン}壯^{ゾウ}耳^{ミミ}の^ハ後^{ノチ}
 青^{セイ}絡^{ロク}三^{サン}壯^{ゾウ}風^{フウ}痢^リハ耳^{ミミ}會^{カイ}出^デ鼻^ビ塞^{サイ}絲^シ竹^{チク}空^{クウ}

驚跳反折手縱雞叫といふ肺あり
猪癩のいゝのいゝいゝいゝ猪叫といふ
久賢あり羊癩へ目登く舌を吐く
羊叫といふ心あり
癩癧へ頂上旋毛の中三壯手の後
青絡三壯風癧へ耳會出痛絡付空

驚癇 せんかん くつち

大人は癩と云、小兒は癇といふ。その証、目眩き 搐 搦し 涎沫を吐きた
ちまち地に休れて人をしらす。

風癇は、手足をなげ口啞む。

驚癇は、頭目を癢し 口目を吊し あるひは昏く あるひは邪に視す。

食癇は、肢搐き 角弓反張 大聲し 食を吐す。

飲癇は、手足搐動し 食飽ことなく あるひは數日食せず 寐中に發る、飽ときにも
おこる。

痰癇は、狂のごとく 耳きこへず 目みへず 夢のごとく 酔たるごとくなり。

又曰く、犬癇は、反折 上竄、犬叫をなすは肝也。

牛癇は、目直視 腹滿、牛叫するは脾也。

雞癇は、驚跳反折 手縦、雞叫するは肺なり。

猪癇は、尸のごとく 沫を吐き、猪叫するは腎なり。

羊癇は、目瞪み 舌を吐き、羊叫をなすは心なり。

驚癇は、頂上旋毛の中三壯、耳の後 青絡三壯

▲風癇は、百會 崑崙 絲竹空

▲癩癇 驚 目まひ 角弓反張に、神庭七壯

▲驚癇 まづ驚き 怖れ 啼叫て おこるは、後頂 百會三壯 耳後の青絲の脉

▲同く 舌を吐き 沫を出すには、少衝三壯

▲風癇 中風 角弓反張 多く哭 語言擇はず 發るに時節なし、盛なるときんば涎

沫を吐には 百會七壯

▲同く 指を屈 物を數るごとくなるは、鼻上髮際三壯

▲五癇は、水溝 百會 神門 金門 崑崙

▲猪癇 羊癇は、巨闕三壯灸して全功あり

▲羊癇には、九推の下 節の間三壯、又法 大推の上三壯

▲馬癇は、僕参三壯、風府 臍中 各三壯

▲犬癇には、兩手の心 足太陽 肋戸 各一壯

▲雞癰は、足の諸陽經の穴 **三臨**

▲食癰は、鳩尾の上五分 灸三壯すべし

▲猪癰は、尸厥のごとく沫を吐は、巨闕二壯

▲牛癰は、鳩尾三壯 大推三壯

▲中惡 狐魅 てんかん きやうふうは、鬼哭に灸

五疳

▲肝疳は、頭を揺がし 目しばめき 目を揉 汗を流し 俛き伏し 筋青く身も青し
髪立 筋をいたみ 瘦羸るる

▲心疳は、面赤く身熱し 咽渴き 小便赤く 鼻下ただれ 腹脹 口瘡 虚 驚く

▲肺疳は、咳嗽多く 喘き 鼻を揉み 爪を咬み 寒熱 鼻瘡 身白色 腹脹

▲腎疳は、𦵑瘦 身に瘡疥あり 寒熱し 雀目 足冷 囊しめり 水を好み 声かるる

▲脾疳は、身黄み 肚大に 泄瀉 不食し 土を吃ひ 地に卧ことを好む

▲五疳ともに、肝俞 脾俞 不容 章門に灸すべし

▲疳にて 瘦 脱肛 咽渴には、尾翳骨の上三寸陷中 三壯 午時に灸す、虫出て愈る、三伏中 楊の煎湯にて浴す

▲疳目には、合谷七壯灸すべし

▲牙疳は、即時に腐落る、養漿 針或は灸

▲夏瘦するには 臍上一寸に七壯灸すべし

▲腹脹 手足腫たるには、臍の上一寸 七壯

癖積 へきしやく かたかい

癖積 かたかい ひさ 久しく消ぜずは、中脘 ちゅうかん 章門 しょうもん に七壯 そち 命門 めいもん 俞 ゆ 十四壯 そち。

▲賁豚 ほんとん 身 み やせ 懈惰 きだう して 肩 かた せなか 挙 あが らずは、章門 しょうもん に灸 きゅう すべし

▲癥瘕 かたかい 脊強 せなこわ 相引 あいひく には、長強 かめのち 三十壯灸 そちきゅう

▲脇 わき の下満 したみち 瀉痢 しゃり 軀重 たいおち 四肢 てあし 収 おさま らず 疝癖 けんへき 積聚 しやくくじゆ 腹 はら いたみ 不食 ふしょく 腹 はら はりて背 せな に引 ひき 多く食 おほく しても漸 ぜん 々に黄 きいろ に瘦 やせ るは、脾 ひ の俞 ゆ 七壯灸 そちきゅう すべし

瘧疾 ぎやくしつ おこり 黄疸 おうだん

▲痰瘧 たん おこり そぞろ寒 さむ く 熱 ねつ さしひき、脾俞 ひのゆ 七壯 そち

▲黄疸 おうだん には、脾俞 ひのゆ 三壯灸 そちきゅう すべし

吐瀉 としや あげくだし

▲食傷 じきやう によつて 吐瀉 としや し 腹 はら いたむには、上脘 じょうかん 中脘 ちゅうかん に刺 はら すべし

▲卒 にわか に肚 はら いたみ 皮青黒 かわあおくろき は、臍 ほそ の上下 じやうげ 左右 さゆう 各 おのおの 半寸 はんすん つつ 四穴 しけつ 灸 きゅう 三壯 そち つつ

鳩尾 きゅうび 一寸三壯 すんそち

▲瀉痢 しゃり には、神闕 しんけつ

▲冷痢 れいり には、臍穴 ほそけつ 二寸三寸 すんすん

▲吐乳 とにゅう には、中庭 ちゅうてい に灸 きゅう 一壯 そち 亶中 だんちゅう

初生雜病 はじめてうまるる

▲初生 乳を吞ざるは、羨漿 頰車 璇璣

▲初生 尻の穴なきは、三稜鍼にて刺うがつべし、ふかく刺べからず

▲生れて七日のうち、口中齟舌の上に粟粒のごとくなるもの出て、白沫を吐き啼て乳をのまず、これを臍風撮口といふ。絹を指にまき温湯にひたしそろくそと擦破り紅をぬるべし、若此のごとくせざれば 忽死するなり。

然谷に灸三壯あるひは針三分血を見す、立効あり。

額門合ざるは、臍の上下各五分、二穴に九壯。

▲夜啼は、百會に灸三壯、中脘に針すべし

▲大便通ぜずは、大腸俞 神闕に灸す

▲小便通ぜずは、関元 石門 中極に針す

▲脱肛は、長強三壯 臍中三壯あるひは年の數、久しく瘥ざるは百會七壯灸すべし、脱肛瀉血は龜尾に一壯すべし

▲重舌は 舌の下に小舌を生ず、木舌は 舌すくみ 木のごとくになる、共に肺俞脾俞 肝俞 膏肓、木舌 重舌は、三稜針にて舌下の紫脉を刺て惡血を出す。

▲弄舌は、口より外へ舌を出すなり、四五歳まで語こと能ずは 心俞三壯

▲龜背は、肺俞三五壯あるひは膈俞 心俞

▲龜胸は、兩乳の前 各一寸半に灸三壯

▲口瘡 鵞口は、上脘 中脘 下脘

▲赤遊風は、百會 委中

▲目赤皆は、大指小指の間の後一寸半三壯

▲肩腫 偏墜は、関元三壯 大敦七壯

▲腋腫 馬刀瘍は、陽輔 太冲

▲瘍腫 振寒には、少海

▲頭中瘡は、陽輔 太冲

▲遍身瘡を生ぜば、曲池 合谷 三里 絶骨 膝眼 十四壯

▲熱風 癰疹には、肩髃 曲池 曲澤 環跳 合谷 湧泉

▲疥癬は、曲池 支溝 陽谿 陽谷 大陵 合谷 後谿 委中 三里 陽輔 崑崙 行間
三陰交

▲初生の兒、病なくはみだりに針灸すべからず、其痛に忍がたく五藏を動かし
却て病を生ずべし

神灸神鍼の方法

本艸綱目に曰、五月五日に桃の木の東へ引たる枝を取、削て木針とす。雞子の如く、長さ五六寸にして、之を乾し、もちゆるとき、綿紙三五層を以て、患る処に襯、針を將て麻油に蘸し、點著て吹滅し、熱に乗じてこれを針すと。

又艾葉一種を糊にてねゆし、紙につつみ、箸のごとくにし、日に乾して用ゆ。

灸するとき、紙を四重に疊み、表裏に墨点じて、灸穴に中、火針に火をつけ、墨点に當推べし。猶口傳あり、又雷火神針の法あり。

熟蕪艾の末一兩 乳香 沒荖 川烏頭 草烏頭 川山甲 桃樹皮の末 硫黃 雄黃 各

一匁 射香五分

右末して艾を拌ぜ、厚紙を以て裁て條と成し、荖艾を内に鋪、緊く巻て指のふと長さ三四寸にして、瓶内に収め貯へ、地中に埋こと五十日、取出し用ると

き燈の上にて點着吹滅して、紙十層をへだて熱に乗じて患る処に針す。

熱氣直に病処に入て其効さらにすみやかなり、並に冷水をいむ。

鍼灸重寶記終

神灸神針の法

本神針目は五月五日の桃の木
東へ引く枝を削て木針とし
雞子の如く長三五六寸に
乾し、その中に綿紙三五層を
以て巻く。外は糊針を將て麻油を
蘸し、點着く吹滅し、熱く棄て
これ針とす。又艾葉一種を糊
く、紙を紙よつと箸のこゝに
日に乾し、用ひをせり。紙を四
重に疊し、表裏に墨点をく、穴を
中火針に火をつき墨点に當推し
指口傳あり。又雷火神針の法あり
熟蕪艾の末一兩乳香 沒薬

川烏頭 草烏頭 川山甲

桃樹皮の末 硫黄 雄黄 各一各
射香五分 右末と艾を拌せ

紙を以て裁き、餘を成し、茶艾を内
に鋪緊く巻く。指の太さ長三四
寸に、瓶内に收め、貯へ地中に
埋し、五十日取出し、用をせり。燈の
上を點着吹滅し、紙十層と
る。熱く棄て、患る處に針を
熱氣直に病處に入、其効さす。小
さいや、あり、通る冷水といひ

鍼灸重寶記終

後付

夫鍼灸は、源素靈に出て而て蘆扁も亦これを學ぶ。然といへども、今我朝の諸醫専ら湯藥を用て而て唯針灸は庸醫盲人の業とす。必ず此を捨ること勿れ。

古來鍼灸の書多しといへども文盲の輩何ぞよくこれを伺ふことを得んや。

故に予其謫陋を忘れ、僭偷を顧ずして群書之要領を采り、至近至要之義を録して、以て野巫醫之助とするのみ。

因て之を名て鍼灸調法記と號す。

庶幾は自ら當に生べき者を使て死せざらしめんことを。豈生を救ふ一助にあらずらん乎。

峇享保戊戌春 芳菊堂 本郷正豊 撰

新刻鍼灸重宝記而

十有余年然後正誤

而享保乙卯年再彫

然磨滅所見之者甚

勞故三上梓

寛延己巳年霜月

江戸 須原茂兵衛

大阪 岡田三郎右衛門

京 勝村治右衛門

夫鍼灸之源素靈不出而而虛
 扁也亦これ學ぶ然といへ今
 我朝の諸醫専ら湯藥を用く而て
 唯針灸ハ庸醫盲人の業といふ此
 と捨ると勿と古來鍼灸の書多
 とといへ文盲の輩何をこれと
 伺ふこと得んや故に予其謬陋を
 志し僭偷に顧とし群書之要領を
 采り至近至要之義を録して以て
 野巫醫之助とするの因之を名て
 鍼灸調法記と號し庶幾自ら其業
 生る者を使ひ死せざるものんこと
 豈生を救ふ一助にあらずんや
 昔享保戊戌春芳菊堂本郷正堂撰

新刻鍼灸重寶記而
 十有余年然後正誤
 而享保乙卯年再彫
 然磨滅所見之者甚
 勞故三上梓

寛延己巳年霜月
 江戸 須原茂兵衛
 大坂 岡田三郎右衛門
 京 勝村治右衛門

諸國發賣行書肆

東京日比谷二丁目 公所	北畠茂兵衛
京都寺町四條上ル	大倉孫兵衛
名古屋玉屋町二丁目	田中治兵衛
富山西町	片野東四郎
彦根土橋町	大橋甚吾
中津古博多町	廣田七次郎
姫路浪町	梅津壽平
熊本新三丁目	伊藤和七郎
鹿児島仲町	長崎次郎
大坂博愛町二丁目	吉田幸兵衛

中川明善堂製本

中川勘助

おわりに

写真原文を基に本文、並びに送り仮名を現在の仮名文字で記載しました。仮名文字で記載されているために平易な内容となつてはいえ、当時の仮名文字は現代の仮名文字とは大きく異なるとともに、複数の表記があるため判別に苦労しました。また、当時の漢字は現在の漢字とは異なるものが多くありました。可能な限り原文と同じ漢字で記載しましたが、フォントが限定されているものがあります。文字の意味が異なつていても、表記が近い文字を用いました。原文に記載の漢字がない場合や、現在の仮名文字に変換した結果に納得がいかない文字列は赤字で記載しています。赤字に違和感がある場合は、掲載した原文写真で確認してください。本書の作成にあたっては、公開された原文や解説を参考にしました。参考資料として巻末に掲載して、先人に心より感謝するとともに、各位のご尽力に限りない賛辞を贈ります。公開された情報を活用して、現代の鍼灸師が鍼灸重宝記を身近なものとして、鍼灸界や針医がさらに進化すると信じます。

参考資料

- 一・京都大学 貴重資料デジタルアーカイブ『鍼灸重宝記綱目』
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00003450>
- 二・鍼灸の庵 大田和男氏 鍼灸重宝記
https://blog.hari-i.com/koten/shinkyu_chouhouki/sc_index
- 三・ゆつくり堂 山口一誠氏 鍼灸重宝記
<http://yukkuriido.jp/keiro/e1/e4/>
- 四・ビッグママ治療室 米山章子氏 鍼灸重宝記
<https://bigmama-odawara.jp/old/CH/>
- 五・日本医学雑誌 第五四巻第一号 (2008) 74
<http://jsmh.umin.jp/journal/54-1/74.pdf>

蛸東洋医学研究所版 現代仮名表記
鍼灸重宝記綱目
令和四年二月二十四日 初版第一刷発行
著者 大塚信之
発行所 蛸東洋医学研究所
大阪府豊中市蛸池中町三一八―十四
電話 〇六一七―一六六一九九三六

©2022 大塚信之

